る中央政府と、一切の爭論を正當なる裁決によりて決定し而も其決定を强制するに足る中央上訴裁判所との必要も亦轉〻緊切であつた。都市も商人も農家も其他凡て平和を愛する市民等も皆此種の希望を懷いて居たのである。又獨逸國が一國語と共通の國風と、個人の權利及び自由を尊重する國法（之れ古き習慣に取つて代りつゝありし羅馬法には見ざる處である）とを有する一國民と認められんが爲には絶好の時であるとは中外の均しく感じた處であつた。殊に羅馬法は全く自由農民を認めざりしが故に、最も此思想を喜びしは農民の首領であつた。又貴族的並に民主的革命の精神を代表せる二個の强き暗流があつて、數年の後に現出せんとして居つた。不思議な事に其何れも「神と皇帝」といふ同一の政治的公式を標榜するものゝ如くであつた。

之等の革命的思想が選擧團内に於て同情されない事はいふ迄もないが、然し人をして立場の重大なるを感ぜしむるには與つて力あつた。之が爲に選擧侯等は宗

教的惡弊及び私戰に基く紛擾の出來るならば絶滅せねばならぬ事、並に皇帝としては獨逸の事情に通じ且改革を强行すべき力を有する人を選ぶが自己の義務なる事を深く感ずるに至つた。先づ彼等に浮びし考は純然たる獨逸の皇帝を選ぶ事であつた。而して衆目は期せずして獨逸諸侯中最も名望高きサクソニー選擧侯に向つたのである。公式選擧の前日、帝冠は私かに彼に向て提供せられた。然し彼は自ら「帝國の重荷」を引受くるに堪ふる者であるとは思はなかつた。彼は個人として何等野心を懷かなかつた。彼はこの承諾を思ひ立つには餘りに年老い餘りに用心深く且餘りに能く獨逸統治者の前途に橫はれる困難を熟知して居た。殊に獨逸に於ける不羈不安の朋黨を打ちて一團と爲して從屬せしめんが爲には、自分よりも一層强き手が必要である事を彼は感じて居た。或は又こんな考をも懷いたかも知れない、若き皇帝が其帝冠を戴くに方りて負ふ處ありし自分の言は能く之を聞くであらうし、少くとも近き將來に於て自分の賢明と經驗とがチャールスの强き手

を導き得るであらうと。彼は帝冠を拒絶した。而して迫るに西班牙王の選擧を以てした。かくて自ら事は定まつた。

されば一五一九年六月二十八日、舊慣に從ひフランクフォルトの警鐘の合圖の下に、緋の禮服を纏ひし選擧侯等が選擧會の例場たる聖バルソロミゥ敎會の薄暗き小禮拜堂に集合した時には、選擧侯等の決心は旣に出來て居た。チャールスは滿場一致を以て神聖羅馬帝國の元首並に中世的國家の統治者として選ばれたのである。

其通知の屆きし時チャールスはバルセロナに居たが、西班牙國の事件及び次にはネザーランド諸國の事件の爲め入國を妨げられて、一五二〇年十月二十日迄帝冠を戴く事が出來なかつた。獨逸諸侯がアーヘン（帝國建設以來戴冠式擧行の地）に集合した時、彼等の眼に映じたものは二十歲の一青年であつた。馬に跨りて隣人と共に槍を操縱するも、一見不健康らしく、氣質は善良ながら其面には煩累憂

鬱の色を示し、事務などは凡て大臣共に委して置きさうに見えた。やがて現はれ來るべきかの專恣なる野心の如きは痕跡だに留めなかつた。彼は十二月ウォルムスに來り最初の議會を招集した。獨逸の貴族と自由都市の代表者とは其新しき君に見えんとて町に群り集うた。

此有名なる集會にて議せられし用件、殊に宗敎上の事件を記述する前に、チャールス五世即位當時の獨逸の政治上の狀態を一瞥するを可とする。何となればウォルムスの議會に於て過去と未來とが二人の人を以て互に相對立したのである事を記憶せねばならぬ——即ち皇帝チャールスと僧マルチン・ルーテル之である。若き皇帝は其憂鬱にして元氣なき容子にも似合はず、歐洲歷史の時計を少くとも二世紀ほど逆戻りさせて、中世の初期の頃の神聖羅馬帝國を再現しやうといふ、廣大なる而も終に不可能と悟らねばならない計畫を腦中に隱して居たのである。ルーテルの顯著に代表したるものは皇帝の目には見えざる力であつた。凡て彼の計

畫をうち破り、彼自身を修道院に遣り、而して少くとも新しき歐羅巴を開かしめたる力であつた。獨逸の政治上、社會上、宗教上の狀態は此の兩勢力に動かさるゝと共に又之を左右して、其自ら豫想せざりし徑路を取らしめたのである。

チャールスは祖父マクシミリアンと均しく神聖羅馬帝國の元首に選ばれた。而してこの言葉の中に潜める概念を得んと欲せば、アルバート・ジュレルの描きしマクシミリアンの肖像に、さながらトラジャンかコンスタンチンの如く、"Imperator Caesar Divus Maximilianus Pius Felix Augustus" と書いてあるのを讀むがよい。其語辭、其思想は我等を誘うてチュトン種族が西歐古羅馬の國に殺到し之を領有したる疇昔に歸らしむるのである。彼等は未開の蠻人であつた。而して其被征服國の廣き文明を其法律制度及び統治の態樣と共に採用し且之に同化せんと試みた。彼等はシーザーの古帝國の殼中に潜り込み、居心地惡しくも其中に暮したのである。此時に方り注意すべき一の重要事は敎會の政治的勢力の增長であつた。蓋し

敎會者は古き帝國主義の慣習の間に育成せられ又之を忘れなかつた。彼等は之を其征服者たる蠻人に傳へた。是に於てフリーマン氏の言ふが如く、中世にありては「西歐に於ける二大勢力は敎會と帝國とであつた(而して二者の中心は少くとも人の想像せる處にては羅馬にあつた)。此二者は獨逸民族の定着後も尙變ずる事なく、共に幾分時勢の變遷より新勢力を增し加へた。人は羅馬が世界の中心たるを以て適法且自然なる事と信ずるに至つた。何となれば地上に於ける神の代表者として神より命せられたるもの二あり、羅馬皇帝は其俗界の代理者たり、羅馬監督は其靈界の代理者であるといはれた。此信念は國家又は侯國の分立せると否と、はた敎會の統一せると否とに拘はらなかつたけれども、又世界の主たる羅馬皇帝は當然凡ての世俗的國家の首長たり、羅馬監督たる法王は凡ての敎會の首長であると稱せられた。但し此說は基督敎國の一大部分たる東方の諸敎會諸國民が擧つて古羅馬の皇帝、監督の何れをも承認しなかつたといふ丈の理由によつても實現

はせられなかつたのである。然し羅馬監督に關しては羅馬皇帝に於けるよりも遙に其實現を見るに庶幾かつた。何となれば皇帝が俗界の首長たる事は西方の大部分すら之を承認せざりしに反し、法王は眞に西方全體の靈的首長となつたからである」。現代歐洲諸國民の漸く現はれ來るに及び皇帝が首長たるの實は益々薄らいで來た。然しながら之等兩首長は自己の居住する國の國民的結合を成立せしめざる事に力めた。マキアベリー曰く「我等の互に分離反撥するに至りしは羅馬のお蔭である。而して之れ必然我等の衰滅を招くの因である。何となれば現時の佛國又は西班牙の如く一國家一君主の支配の下に立つに非ざれば國民の慶福及び統一は來らないからである」と。かくて影の如き帝國も獨逸人を分立せしむるに力めた。皇帝に直屬する諸侯は凡て君主なりとの說を流布し、獨逸國をして小君主たる小王を以て充たしめた。彼等は今日我等をしていはしむれば大道追剝の如き戰爭を以て漸く其王

樣振りを發揮するに過ぎなかつたにも拘はらず、執拗くも其王位に執着して居たのである。

獨逸の政治上の狀態も略、此の如きものであつた。帝位は選擧に基くのであつて、一三五六年の「黃金令」により選擧權は七選擧侯の手に委ねられた。ライン河岸に屬する者四名、エルベ河岸に屬する者三名である。而して三人は僧職に在り、四人は平人であつた。前者は即ちマインツ、トリエル及びケルンの大監督、後者はサクソニー及びブランデンベルヒの選擧侯、ボヘミア王並にラインの帝領伯之である。空位の間に於ける事務の處理は帝領伯とサクソニー選擧侯との手にあつた。獨逸の內政は皇帝の治下に「議會」に由て處理せられた。議會は代表的ならざる封建的の集會であつて、會議表決は之を三院に分つのである。選擧侯（ボヘミア王は議席を有せざるを以て之を除き）、及び諸侯即ち僧俗を問はず領主たる大豪族、及び帝國直轄市即ち直接皇帝より特許を得たる都市の三之れである。但し

議案は凡て他の二院を通過したる後に非ざれば都市の院には提出だもされないのである。議會の實權は甚だ徹々たるもので、其議決したる法令を實施するの權限はないのであるから、主として公開討論の用を爲すに過ぎなかつた。獨逸に於ける權力は久しき間領主たる大豪族の手に歸して居つた。又都市はみな兵權を有する獨立の共和國であつた。皇帝の權力の强弱は其自己譜代の領土の勢力を移し來つて、どれだけ獨逸國の上に振ひ得るかといふ程度に應じたのである。この組織なき國民は共通の政府に類似のものさへ有たなかつた。ランケはいふ、一五二一年チャールスのウォルムスに議會を招集したる頃は萬事混亂の時であつた。「中央政府の建設あるなく、財政制度若くは軍事組織の存立あるなく、最高法院を缺如して私戰は停止せられず、剩へ帝國内の諸階級——貴族は諸侯と、武士は都市と、僧侶は平人と、上中流は農民と——互に隙を構へて居た。加之廣大なる宗教的運動は國民の深き自覺より湧き出でゝ過ぐる幾月の間公然教會の至上權に反

抗の聲を擧げたのである」と。ウォルムスに於て若き皇帝に面したるものはかゝる幾多の困難であつた。尙附言すべきは、彼が實に途方もなき希望を懷いて居た事と、彼の獨逸に現はるゝや熱誠を以て注目せられた事である。而して此感情の高調は怪むに足りない。彼に屬したる如き權力を握つた者は數世紀の間絶えてなかつた。彼は墺地利の世襲地を繼承した上に、匈牙利及びボヘミアの大君主たりしが故に、其墺地利領は殆ど現代の墺帝國ほどの廣さであつた。彼は又商工業上に於ては歐洲中最も殷富の地として過去の伊太利諸市をも凌ぐほどの繁盛の都市を有するネザーランドの君主であつた。又伊太利に於ける西班牙領地並に新發見に係る大陸の富等をも配下に併有する西班牙の王であつた。此時に當り人は暫く考一考して、世は愈々益々複雜になり往きつゝあるのである事を覺るの遑なかつた、かくも廣大なる領土にありては利害の衝突は自然の數にして之を純一の政府の下に調和せんとするが如きは人力の及ばざる處であることを考ふるの遑なかつ

た。彼等は唯外側の勢力を見た。彼等は唯機會到れりと認めた。而してチャールスが一も彼等の企圖に貢獻する處なきを見るや、その失望は更に一層苦きもので あつた。若き皇帝も亦自己の夢を有つて居た。それは今日我等の眼にこそ不思議に見ゆるけれども、當時にありては極めて自然のものであつた。彼は皇帝の地位に關し至高の觀念を抱き、中世帝國を復興して、時人より「世界の不思議」と呼ばれしフレデリック二世さへも知らざりし程の光輝ある國たらしめむ事を夢みた。若し唯佛蘭西を服せしめ、伊太利を手に入れ、法王を基督敎國の牧師長たるの地位に降し、獨逸の組織を整へん乎、即ち帝國は舊位に復するのである。之れ抑も最初より彼の政策であつた。彼の思慮に基く一步一步悉く此目的に向つて居た。而して物みな彼を勵ますのみであつた。英國以外の全歐に行はれし法律學は一皇帝治下の一基督敎國を說いた。最も慧敏なる智者等は古羅馬帝國の文學より靈感（インスピレーション）を享受した爲め、昔時の帝國主義思想はやがて彼等の政治的雰圍氣を作つた。法

王の專恣貪婪を抑ふるものは唯强き皇帝あるのみとは幾世紀に亙る歐洲の言ひ傳であつた。又農民は自己を壓迫より救ふものは强大なる中央權力なることを知つた。チャールスは凡て之等を了解した。然し唯一事彼の解せざるものがあつた。彼は遂に之を解し得るに至らなかつた。そは深刻なる宗敎的確信の一度び民心に宿りし時の力である。彼はルーテルの代表したる運動に何等特殊のものを認むるを得なかつた。法王若し餘りに刻薄にするならば外交的に彼等を慰撫し置かむ、彼等にして若し煩はしからんには之を買收すれば即ち足る、若し又彼の國家政策に抵觸する處あらん乎、即ち之を足下に蹂躙せんのみと多寡を括つて居た。

中世は何時より始まり何時に終る乎。之を明言するは容易でない。語は唯便宜の爲の呼稱である。然しチャールスの如き地位にある人がホーヘンスタウフェン家の帝國を再現せんとの野心を抱き、而して時の人亦之を當然可能の企圖として怪まざりしといふは中世の未だ去らざる事を示すのである。個人の靈魂の毀つべ

からざる自由を主張するルーテルの運動の如きが最有力の國王よりも更に強力にして、終に國王の計畫を全然壽餅に歸せしめたといふは中世の既に過ぎたる證據である。時は今や一新紀元である。而して之を劃するものは即ちルーテルであつた。

二　議會に於けるルーテル

議會に於ける一般の事項は茲に叙ぶることを要しない。チャールスの西班牙に赴ける留守中帝國の事務を處理すべき代攝參事院の必要も協定せられた。帝國裁判所も設立せられ、其經費支辨の爲の課稅も裁可せられた。この二箇の機關はいみじきものではあるが、實は何等の實權も授けられなかつた爲め畢竟無用の長物たるに過ぎなかつた。重要事件は敎權と政權との爭議の決定である、而して其中にはルーテルの破門に關する論議をも含むのであるとは誰しも氣付きたる處であつた。

一日擬戰が始まつて其遊戲に威嚴を附くる爲め皇帝旗が丁度揭げられた時に、議員等は急に皇帝の面前に招集せられた。法王よりの書翰が朗讀せらるゝのである。法王は皇帝に請うてルーテルに對する破門の令書を執行せん事を求めた。また神聖羅馬帝國の元首として敎會の單一なる事が彼に取り好都合なるは從前の皇帝に於けると異ならぬといふ事を注意した。思ふにチャールスはウォルムスに臨むに先だち既にルーテルに關して意を決して居たものであらう。又彼の懺悔僧其他の者より受けし影響は人の想像するよりは遙に微小なるものであつたらう。彼は法王と一協約を締結するの必要があつた。即ち一には法王が西班牙の宗敎裁判に干涉し其苛酷を緩めんと試みて居つたに對し、チャールスは母系の祖父ファーデナンド・オブ・アラゴンと同じく、宗敎裁判は自由を愛する西班牙の民を抑制するに恰好の手段なりと信じ、此科罰の具の干涉を受くる事を少しも欲しなかつた

のである。二にはフランシス一世が將に伊太利に侵入せんとするは疑なき處であつて、チャールスは法王の己に加擔せん事を欲したのである。法王にして若し此二點を讓歩せん乎、卽ち彼はルーテルを異端として扱ふべく、然らずんば西班牙の秘書官の忠言に從はんと欲した、曰く「サクソニー宮廷にマルチン・ルーテルなる者が居る筈でありますが、彼はその說敎の事より羅馬廷の心配の種となつて居る者であります。陛下は此者を相當御庇護あらせられませ」と。

法王の使節はアレアンデルであつた。彼はチャールスの受けが宜からうとの理由で選ばれたのである。彼の手紙は讀んで面白い。彼は曩にネザーランドにてルーテルの書の燒却を爲さしめたが、皇帝も參事官もどんな本を燒いてるのか知らずして處分をしたのであると自ら言うて居る。又チャールスの秘書官の一人に五十グルデンを、門衞其他にはもつと小額を贈賄して、チャールスの身邊に多數の間諜を放つた事がある。彼は曰ふ、皇帝の參事官や秘書官が如何に法王廷を惡む

といつても「金さへ見れば法王の笛の音につれて躍らせる事は譯もない」と。然しこんな騷ぎも一向無駄に歸したらしい。チャールスは旣に冷靜なる外交家であつた。彼は己になくてならぬものを能く知つて居た。又其爲に拂はんと欲する代價をも辨へて居た。彼が使節に答へて、法王の書翰は少くとも選擧侯の討議を經る迄は之を實行する事は出來ないと說明した時には、皮肉なる愉快を覺えたに相違ない。書翰は選擧侯及び諸侯の前で朗讀せられた。而してアレアンデルは九時間に亘る演說を試みて、ルーテルに對し之以上の審問を用ゐる事なく破門の布告を爲すべき所以を力說した。然しながら獨逸諸侯はたとへルーテルの福音主義の敎義には極めて無頓着なりしとはいへ、法王廷の誅求を除くが爲には甚だ熱心であつた。而して破門に關する兎角の決定を爲すに先だち、羅馬に對する苦情を起草すべき委員を指名するに決した。目錄が讀み上げられし時、彼等はルーテルの如何にも特もしき昧方である事を感じた。彼等は人を處刑するに審問を拔きにするが

如きは皇帝の威嚴に關はると主張した。ルーテルに保身券を附與して議會に出頭せしめ、自ら辯護する處あらしめよと彼等は申出した。皇帝は之を容れ、三月六日保身券と召喚狀とはウィッテンベルに向つて發送せられた。

ルーテルに取つてはウォルムス行きは其の熱望するところ、假令保身券が附與せられずとも行かうと思つて居たのである。議會の前にて證を爲さんと彼の心は燃えて居た。而して取消はなすまじと決心の臍を固めた。議會が彼を審問すべきか否かと考慮を巡らしつゝある間に、ルーテルは親友なる畫家ルカス・クラナッハと相圖つて「キリスト及び僞キリストの受難誌」("Passional christi und antichristi")と稱する小冊子を刊行した。之はキリストと法王との生活を對照して對を爲さしめたる印畫の連續であつて、何所を開けても二個の對照畫が同時に見らるゝ樣に編纂したものである。キリストの生活を寫せる畫の下にはそれに適切なる聖句を掲げ、法王を表はすものゝ下には敎會法の文句を引用してある。對照の一例を擧

ぐれば、弟子の足を濯へるキリストと足指を擧げて接吻させつゝある法王、病者を癒せるキリストと擬戰を主宰せる法王、十字架を負うて屈めるキリストと人の肩に擔がれて豪然たる法王、殿より兩替屋を驅逐せるキリストと敎會を赦罪券の市場となし金錢と弗箱との堆積に圍まれたる法王及び其從者等の類である。ルーテルは曰うた、「之れ平人に善き書であつた」と。

皇帝の傳令官カスパル・スッルームは一五二一年三月二十六日ウィッテンベルヒに到着して召喚狀と保身券とをルーテルに交付した。ルーテルは四月十六日迄に必ずウォルムスに出頭すべく命せられたのである。彼は靜かに或る註釋的著述を終へて、四月二日議會に向ひウィッテンベルヒを出發した。ウィッテンベルヒ町は彼の爲に日覆雨覆兼用の幌付の大荷馬車を用意した。ルーテルは其敎團の僚友ジョン・ペッツェンスタイネル、舊友ニコラス・アムスドルフ及びウィッテンベルヒの學生たる若きポメラニヤの貴族ピーター・スターフェンを同伴した。四人は

荷馬車の底に乾草を敷いて坐した。將に發せんとするに臨み、ルーテルは其友リンクに書き遺つた、「余は知り且信ず、主イエス・キリストの今尙生きて支配し給ふ事を。此知慧と確信とに余は賴るのである。故に一萬の法王と雖も恐れない。何となれば余と共に在る者は世に在る者よりも大であるからである」。又別離の悲みに胸を痛めしメランヒトンに對して曰うた、「愛する兄弟よ、たとへ余は再び歸り來ずとも、たとへ敵が余を死に致すとも、足下は眞理を教へ眞理を確守して進むであらう。足下が生くる限り余の死は何でもない」と。かくて彼は幌付の荷馬車に入つた。小き行列は市民の嗚咽と叫聲とに送られて出發した。傳令官は兩頭黑鷲の國章を附したる黃色の方旗を馬勒の物具の上に飜し、喇叭を吹きつゝ先驅した。途はライプチヒを過り、次にチュリンギアに入りてナウムブルヒ、ワイマール、エルフルト、ゴータ、アイゼナッハ、ヘルスフェルト、グリュンベルヒ、フリードベルヒ、フランクフォルト及びオッペンハイムを經、ウォルムスへと辿つた。

旅行は極めて多事であつた。憤激したる法王黨をして言はしむれば、宛然王樣の行列を見るやうであつたと。人々は獨逸の爲に法王廷に反對して起ちたる其人、而して今や之が爲に死に赴かんとする其人を見また祝福せんとて群り集うた。エルフルトでは四十名の大學職員が學長を先頭に騎馬にてルーテルを迎へ、彼を昔馴染の僧院に護送した。ルーテルは此處に宿つて日曜日を過した。彼は夥しき群集に對して、「汝等安かれ、かくいひし後其手と脅を彼等に見す」との聖句に就き說敎した。これ即ち其日の福音(約翰傳二一章一九——二三節)であつた。其說敎は今に至るまで傳はつて居る。彼は又ゴータ及びアイゼナッハのアウガスチン派修道院にても說敎した。旅行の興奮、群集の崇敬、其他數知れぬ疲勞が漸く身に應へて來た。アイゼナッハにて病に襲はれた。フランクフォルトよりスパラチンに宛てたる書翰には身體の衰弱甚だしきを報じて居る。然しその勇氣と透徹せる觀察力とに至つては少しも淀まなかつた。

ウォルムスの法王黨はこの旅行中の出來事を見て恐慌を來した。彼等はむしろルーテルの到着を妨ぐるに如かずと考へた。是に於て妥協を仄めかし、皇帝の懺悔僧グラピオはヅッキンゲンに來りて、ルーテルとエベルンベルヒに秘密の會見を爲さん事を申込んだ。然しルーテルは應ずべくもなかつた。グラピオにはウォルムスで遇へるのである。たとへ何事が起らうとも皇帝の召喚には從はねばならぬと。今は選擧侯さへ驚き出した。スパラチンはルーテルに書を送つてジョン・フスの運命を想起せしめた。フスは皇帝の保身券を所持したるに拘らずコンスタンスの會議にて焚き殺されたのである。此音信は旅行の將に終らんとする頃オッペンハイムにてルーテルに屆いた。ルーテルは答へて曰うた、「たとへ屋根の瓦の數ほど惡魔が居るともウォルムスには行かねばならぬ。フスは燒かれても眞理は彼と共に燒かれない」と。

朝早く物見の塔にありし見張人は喇叭を吹き鳴らして、傳令官のルーテルを保

護しつゝ來るのが見ゆると知らせた。諸侯は彼を町まで護衞せしむる爲め六人の武士に兵卒を附けて遣はした。折しも朝餉に就いて居た町人等は報知に接するや皆々街路に走り出で、敎團の僧服を纏ひ奇しき旅行帽を戴き荷馬車に坐せる僧を見た。その興奮して呆然たゝ押し合ひ犇し合ひせる烏合の衆の間を護衞兵は辛くも通り拔けて、「聖約翰(ヨハン)武士團館」の戸口までルーテルを導いた。此處にて彼は安全に其選擧侯に近づいて暮すことを得たのである。

翌日午後遲くルーテルは議會に呼び出された。皇帝が司會を爲し、其下に六選擧侯が坐した。或は平人たり或は僧侶たる諸侯が堂に滿ちて居た。卓上には本が積み累ねてあつた——ルーテルの書である。かゝる光景に接した事は曾てなかつた。彼は聲も足らざるやうに覺えた。人々は彼の心も遂に挫けたのであると思うた。彼は尋ねられた、之等の書(表題が一々讀み上げられた上)は皆彼の著書であるかどうか、又若しさうであるならば、その書きし處を尙は固執する乎、將た

之を取消さんと欲する乎と。彼は答辯を熟考する爲め猶豫を乞うた。而して翌日まで之を許され宿所へと歸つた。

其夕其夜は恐るべき憂愁、苦闘、失望、また祈禱の時であつた。夜の明くるに先だち勝利は得られた。彼は心に大なる平安を感じた。

翌日(四月十八日)夕彼は召喚せられた。人は衢に群がり屋根の上まで集うて彼を見んとしたので、役人は彼を議會へ連れ行くに横丁や小路を擇ばなければならなかつた。約そ二時間ばかり待たせられし後彼は引見せられた。議員の雜踏甚だしくして選擧侯等は自席に就くも容易でなかつた。夜陰既に天地を襲ひ堂内は搖めく炬火の光に照されて居る。昨日と同じ卓上に同じ書籍の堆積があつた。今度はルーテルに答辯の用意が出來て居る。其聲は透き徹りたる音樂的の調子を回復し、其態度は平靜にして大膽であつた。古き傳説にいふ、彼れ將に堂に入らんとする時獨逸武人中最も名高き老將軍フルンツベルヒ(後にパヴィアの征服者たり

又獨軍を率ゐて羅馬を掠奪したる)は彼の肩を叩いていうた、「不憫なる僧侶よ。足下は今余及び余の多數の武士が最惡戰の際にも經驗せざりし如き立場に立たうとして居るのである。足下若し自己の主義の正しきを信ぜば神の名によりて進め、而して恐るゝ勿れ。神足下を見棄て給はないであらう」と。トリエルの大監督の「代言人」たるジョン・エック——此人はよくインゴルスタットの教授ジョン・エックと混同されるが全く別人である——が前日の通に手順を運んだ。彼はルーテルにその自己の著書なるを承認した上、之を辯護せんとする乎、或は其幾部を取消さんとする乎を尋ねた。ルーテルの答辯は可なり長かつた——二時間の演説であつたといふ——が其要領は次の如くである、彼の書は凡て同種のものではない。其或るものは信仰及び道德問題を萬人の是認する如くに論じたものである。此の如く敵も味方も齊しく贊同するものを取消すべくもない。次に法王廷に反對して書きしものがある。之れ基督敎界を靈肉共に墮落せしむる法王廷の敎義並に實例

を攻撃するものであつて、若し之を取消さん乎、其憎むべき壓制を一入募らしむるに過ぎない。第三に羅馬の壓制の援助者に反對して書きしものがある。其攻撃或は基督者にふさはしからぬ程激烈であつた事を認むるには躊躇しない。然しながら其何れも之を取消す事は出來ない。但し何人と雖も彼に誤謬を示し得る人の言を聞かんと欲すると。この彼の演説は獨逸語であつた。

演説終るや、獨逸語を解せざりし皇帝は之を拉甸語にて繰返さん事を求め、ルーテルはそれに應じた。是に於て皇帝はエックを通してルーテルに告げて曰うた、此處では疾に世界宗教會議にて討議決定せられたる事項を彼此爭ふべきではない。たゞコンスタンスの會議の決定に牴觸する彼の言を凡て取消すかどうか「角なしに」(無條件に)簡明なる答辯を與へねばならぬ。若し取消すならば其他の彼の書き物は穩便に取扱はるべきであると。ルーテルは答へた、「陛下が簡明なる答辯を御要めになりますから私は『角も牙もなしに』申しませう、それはかうであ

ります、私を心服せしむるものは聖書の證に非ずんば明晰なる論證でなくてはなりません。私は法王や宗教會議のみに頼る事は出來ません。何となれば彼等が誤錯を爲したばかりでなく、又自家撞着を爲して居る事は白日の如くに明瞭な事であるからであります。私は唯今申しました聖書に縛られて居る者であります。私の良心は神の言に繋がれて居ります。私は取消を爲してはなりません、又しやうとは思ひません。なぜならば良心に背いては正直でも安全でもないからであります」。かく彼は獨逸拉甸兩語にて語つた。而して一寸杜切れた後獨逸語にて附け加へた「之より外どうする事も出來ない。此處に私は立つのである。神よ、助け給へ。アメン」。皇帝はエックを通して彼に尋ねた、宗教會議が誤錯を爲すといふ事を眞に公言する乎と。ルーテルは堅き岩の如くに身を固めて答へた、宗教會議が屢々誤錯を爲した事は明かである。コンスタンスの會議は聖書の最も明白なる言に背く決定を下して居る。聖書が余をして宗教會議誤れりと言はしむるのである

と。「世界會議が誤錯を爲したといふ事實を示す事は出來まい」とのエックの言に對し、ルーテルは答へた、示す事が出來る、而も澤山にあると。此處で皇帝は干渉した。彼は聞くべきだけ聞いたのである。而して聽衆は落着かず騷々しくなり出した。彼は議會を閉會した。ルーテルは衞兵に護られて宿所に送り返された。其興奮、其群集、其演說を以て疲れ切つて居た。彼の面は濕うて居た。彼の衞兵に護られて戸口に立つを見るや、衢の群集は彼が牢獄に曳かるゝのであるといつて叫び出した。將に一揆の起らんとする虞があつた。然しルーテルは、衞兵が自分を宿に連れて行くのであると疾呼して彼等を鎭めた。辛じて途を切り拔けて宿の入口まで辿り着けば、既に友人等は集うて居た。彼等の間に入るや否、雙手を擴げてルーテルは叫んだ、「遣つて來た、遣つて來た」と。彼等の感激して話し合つてる處へ、スパラチンの許に選擧侯から音信が來た。善き老侯はたゞ皇帝の面前に於けるルーテルの態度を如何に悅びし乎を其附屬牧師に告げたかつたのであ

る、「敎師マルチンが皇帝及び貴族等の前に拉甸語獨逸語にて語りし時の見事さよ。彼は余に取ては餘りに大膽過ぎる」と。苟も獨逸人は敵となく味方となく彼の取りたる立場を誇り、彼の演說を賞讃した。然し皇帝は餘り深き印象を受けなかつた。「彼の爲に自分は異端にさせられはせぬぞ」と言うた。西班牙人と伊太利人とは偏に憤激するのみであつた。翌日皇帝は形式的にルーテルの處分を提議した。然し獨逸側は猶豫を迫り、彼と商議する爲の委員の指名を建議した。法王との條約は未だ終結に至らなかつたので、皇帝は之に同意した。トリエルの大監督を委員長とする委員等は屢々ルーテルと會見を試み、大監督は最も宥和維れ力めた。然しながらルーテルが聖書の外何等の權威にも服從を肯じなかつたといふ點で以ていつも商議不調に歸した。

ルーテルは議會に於ける顚末の說明と、彼の答辯の摘要とを書き綴つた。其印刷は獨逸全國に撒布せられた。平民の感動は白熱に達した。ルーテルは祖國の爲

に法王と皇帝とに面して立ちし彼等の戰士（チヤンピオン）である。彼等は自己の英雄（ヒーロー）が尙ウォルムスに在り、尙皇帝と西班牙人との掌中に在るを思うて壕へがたきを感じた。列國の使臣等もルーテルの凄まじき人望に注意した。英公使はウォルセイへ書き遣（おく）つた、「今や獨逸人は到る處ルーテルに耽溺し、彼が法王の權力に壓服せらるゝよりは、寧ろ千萬の人民が其生命を犧牲にせんと欲してゐる」と。西班牙の公使も亦（明かに其主君と法王との協約を知らずして）言うた、「此處に悲劇は終を告ぐると人は思ふかも知れない。然し余の信ずる處によれば之れ却て其端緒たるに過ぎない。獨逸の民心は法王廷に對して甚だしく激昂を來して居る。彼等は皇帝の勅令にも頓着しないらしい。何となればルーテルの書は市場や街衢の隅々迄も公然と賣られて居るのである。之に由て見ても皇帝が去る時にはどうなるかを容易に想像し得るであらう。若し法王にして世界會議を拒む事なく、自己の私利よりも公益を重んずるならば、此禍は癒されて基督敎界の爲に最大の慶福を齎らすであらう。

然し彼がルーテルの處罰焚殺を主張する限り、神助け給ふに非ずば全基督敎界は破滅に瀕せんとするのである」と。獨逸の諸侯はルーテルを其宿に訪うて彼を祝した。其中には若きヘッセのフィリップも居た。彼はルーテルの手を握つて言うた、「博士よ、貴下は正しかりし。神貴下を護り給はん事を」と。フランツ・フォン・ジッキンゲンは若しルーテルにして何か傷害を蒙るに於ては、皇帝の滯在をも關はず町を攻撃せんと威嚇した。町廳の壁上には張紙が貼付せられて、四百の武士が萬一ルーテルの害せられし場合に羅馬黨に復讐せんとて八百の兵卒と共に結束すとあつた。それには署名はなかつたけれども、下方に "Bundschuh" Bundschuh Bundschuh（一）といふ氣味惡き言葉——古き百姓一揆の合詞——が書いてあつた。ルーテルは遂に町を去つてウィッテンベルヒに歸るべき皇帝の許可を得た。其間にも使節はルーテルの無條件處罰を迫つて居たが、チャールス腹心の大臣との會話は端なくも彼をして事態の眞相を看取せしめた。大臣曰く「若し貴下の法王が徒に此

事件を混亂せしめやうといふ氣ならば、我等も其積りにて、法王の容易に身を抜き得なくなるほど縺れさして終はう」と。使節は考へた、「貴下の法王」とよ。是に於てか急いでチャールスの欲するまゝに協約を締結した。即ち法王は最早西班牙の宗教裁判に干渉せざる事、及び伊太利に於てフランシスに對しチャールスを援助すべき事を保證した。かくて終に皇帝はルーテルの壓服に力を注ぐに至つた。

然し之れ必ずしも容易なる事ではなかつた。獨逸諸侯の中には全然之を望まざる者がある。殊に其中の一人なるかの良選擧侯は抵抗するにきまつて居る。故にチャールスは彼等の去る迄數日間待つた。それから一旦形式的に議會を閉ぢた後、皇帝は諸侯に或る重要なる案件を議了する爲め一二日殘留せん事を求めた。彼等は五月二十五日に議場ならぬ皇帝の居室に集合した。皇帝はルーテルに對する布告を提案した。而して多少の異論の後みな同意した。翌日曜日に使節は布告の公式文書をチャールスに提出し、チャールス之に署名した。但し其日附は五月八日と

記した。即ち法王と協約を結びしその日である。蓋し人をして正式に討論を用ゐて議決發布せられたるものゝ如く信ぜしむると共に、又恐らく法王をして協約の存在を記憶せしめむが爲であつた。

此の如く詭計を以て得られし帝國の布告は、ルーテルに其ウォルムス發後二十日間の保護を許すものであつた。其以後——四月二十六日より二十日の以後——は何人も「前記のルーテルに對し言語又は行爲を以て家寓、飲食若くは宿泊を與ふる事」を得ず、犯す者は嚴罰に處せらるゝのである。是に於てか殘る處は唯ルーテルの身を逮捕し、之を異端として焚殺するのみであつた。さはれルーテルは突如として行方を晦ました。何人も彼の所在を知る者なく、揣摩臆說紛々として起つた。「あの古狐(ふるぎつね)」、サクソニー選擧侯を指す）が何處かに隱したに相違ないと言ひしアレアンデルの想像は最も眞に近かつた。

（一）一五〇二年皇帝以外の治者階級を一掃せんとの目的を以てスパイエル大監督領内に起つた百姓一揆である（Bundschuh とは百姓の用ゐる長靴をいふ）。

第六章　ワルトブルヒ城中

ルーテルは再び曩の幌荷馬車に身を託して、同じ旅伴と共にウォルムスを去つた。二三の友人も騎馬にて從つたが、其中には議會にて彼の法律顧問たりしウィッテンベルヒの法學者ジェローム・シュルフも見えた。小き一行は力めて人目を忍び、傳令官も遙かに後より隨驅した。途は元來し通りに引返した。ヘルスフェルトに着いた時、其地のベネヂクト僧院の院長クラトーは鄭重に彼等を迎へて一夜を宿らせ、翌朝出發に先だちルーテルに一場の說敎を懇請した。ルーテルは朝の五時に說敎を試みた。水曜日にルーテルの「懷しき町」アイゼナッハに到着し、其夜をそこに明した。次の日小一行は袂を別ち、多數は眞直にゴータに向つたが、ルーテルとアムスドルフ及びアウガスチン派の僚僧とは午後にアイゼナッハを去つて南へと轉じた。之れルーテルをしてメーラに於ける親族を訪ねしめんが

爲であつた。昔ながらの家に住ひしハインツ・ルーテルは其甥を迎へて泊めた。ルーテルは土曜日(五月四日)早朝敎會にて說敎した。午後に至り三人はメーラを出で、シュワイナ及びアルテンスタイン城を過りてゴータに向ひ進んだ。ルーテルの親族の一團は徒歩遠く城の畔まで彼を見送つた。アルテンスタイン城東二哩餘にして、途は漸く曲折して鬱蒼たる阪路にさしかゝり、一脈の溪流其側を走つて居る。車は今しも路傍一小祠の廢址に近づきし時(其場所には今はルーテルの記念碑が建つてゐる)、忽ち武士二騎及び騎者數名森蔭より躍り出で、車を目がけて突進した。御者は停車を命ぜられた。ルーテルは車上より引き卸された。其白髭の旅行帽は騷ぎの中に飛んで地上に落ちた。一隊は馬首を東方に向けて進む事少許、やがて途を林間に取つた。ルーテルは馬背に載せられ、掠奪者等と共に山毛欅林中の迂路に沿ひ、ワルトブルヒ指して進んだ。彼等の出發地は其處であつたのである。山毛欅の樹茂れる林間の空地を過りて前途八哩の騎馬旅行である。

去年の落葉尚深うして馬蹄爲めに埋もれ、露を含める嫩枝切りに萠えて新綠美はしきこと花の如く、野兎は音なくして下生に跳り、鹿は怖を抱いて遠く樹幹の蔭より騎手を見守つて居る。一行は徐々として進まざるを得なかつた。何となればこのワルトブルヒの畔なる深き林地には冬の雪の壓潰されて氷となりたるまゝ五月の初め尚其窪地に横はりて行歩を遮るからである。かくてルーテルが中庭の戸口に手綱を曳き締め、選擧侯の信任淺からぬ城守ヘル・フォン・ベルレプシュの懇篤なる挨拶を受けて、用意の室へと鄭重に案内せられた時には、既に夜も十一時を過ぎて居た。之れ即ち選擧侯の彼の爲に設けし隱家であつて、ルーテルの自ら「パトモス」と呼びしものである。此處に彼は全く人を離れて十箇月の長きを暮した。彼は其僧服を脱いで兵士の長靴下と胴衣とを着け、劍帶を腰に纏ひ、踵に劍の音を響かした。彼は其斬髪の頭、無髯の顔に鬚髪を生やした。今や彼は博士マルチンに非ずして、暫し身を潜むる選擧侯の友、武士ジョージである。彼は城區内何

處に赴くも好むが儘であつた。出でゝ周邊の森を散歩し又は騎歩する時には信頼すべき從卒が隨從した。彼は又選擧侯自身の從者を經てスパラチンに送りさへすれば友人に手紙を書くことも出來た。彼の手許に書と筆とはあつた。時には最も信用すべき友人に限り面會を許された。然しそは滅多に起らなかつた。唯ルカス・クラナッハは私かに入り込みて「貴公子ジョージ」の肖像を描き、後世人をして武士に扮せるルーテルの容子を見ることを得しめた。

其暗き檻は森の上に聳ゆる物凄き城砦、それには幾多の義勇の思出や、歌物語、また聖者の追懐を伴うて居て、中世獨逸の粹を代表するものである。寔にこれ當時祖國の產出したる最も貴き一人の生命を托するにふさはしき手箱であつた。然し數百年前其地を領して、いつも背後に武器を鳴り響かせつゝ峻しき作道を騎馬にて上下せし剛强なる老方伯等はやゝに忘れ去られて、たゞ歌人と聖者との記憶のみが存つて居るのである。時は一二〇七年、戀愛歌人の大家悉く集まりて其技

を競ひ、少年ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデは春の讃歌を、白髪のレマール・デル・ツエーテは秋の美を、オステルヂンゲンのハインリヒは冬の歌をうたひ、而してエッシェンバッハのウォルフラムが其夏の歌を以て月桂冠を贏ち得たるはワルトブルヒであつた。聖エリザベスが其夫其子女と共に生涯中のいとも幸福なる時を過し、飢えたるを食はせ裸なるを着せ、家なき者を住はせ病める者を看護したるはワルトブルヒであつた。其處に彼女の建てし救貧院にて三百年の後尚兄弟等の慈善の事にいそしめるをルーテルは見たのである。

然るに今この古城に隱されたる客その人は歌と聖と兩つながらの記憶を世に殘した。彼の歌、彼の讃美歌は獨逸國民の所有である。また彼は聖とは何であるかを教へて言うた、聖とは可憐なるエリザベスの考へしが如く、凡て家庭的情愛の絆を斷ち、此世に於ける日常生活の正直なる仕事を棄つる事ではないと。

ワルトブルヒにてルーテルの住ひし各室は當時のまゝの狀態にて今日も存つて

居る。訪客は彼の寢床、卓子、書箱、椅子、足掛などを見るを得べく、彼の倚りて物書きし大なる窓は尙其處にある。彼の喜びし鴉の後裔は遙か脚下の樹上に相變らず「議會を開いて」居る。繁れる小山の波又波を超えて下方カッセルに至るまで眼界いとゝ壯大である。暗き松、稍〻色淺き落葉松、山毛欅、樺、楢などが濃き薄き綠の海を爲して居る。彼は閉居無聊に苦んだ。彼は森を徜徉し野蔕を見るを樂みとした。一兩度は狩獵にも參加して、兎や鳩鳩の或は網に罹り或は犬に咬まるゝを見た——「怠惰者の職業である」と彼は言うて居る。他人が攻擊の鋭鋒を磨きつゝある間に己れ籠居せる事の齒痒さに加ふるに彼を惱ます譬きがあつた。彼はこを惡魔の所爲に歸した。然し彼はウィッテンベルヒに於ける問題の爲め彼のバトモスを出づるの餘儀なきに至るまで忠實に選擧侯の願に從うた。

ルーテルの無聊と稱するものは多くの人の多忙に數ふるものである。即ち各種の通信である、巴里大學神學科への解答である、令書の攻擊である、使徒書翰及び

福音書に關する時節柄の說敎である。獨身生活及び僧侶立誓に關する小論である、就中新約聖書の希臘原語より獨逸語への飜譯である。之れ彼がスバラチンへの書翰中に「終日閑居して希臘、希伯來の聖書を讀む」といひしものであつた。

然しながらルーテルのワルトブルヒ滯在をして永く世に知られしむるものは特に次の三事であらう――マインツの大監督との爭闘は其一である。僧侶立誓に關する小論は其二である。而して新約聖書の飜譯は其三である。

マインツの大監督即ち舊のテッツェルの眷顧者にして今はカーヂナルたるアルバートは、相變らずみじめにも金の必要に迫られて、資金調達の新方策を思ひ巡らして居た。彼は其ハルレの敷會に於ける紀念物蒐集に新に數々の珍奇なるものを加へたと言ひ觸らした。始祖イサクの身體の一部、野に降りしマナの幾片、モーセの見たる燃ゆる棘の數枝、キリストの晃の棘、カナの婚筵にて葡萄酒に變へ給ひし水の幾滴！　かういふ風なものが凡そ九千點もハルレの僧會敎院にて展覽

に供せられ、而して之が拜觀の爲に來る巡禮者は其基本金に喜捨を爲す時は赦罪を受け得るといふのである。此宣言は忽ちルーテルの義憤を招いた。彼は「ハルレの新偶像」と題する小冊子を作り、其主旨のカーヂナル攻擊にある事をスバラチンに告げた。選擧侯は最早國內平和の攪亂を厭ひ、スバラチンに傳言してルーテルの小冊子を出現せざらしめん事を求めた。仍てこの宮廷附牧師は私かに之を抑壓して終つた。然しルーテルは何人にも謀らずして大監督宛て一書を草し、「ルーテルは未だ死せず。彼を讒りて皇帝に反對せしめ給ひしその神は尙生き給ふ。マインツの選擧侯に加ふるに四人の皇帝の後援を以てするも神は之に逆ひ給ふ。若し新しき赦罪券販賣が中止されないならば、彼れルーテル立つて其非を鳴らさんと欲する」旨を告げた。斯人の力は偉大であつた。アルバートは眞面目に書いたと思はれない程卑下した返書を寄越した。赦罪券販賣の新企畫は放棄された。ワルトブルヒの俘囚がウォルムスに於ける擧措進退により俄然取得したる勢力を

證明するものにして之より強きはないのである。

ルーテルの「獨逸國民中の貴族に與ふる書」中僧侶の結婚に關する大膽なる宣言は自然の結果を生みて、二三の牧師は妻女を娶つた。此事は延いて僧侶立誓の適法を疑はしめ、諸所に修道院生活の激しき分裂を來した。仍てルーテルは此問題に關する彼の意見を公表せんと欲した。殊に曩日彼の味方の一人たりし副監督（アーチデーコン）カールスタットが結婚の狀態を以て唯一合法のものとなし、有妻の男子に非ずんば教會の役員に當つべからずと教ふるに至つたが故に一入其必要を感じた。ルーテルの見解を略言すれば、結婚の狀態は尊敬すべきものである、又自然である。僧侶の結婚は明白に神の言の中に許されて居る。僧尼が獨身の誓約を以て貞潔を誓ふは、聖パウロの言ひしが如く（哥林多前書七の七）特別に節制の賜を受けたる場合にのみ可能の事である。加之、僧侶立誓其他之に類するものはみな行に由て義とせらるゝの思想の產物であつて、從て眞の基督者生活の表號たるよりも寧ろ

信仰の否定である。然りと雖も事は斷じて强制を容さない。何となれば神は强力を以て仕ふべきものに非ずして、自由なる奉仕を以てすべきが故であると。彼の書翰及び論文はサクソニーに關する問題を實際に解決した。監督補助（ヴィカー、ゼネラル）リンク主宰の下にウィッテンベルヒにて催されしアウガスチン教團の僧會に於て、僧侶は凡て若し自ら欲するならば自由に修道院を去るを妨げずといふ事、並に好んで留まる者は嚴格に規則を守らざるべからず、而して說教を爲すか又は其團體の生活を支ふる爲め手工を爲さいるべからずといふ事が決定せられた。此事は遂にサクソニー選擧國を通じて一般の習慣となつた。若し恐るべき農民戰爭がサクソニーに於ける修道院生活の殘存せるものを破壞せざりしならばきつと長く續いたのであらう。

ルーテルのワルトブルヒより獨逸に貢獻したる最大のものは新約聖書の飜譯であつた。そは宗教上限なく貴きものであつたが、然し其の獨逸に與へし利益は玆

に止まらなかつた。ルーテルの此事業を始めし久しき以前既に他の獨逸語譯聖書が出來て居た。博學なるカソリック教徒にして「中世終末以降の獨逸國民史」の著者なるヤンセンの言ふ處によれば、一五一八年以前に現はれし聖書全體の完譯は高地獨逸語に十四種以上、低地獨逸語に五種を算したといふ。蓋し中世の教會が聖書を人民の手より取上げんと試みたと思ふは誤である。聖書が羅馬カソリック教會に留保せらるゝに至りしはトレントの宗教會議に基くのである。然し之等拉甸譯よりせし飜譯は概ね異樣にして、平民の容易く了解し得ざるものであつた。然るにルーテルの獨逸語は思想を發表する文學上の用具として殆んど獨創的のものである。現にウルリヒ・フォン・フッテンの如きは、ルーテルの獨逸語著作の研究よりして、獨逸國語なるものが能く如何なる思想を發表し得る乎を知つたというて居る。其上チュリンギアの出たるルーテルは二種の獨逸語の間の境界地に人となりて、高地獨逸語にも非ず、低地獨逸語にもあらず、二者を結合したる第三

種の言語を使用した。彼の聖書は此の如くにして獨逸國に共通國語を供したのである。此新なる知的所有物あるに由りて、政治上及び宗教上分裂の時代にありながら、如何なる皇帝と雖も企及し能はざりし程に獨逸國民の統一を保有し得たのである。彼は其飜譯を以て「平民」の書たらしめんと欲した。彼は言ふ「家に在る母、街に遊ぶ小兒、市場に群る平民に尋ねて彼等が如何に物言ふか其口を注意し、而して次に之を自己の語となし、然る後彼等をして了解せしむべきである。余は屢々之を力めたが必ずしも常に成功せず又は意味を十分に言ひ表す事が出來なかつた」と。彼は其事業に就て異常なる苦痛を嘗めた。彼の飜譯の原稿の幾部が殘存して居るが、之に由れば正しき言ひ方を確實に捕捉せんと欲して推敲十有五回に及ぶを見るのである。文字上の正確よりすれば彼の飜譯に勝るものは少くないけれども、讀者を導いて直に原文の中心に到らしむるの點に於ては一も彼の作に及ぶものはない。其は聖書の解釋を教會者の手の獨占より取り去つて、人をして神面の

あたり彼に語り給ふを感ぜしむるのである。今や敬畏の心を有する獨逸人は何人も山上モーセの側に立つことを得るのである。ルーテルのワルトブルヒにて完了せし飜譯にメランヒトン其他の人がウィッテンベルヒにて改訂を施した。三個の印刷機は之が爲に動き、一五二二年九月二十一日に獨逸語新約聖書の第一版が出版せられた。初版忽ちにして盡き、十二月には再版が出來た。此書にはルカス・クラナッハの解說が附いて居た。出版には日附もなく印刷者又は飜譯者の名もなかつた。賣價は一グルデン半であつた。

舊約聖書の飜譯はワルトブルヒにては着手されなかつた。かゝる大事業に就てはルーテルは補助者の必要を感じたのである。彼のウィッテンベルヒに歸りし後一團の學者が此事業に從事し、徐々として之を完成し、成るに從て幾部づゝ出版した。一五三四年に "Biblia, das ist die ganze heilige Schrifft, Deudsch. Martin Luth. Wittenberg. MDXXXIV" (獨逸語聖書全篇、一五三四年、ウィッテンベルヒにて、マルチン・ルーテル) といふ標題を以て其全部の初版が出た。此時既に新約聖書の改訂十六版を下らず、印刷のみを重ねしものは五十版以上を算した。

かゝる許多の研究、通信、及び各種の著作の間に、ルーテルの偉大なる心を擾き援すものがあつた。それはウィッテンベルヒより時々漏れ來る音信であつた。慰撫の爲にとて小冊子に出版したる彼の說教も、書翰を以てしたる注意勸告も、何等手應(てごた)へとてはなき模樣であつた。彼は曩に夢みて居たのである、獨逸を一新して各教區毎に學校を備へしめ、便利なる中心地には高等學校及び圖書館を備へしめ、其費用は凡て無用有害なる富裕修道院の基金を以て支辨せんと、又小兒には家庭及び學校にて「基礎敎育」を授けんと、而してその基礎敎育なるものは、己が家庭敎育を忘れざりし彼に取ては、主の祈、使徒信經、及び十誡であつた。又結婚したる牧師等が舊僧侶の惡德僞善を棄て、神の完き恩惠を宣傳し、行に由て義とせらるといふ心靈破壞の誤謬を反駁して、福音主義の傳道を爲すに至らんと、又僧侶の

權力を制限して、社會的義務の指定の如きは之を役人と社會とに移さんと――而も之等凡てが人心に對する神の言の靜肅なる働きによりて徐々として實現せられ、何事も卒然急激に又は强制的に成されざるやうにと。然るに何人も僅に數ケ月前迄は思ひ寄らざりし勢を以て或る出來事が進行しつゝあつた。彼の論題、彼のライプチヒ論爭、就中彼の議會に於ける態度は、久しく排置されたる導火線に火を點じたのであつた。その何でありしかはやがて之を語らねばならぬ。即ち獨逸に於ける本來燃え易き二要素の爆發――武士の小亂と農民戰爭の大火之である。然し此處では暫く宗教上の出來事のみに限らう。

一の問題は自ら靜かに解決しつゝあつた。二三の牧師は聖會の同意を得たる上にて結婚した。此行動はルーテルの賞讃を博した。然し多數者は一切の僧侶立誓を法令に由て强制的に禁止せん事を要求して居たのである。而して此問題はアウガスチン教團の總會に於ける機宜に適せる決定に由て解決されたとはいへ、民衆

は寺院を去る事を拒みし僧侶が僧服のまゝにて街上に現はるゝ時はあらゆる小侮辱を浴せかけて居た。

禮拜の改革も熱心に要求せられた。即ち兩種聖餐禮の執行、晩餐の原始的觀念を表すべき聖餐物享受の新態樣、ミサの犧牲の廢止、法服使用の廢止等である。民衆は亂暴にもミサの儀式を攪亂し、敎會に闖入して像畫を引裂き、其他幾多の不都合なる騷擾を釀した。

それから副監督カールスタットを首領とせる不思議なる運動が現はれた。一切人間の學問を否認し、大學を解散し、學校敎師を說得して兒童を其兩親の許に送還せしめたのである。カールスタット自身は「自己の簡易化」なる思想を實現せん爲め百姓の衣を纏うて眞の農場に働らいた。やがて又「天來の豫言者」と呼ばれしニコラス・ストルヒ及びマーク・スチウブナーなどの面々がチッカウ（織物業を以て有名なる）より來りてウィッテンベルヒの町に現はれ、一切の公的宗敎生

活を全然且急激に改造すべきを說いてより、騒擾一層甚だしきを致した。

ルーテルは憂慮の餘り事の實狀を知悉せんとて、私かにウィッテンベルヒに赴き、アムスドルフの家に隱れて居たが、遂に心くづをれてワルトブルヒに歸つた。彼は代攝參事院がアルバート系の首長にして宗教改革の强敵たるサクソニー公ジョージの告訴に基き、選擧侯に對してウィッテンベルヒに起りし一切の革新を强力を以て轉覆すべき旨要求したと聞いて、最早や躊躇ふべくもなかつた。彼は一書を選擧侯に送つて、今や其隱家を出ねばならぬ事を告げ、又たとへ議會の決定に從て帝國の官吏が彼を捕ふとも決して保護せらるまじきを乞うた。

ワルトブルヒよりウィッテンベルヒへの途上に於けるルーテルの「瞥を我等に與ふるものはジョン・ケスレルの筆である。時恰も瑞西の青年學生たりし彼は大學入學の目的を以て一伴侶と共に旅行中であつたのである。

ケスレル等はエナの町にて一泊せんが爲め「黒熊」旅館に投宿した。其處に唯

獨りで食卓に就いてる人が居た。前には小さな本が一冊置いてあつた。彼は親切に我等に挨拶し、もつと近く寄つて自分の傍に食卓に就きなさいとすゝめた、我等は靴が泥だらけだつたので臆面もなく室内に入り兼ね、戸口に近き片隅の小さな腰掛にかけて居たのである。……此人は騎兵であるとしか我等には思へなかつた。なぜなら其國の習慣に從て長靴下と長下衣とを着け、鎧はないが腰に劍を佩び、右手は欄頭の上に、左手は其欄を握つて坐して居たからである。彼の眼は黒くして深く、きら〳〵と星のやうに輝いて居たので、能く見入ることも出來兼ねた」。それから彼等は或は瑞西の事、或は自己の研究の事、或はルーテルに遇ひたいとの熱望の事などを話した。「こんな話を交はして居るうちについ懇意になつてしまつて、伴の者が其人の前にある小さな本を取上げて見た。それは希伯來語の詩篇であつた。伴は直に又下に置いたが、騎兵はそれを自分の方へ引き寄せた。伴はいうた、「此言葉が分る爲めなら手の指一本棄てゝもよい」と。其人は答へて、

「若し君が勉強するなら直に分るやうになるでせう。私ももつとよく分りたいと思つて毎日練習してる處です」といふた。其中に日は傾いてすつかり暗くなつた頃、主人も食卓にやつて來た。我等が切りにマルチン・ルーテル に遇ひたいと話したが爲め其人の言ふには「君達若し二日前に此處に居たら其願は叶つたらうに。ルーテルは此食卓に、而も其處にかけて居たのだ」と。尙暫らく話を續けた後主人はケスレルを少し傍に呼んで、自分は其處に居る其人がマルチン・ルーテルだと思ふと話した。ケスレルは伴侶に囁いて其事を傳へた。然し二人共ルーテルがこんな裝をして居るとは信せられないので、主人はきつとウルリヒ・フォン・フッテンの事を言つてる積りなんだらうと定めてしまつた。やがて食事が來た時彼等は御免を蒙らうと欲うたけれども、其人は彼等の分も拂ふからといつて一所に食べるやうにすゝめた。それから二人の商人が入つて來て外套と拍車とを取つて食卓に就いた。其一人が未製本の書を取出したが、それはルーテルの加拉太書註解一部

であつた。商人はルーテルに其本を見たかと尋ねたが、ルーテルは自分にも送つて來る筈であると答へた。「食事の間マルチンは色々敬虔なるまた親しき話をしてくれたので、商人も我等も彼の前に默して、食事よりは一層彼の話に氣を取られた。就中彼はニュルンベルヒの議會に集つた諸侯や貴族等が當の目的たる神の言の事、幾他の難問題、獨逸國民の苦難等を忘れて、擬戰や穩乘や其他つまらぬ宮廷式の娯樂のみに餘念なく見ゆるといふ事を痛歎し、反つて神を畏るゝの心と基督者の祈とが遙に多くの事を成し遂ぐるのであるといふた。……其後で商人が意見を述べ、年長の方がいうた、「私はたゞの無學な平人で、さういふ風な事は一向能く分らぬけれども、私の見た處ではきつとルーテルといふ人は天國から來た天使か、さもなければ地獄から來た惡魔に相違ない。私はルーテルに懺悔を聽いて貰ふ爲めなら十フロリンの金でも惜まない。ルーテルは私の心に光を與へることが出來もするし、又さうして呉れもするだらうと思ふ」と。……「土曜日に(此日彼

等はウィッテンベルヒに着いたのである）我等は紹介狀を渡す爲め博士ジェロー
ム・シュルフの許へ往つた。かくて室に通された時に、見よ！　扇にエナにて見た
る騎兵マルチンが其處に居るではないか。彼と共にフィリップ・メランヒトン、ユス
トス・ヨナス、ニコラス・アムスドルフ及び博士アウガスチン・シュルフ等が居て、
ルーテルの不在中ウィッテンベルヒに起つた事を彼に語つて居た。彼は我等に挨
拶し、笑ひながら指さして言うた、「これがあの時諸君にお話したフィリップ・メ
ランヒトンである」と。

（一）ルーテルが惡魔に對しインキ壺を投付けた爲に出來たといふ壁上のインキの汚點は比較的新しいもので、ルーテルの死後永い間人の知らざりしものである。同じやうにして出來たといふ類似の汚點が久しくコーブルヒ城にもあつたさうである。

第七章　宗教改革の進行　一五二一―一五二五

ルーテルは木曜日にウィッテンベルヒに歸り、次の二日は町の情態を知悉する爲に過した。日曜日にはお馴染の顏が數壇に現はれた。そして引き續く八日の間町民に對して說敎した。彼は仁愛と忍耐とを殆ど何よりも必要であるときまで力說した。彼は聽衆に對し凡ての暴力を戒めた。彼自身は決して之に關係しなかつた。而して結局彼は其立場を確守した。暴行を憤み、殊に宗敎上の事に於て之を戒むべきを勸告するの詞に曰く「天地萬物を創造した者は『言』である。而して今も同じく造るものは其『言』であつて、我等憐むべき罪人ではない。余の爲さんと欲する處は、高々、之を敎ふるにある、之を語るにある、之を書くにある。然し何人に對しても强力又は强迫を用ゐまい。何となれば信仰は自由意志に基き、拘束なきものでなくてはならぬ、又强迫なくして受けられねばならぬ。或は結婚し、或は像を廢し、

或は僧尼となり、或は僧尼が修道院を棄て、或は金曜日に肉食を爲し、或は之を爲さゞる等其他類似の事――凡て之等は自由なる問題であつて、何人も之を禁ずべきではない」。「働くべき者は『彼の言』である。我等ではない。それは何故と問ふ乎、他なし余は陶人（すゑものし）が土塊を其手に有つが如くに人心を余の手に有つ事が出來ないからである。神は働き給ふ。我等をして唯說かしめよ。我等の事業は語るにある。其餘は彼に屬するのである。余若し强力を用ゐなば何を獲べき乎、行爲の革新である、外側の表示である、顏面の變化である、庸僞である、僞善である。然し心の誠實はどうなるのである乎。信仰と基督敎的愛とは果してどうなるのである乎。之等のものゝ缺けたる處には凡てが缺けて居るのである。其餘のものゝ爲には余は梨の軸をも與ふるを欲しない。我等の要するものは心である。而して之を得んが爲に福音を說かねばならぬ。然らば言は今日一人の心に落ち、明日又一人の心に落ちて、遂に人みなミサを棄つるに至るであらう。神は諸君と余と全世界と

が結合するも企て及ばざる結果を來さしめ給ふ。神は心を獲得し給ふ。而して之が獲られた時に凡てが得られたのである」。

ルーテルの忠言に由て禮拜の古き方式は回復せられ、僧侶は再び法衣を纏ひ、聖餐禮は舊態にて行はれた。但し特に望む者の爲には別に祭壇を設けて、盃並にパンの兩種に與らしめた。而して人皆漸次其祭壇に赴くに至り、變化は平和の裡に實現したのである。ルーテル自身はアウガスチン派修道院に立ち歸りて、再び僧衣を着けた。大學の講堂は再び賑はひ、兒童は又も學校に送られ、敎師は暫しの錯誤を棄てゝ元の考に歸つた。

かくてウィッテンベルヒの靜謐に歸するや、ルーテルは乞はれしまゝに主としてサクソニー選擧國中の町々に巡回說敎を試みた。即ち織物業者の町なるチッカウや（其處では二萬五千の聽衆が集まつたといふ）、國土大分割以前サクソニーの君侯居住地たりしアルテンベルヒや、ドルナや、ワイマールや（選擧侯の弟ジョ

ン公の招請により)、エルフルトなどである。家にありては主として聖書飜譯に忙殺せられて居たが、尚著名なる一短篇を物した。疑もなく其問題に就てやがて何か必要の生すべきを豫見したのである。標題は「世俗的權力に就て、並に之に服從すべき範圍如何」といふ。論文の主旨は、世俗的權力も亦神の掟にして人の善の爲に神の立て給ひしものなるの點に於ては、自ら神聖なりと公言する敎會的權力と選ぶ處なしといふ事を示さんとするにある。基督者が個人的害惡に對して復讐を加ふる事は主の誡の禁ずる處である、而も惡行の所罰は公益上必要である、故に主は此目的の爲め劍を世俗的權力に託し給うたのであるといふのが彼の論言である。諸侯、長官等は神より任せられて此善き目的に當ること猶ほ敎會者の敎會奉仕に於けると異ならない。故に又均しく眞實に我等の尊敬と服從とに値する。唯この服從には制限がある。世俗的權力は人の良心に對しては毫も至上權を行ふことを得ず、又敎義の證明に關與すべきではない。之れ監督に屬する事であつて

諸侯に屬せざる事である。

ウォルムスの議會以來この數月の間、改革運動熱の國中に傳播しつゝありし間に、極めて徐々と獨逸國民の期待に副ひながら成立に近づいて居たものがあつた。それは帝國統治院（ライヒスレヤメント）と稱する常設の帝國參事院であつて、皇帝の不在中獨逸を統治し、且恐らく皇帝の專橫に對する多少の牽制たらんと欲するものである。之れ國民多年の願望であつた。而して今や漸く實現しつゝあつた。

一旦其事務を開始した以上、若し時勢がかくも困難ならざりせば、若し利害の衝突かくも激烈ならざりせば、又は然らずとも若し其事務の主體たる皇帝より公平なる援助を得たりせば、參事院はこの怖ろしく紛亂せる獨逸を救濟するに何等か貢獻する處あつたであらう。最初は殆ど國の憂患たる經濟上の問題を議するのみであつた。而して提出せられたる見取計畫によれば、此參事院は獨逸の統一を企圖し、國內諸領土諸階級の人民皆外敵に對し相互に幇助せん事を期して居たも

のらしい。彼等は獨逸の全土及びライン河下流沿岸に位する獨逸以外の地（ネザーランドを含んで居たから）をも包括すべき關稅大同盟を立案したのである。これ實に現代に在りて統一獨逸の先驅とも稱すべき計畫であつた。

參事院は幾もなく宗教問題に注意を拂ふの餘儀なきに至つた。サクソニー公ジョージは其從兄弟の大學町なるウィッテンベルヒに於て宗教上の騷亂續發せし事をいたく憂慮し、その更に擴大して遂に己がサクソニー公國にも波及すべきを恐るゝこと甚だしかつた。是に於て彼は一五二二年の初め參事院に一建議を提出し、ナウムベルヒ、マイセン及びメルゼベルヒの三監督に委託してウィッテンベルヒ以下秩序紊亂の地を巡視せしめ、若し必要あらば處罰科刑を以てしても公禮拜を舊慣に復せしめん事を求めた。然し此時既にルーテルは自己の墳場に歸り、恰好の時機に其位置を守つて居た。されば選擧侯の代表者は參事院及びジョージ公に對し注意して言ふを得たのである、曰く「委員の職務は既に成就されて居る。騷擾

は鎭壓せられ、公禮拜に於ける舊慣は概ね回復されて居る。其他の事に至ては抑も末である。よし聖餐禮が兩種にて行はるゝとも何ぞや。よし一二の牧師に結婚した者があり、二三の僧侶にして其修道院を去りし者があるとても何ぞや。そんな事は信仰に反する異端ではない。唯法王の近時の或る命令に牴觸したまでの事である。其結果たるや顧るに足らぬものである」と。ジョージ公はルーテルのウイッテンベルヒ滯在を以て帝國に對する侮蔑であると公言したけれども無益であつた。帝國に對する侮蔑を審判するは參事院の權內にある。而して若し其事實を認むる時は之を罰するのみと言つて彼は斥けられた。

一五二二年の夏が巡り來りし時、サクソニー選擧侯が參事院に職を行ふべき番となつた。宗教上の騷擾といふ難問も漸く彼の賢明にして寬大なる處置に託ねられた。若し一五一九年七月末のかの夕、斯人にして帝位を拒絕せざりしならば、不幸なる獨逸國に如何ばかり惠福（めぐみ）の臨みし事ぞ！　讀者はアルバート・ジュレルの筆

に成る彼の肖像を熟知して居るであらう。情深さうな肥えたる一老紳士が「選擧侯帽の下より高尙、穩和、正直にして而も隙のない怜悧なる風貌を以て見張つて居る」。彼は參事院の設立を提言したる老諸侯の一團に屬して居た。彼は親しく其設立に參與した。彼は屢々公務上の手續に關し諮問に應じた。其の穩かなる性質、其の廣き經驗、其の怜悧と事務的才能とに基く尊敬、凡てが彼に異常の權威ある地位を與へた。ランケ曰く「若し帝國を支配すとの語を用ゐ得べくんば、此時に當り帝國を支配した者は彼であるといふも不可なし」と。

法王アドリアン六世が獨逸に於ける宗教問題に關し書翰と使節とを派遣したのは此時の參事院であつた。新法王はレオとは甚だ選を異にしたる人物であつた。彼は素とドミニク派の僧にしてチャールス五世の敎師であつた。彼は自己の見解に從ては敬虔なる人であつた。而して敎會を腐敗せしめつゝある害惡に就ては能く氣がついて居た。彼は之を表白するを恐れず又之を絶滅するが爲に自己の盡す

べきを正直に盡さんと約束するを恐れなかつた。然し彼は中世のスコラ神學の固き信者であつた。彼は敎會及び法王の權力に對する服從は之を强制せざるべからずとのドミニク的感情を悉く具備して居た。從て彼はルーテルに對する前任者の令書及びウォルムスの勅令の强制せられん事を要求した。使節は此要求を携へて一五二二年の暮にニュルンベルヒに開かれし議會に臨んだ。議會は法王の要求を容れんとすべくも見えなかつた。羅馬に對する獨逸の苦情は決して少くないのである。而して之を何人よりも力强く發言した者はルーテルであつた。先づルーテルを焚いて、然る後その彼が責められし所以のものを要求せんとするが如きは獨逸の難しとする處である。加之諸侯は若しウォルムスの勅令を實施するに於ては必ずや內亂の勃發すべきを信じて居た。マインツのアルバートすらも民衆の騷擾を恐れて、ルーテルに反對する說敎を爲す事をフランシス派僧侶に禁止した。議會の議員等は何れも、民の不安の狀態にある事、而して其原因は多々ありと雖も

就中敎會の誅求が與つて力ある事を多少なりとも知らぬ者はなかつた。機會さへあらば凡ての官憲に對する一揆として爆發せんとする虞があつた。議會は其宗敎上の苦情を羅馬に提出して、之に對する確答を得る迄法王の要求に關する決定を見合す事と決した。是に於て有名なる羅馬に對する獨逸の「苦情百則」を起稿し、之を回答の代りとして使節に交付した。然る後議會は國內の宗敎問題を如何に處置すべき乎を討議した。而して長き論議の末終に決定したるものは幾多妥協の產物であつた。そは獨逸に於ては、眞實、純粹、誠直、神聖なる福音を、敎會の承認する有名なる著作の敎示解釋に從うて說くの外、一切說敎すべからずといふのである。殆んど其決定の言々句々妥協の痕ならざるはない。たゞ之に價値ある所以は若し獨逸が自國のみの立場に立ち、若き皇帝の外交政策を別問題としたならば宗敎改革運動を如何に取扱つたであらうかを示す事にある。而して國中既に改革の進行しつゝありし地方に於ける新しき宗敎に法律上の地步を與へた事は其唯一の

永久的成果であつた。ルーテルも、福音主義の信仰を有する社會が自ら牧師を選び、之を中心として禮拜に集ふは法律にも聖書にも適ふ事であるとの意見を曩に公表した。彼はニュルンベルヒ議會の決定が禮拜の革新に對し准法律的の承認を與へたものである事を知り、仍て「ウィッテンベルヒ公禮拜順序」「洗禮の順序」なる書、及び八讃美歌を含める福音的讃美歌集を出版した。之等の出版はみな普く流布して、獨逸の各地に彼の指導を埃てる人々の心を勵ましたことは疑もなかつた。殊に讃美歌集は年內に增補せられ、何よりもよく事業の助けとなつた。この一五二三年の議會以後我等は獨逸全國に靜肅にして廣大なる運動の進み行くを見るのである。未だ共同の行動はなかつた、具體的の計畫はなかつた、積極的の激動はなかつた。然し到る處に福音主義の說敎家は現はれ聖會は作られたのである。之等の說敎家は概ね僧庵を脫したる僧侶であつた——大多數はアウガスチン派であるが、又ベネヂクト、フランシス、若くはドミニク派さへあつた。或時

は牧師が其教區民を呼び集めて自分はルーテルの教を容認する者である事を說明した。而して概ね會衆は喜んで彼等に從つた。又或時は牧師は言うた、最早や舊慣によりて禮拜を行ふ事は良心が容さない。而して上長者は教會の使用を許すまいから說教は野外にて之を爲さんと。人々は彼に從つた。然し教會が何にも使用されて居ないのを見て又其處に戻り、新しき方式にて禮拜をなさんことを主張した。或牧師は墓地の樹下にて說教した。而して會衆は彼を護らん爲め武裝してやつて來たが、何等武器を携ふる必要のなかつた事を知つた。或時は福音主義の團體が出來上つて牧師が居なかつた。そこでルーテルに手紙して一人の牧師を送られんことを請うた事もあつた。かくてウィッテンベルヒは一種の福音主義の首都（メトロポリス）と化し、ルーテルは自ら識らずして首都監督（メトロポリタン）となつたのである。其運動たるや凡ての獨逸語國を通じて甚だ普遍的であり、又甚だ靜肅にして且自然的であつた。故にランケはいふ、そは春の日の溫き光が鋤かれたる畠に落ちし種子を育（はぐ）み之を萌芽

せしむるに譬ふるの外はないと。

諸侯中進んで此運動の公然たる後援者となつた者もあつた。就中ルーテルの鄕國チュリンギアのマンスフェルト伯爵家が其急先鋒であつた事は彼のいたく喜び し處であつた。自由都市等も亦福音主義に加擔した——ニュルンベルヒ、ウルム、ストラスブルヒ、マイン河岸のフランクフォルト、ブレスラウ其他である。サクソニー選擧國の重要都市——織物業者の町たるチッカウ、アルテンベルヒ、アイゼナッハ其他——も改革派の牧師を迎へた。

獨逸の名士等は人々の切なる願默（もだ）しがたく、來りてルーテルに議る處あつた。例へばクルムバッハ地方の町民等は近傍の大都ニュルンベルヒに迫られ、依然として羅馬教の儀式を守るに堪へ難くなり、全然之を一掃せんと欲した。彼等の首長即ちアンスバッハの邊疆伯にしてマインツの大監督選擧侯の從兄弟なるジョージは「僅に六人の從者を從へて」騎馬ウィッテンベルヒに來り、ルーテルの門に轡を止め

て懇談を交ふる事多時、やがて再び馬首を廻して家路を指したる時は其疑惑は悉く霽れ、死に至るまで福音主義の忠實なる援助者たらん事を期して居た。彼の兄弟なる東プロシヤのチゥトン武士團總裁ブランデンブルヒのアルバートも亦一方波蘭國王と他方其の獨逸に於ける采地並に議會との間の紛擾をもてあまして、一度ならず彼を訪ひ（一五二三年六月、また一五二四年に再び）、而して力強き助言を得た。即ち武士團は既に神にも人にも役立たざるものとなつて終つたのである。此際彼の爲し得る最上の事は總裁の服を脫ぎ棄て、唯の獨逸貴族たるの衣を纏ひ、結婚をなし、また東プロシヤを福音主義の侯國たらしむるにあるといふのであつた。アルバートは悉く之を實行した。而して東プロシヤは公然全國に福音主義の信仰を採用したる第一の侯國となつた。

かくて宗教改革は、豫め其行動を協定せんとの試みもなく、教會政治を新しき形式の下に、又は公禮拜を新なる一樣の順序の下に行はんとの企てもなくして、

單純に且自然に獨逸の遠近を通じて擴がつた。此時に方りルーテルの眼には、宗教的大侯國が世俗的君國となり、監督が教會改革の先導者となり、又獨逸に外形上殆ど變る處なきも唯福音主義の說教と教訓とを容るゝに足るべき國教會あるに至らんとの希望なきを得なかつた。尤も一五二四年の末、法王使節が墺地利及びバヴリヤ諸侯並に南獨逸の宗教國等をラチスボンの會議に招集して、赦罪券の販賣と種々なる教會の苛歛とを停止すべき條件の下に、教義に關しては是以上の讓歩をなすまじく、又新神學的思想を容認すべき一切の辭柄を堅く禁止すべき旨の申合せを爲さしむる處ありしは事實である。皇帝が宗教改革の全運動に儼然反對の態度を持し、其の世襲領たるネザーランドに於て信仰の爲に最初の殉教者幾人を火中に投じたるは事實である。獨逸の廣き地域を見渡しては不安又は不滿の徵候なきにしも非ざりしは事實である。而も凡て之等の事情に拘らず、かの老練細心の政治家たる老選擧侯の如きさへ、宗教上の難問を解決するに平和なる且又少くと

も獨逸としては和衷誠實なる途のあるべきを信じて疑はなかつた。然るに疾風一陣、之等樂觀的の希望は悉く粉碎せられ、獨逸の「平民」より期待すべきものに關するルーテルの考は根本的に一變させられた。

之れ即ち農民戰爭であつた。

(二) 宗教改革時代のサクソニー選擧國とサクソニー公國とに分れ、前者は其首府迄に大學町としてウィッテンベルヒを有したのであるが、其境界は甚だしく錯綜混雜して居つた。選擧國はエルネスト系、公國はアルバート系の領有する處であつた。ルーテル當時の選擧侯はエルネストの子で、公ジョージはアルバートの子であつた。此兩人は子供の遊戲「王樣取りつこ」の主人公で、又戒食節戲劇に屢々題目となつて居る。アルテンベルヒ地方では今尙地方の祭典に出て來る。弟方アルバート系は公ジョージの場にして其繼承者たりしサクソニーのモーリスの代に兄方エルネスト系を選擧侯位より逐斥した。今はサクソニー王により代表せらるゝ。兄方系は多くの小公國に分裂し、今はザクス・コーブルヒ・ゴータ公により代表せらるゝ。

第八章　政治的及び社會的叛亂

一　貴族の叛亂

當時の社會上並に經濟上の困難を表示する二個の叛亂が突發して、ルーテルを中心とせる宗教的運動の進行に至大の影響を與へた。フランツ・フォン・ジッキンゲンを首謀者とせる「貴族の叛亂」、及び「農民戰爭」と呼ばるゝかの恐るべき大火之である。

此時代の間斷なる處殊に獨逸に於て社會を動かしつゝありし經濟的變動に關しては曩に之を一言する處あつた（六―八頁）。而して中世の社會に於て之が影響を蒙ること最も重かりしものは小貴族と農民及び下層町民との二階級なりし事を述べた。叛亂の勃發も亦此壓迫せられたる二階級より出でたのである。

獨逸帝國の小貴族即ち自由貴族（フライヘルン）なるものは中世の社會生活に於て一時最も優勢

なる地位を占めて居た。彼等は軍人階級であつた、而して従軍を事とする人々に自然に歸屬すべき社會上の地位を獲得して居たのである。社會の封建的構成は彼等に眞個の獨立を與へ、又土地が一大富源たりし間彼等の貴族としての地位は犯しがたきものであつた。然るに瑞西の農民叛亂は武士(ナイト)又は其從者(スクアイア)の不手際なる武勇に比し訓練ある歩兵の勝れる事を證明した。大地主は傭兵の小軍隊を蓄へ、自由貴族をして自己の地位の甚だしく遜下せるを感せしめた。都市の商業は新なる富源を供し、而して自由貴族は之に與るの正統なる途を知らず、唯商賈の隊列が彼等の居城を据うる懸崖の下を過ぎり若くは彼等の領域内の架橋なき急流を辛苦徒渉する時に當り重稅を賦課するか、然らずんば其鷹の巢に似たる塔より躍り下りて商賈商品諸共に奪取するの外なかつた。現に獨逸を支配する兩帝室の姓そのもの(ホーヘンツォルレルンは高き通行稅を意味しハプスブルヒは鷹の塔の謂である)が中世に於ける貴族の金錢獲得の方法を示して居る。然しながら硬強なる獨

逸の市民等はこの大道掠奪を阻止せんが爲に全力を盡し、彼等同志の間に在てはハンザ同盟を、又諸侯と結びてスワビヤ同盟を作成した。是に於てか獨逸の自由貴族たるものは自ら最上位を以て任ずる社會に於て其地位の甚だしく貶されしを感じ、不滿禁じ難きものがあつた。彼等の或者は時勢と共に推移して進んで大地主の從者となり、以て其獨立を失ひたるも安全は稍々之を獲得した。或者は溫順なる人民が何か彼等より粗野なる保護を受けて德とする地方に至り口留金(ブラックメール)を徵募した。又或者は訓練ある傭兵を率ゐて報酬の高き處に其武力を賣り、以て伊太利の「コンドッチエリ」と其武勳を競うた。

この第三種の首領はフランツ・フォン・ジッキンゲンであつた。彼は通常「獨逸武士道の最後の花」と呼ばるゝも餘りふさはしき名ではない。彼は寧ろ早熟のワルレンスタイン若くは後期文藝復興(ルネサンス)期の幸運なる伊太利兵士の一人、例へば「黑隊」のギオヴァンニ・デイ・メヂチの如き人であつた。但し獨逸人たる彼は伊太利

の大軍人に缺如せる自然の道徳と敬虔とに富み、又其親友としてはピエトロ・アレチノの如き人物の代りにウルリヒ・フォン・フッテンを有した。その世に出づるの初めには數人の君侯に仕へ、漸を以て進みつゝ、旅人よりも寧ろ都市を攻撃し或は救出して以て富を作つた。彼は築城堅固にして且要害の地點を占めたる三箇の城を有し、多くの諸侯に勝る莊大なる儀容を保つて居た。此人は又人文學者其他學者の庇護者であつた。而して既にルーテルの教に心惹かれて居たウルリヒ・フォン・フッテンがエベルンブルヒにて日毎その庇護者に神音主義の信仰を釋明して居た事は既に述べた處である（一三七頁）。妻なるヘドキッヒ・フォン・フレスハイムは善行に熱心なる篤信の婦人であつた。從て彼の城はよく整ひたる一家であつた。選擧に際しては彼はチールスに左袒し、其運動の爲に金さへも貸した。而して皇帝が其對手を惱まさんと欲する時には佛蘭西の一地方にて戰を爲さん事をチャールスより依頼せらるゝ程有力であつた。ホッバーの描きし彼の肖像を見

れば、高き角形の額、濶密なる頭腦、決然たる鼻、口、頤、勇氣と策略、諸謀と決斷の性格に充ちたる顔であつて、加ふるに不思議にも「現代的」の容貌である。

武士等が其窮迫に際し眼を注ぎしは此人であつた。而して彼は喜んで彼等の戰士（チャンピオン）となつた。ライン河上流の自由貴族等は一五二二年八月十三日ランダウに集合して彼等の禍害を宣言したる「友愛約定」に署名した。彼等はスワビヤ同盟に對しては自ら告訴者と裁判官と執行者とを兼ぬるとの故を以て之に反對した。帝國參事院に對しては徒に弱者の罪を檢擧處罰して呑舟の魚を逸するの故を以て反對した。諸侯の飽くなき貪婪に對しては其新式の裁判所と其封建制度の行政と其次第に重課せらるゝ封建稅とを以て自由貴族を衰頽せしむるの故を以て反對した。彼等は舊の獨立を要求し、自己の同族以外の者より審判を受くる事を拒絶した。フランツは隊長（ハウプトマン）と稱せられ、彼等の禍害を匡救すべく期待せられた。

貴族等の目的は恰もチャールスの夢の如く永久に過ぎ去りし社會狀態に復せん

とするにあつた。かの「現代的」容貌の陰にある頭腦がかゝる事を可能と考へたとは信じ難い。殊に了解に苦むは彼が諸侯の勢力を攻撃するに當り結び付けんと試みたる諸勢力のことである。彼は實際まじめに自分は宗教改革の爲に途を開いて居る積りで居たかも知れない。何となれば人の內心の宗教的確信といふものはいつの世にも不思議に他の動機と結び付き易いからである。現に彼が宗教的渴望を抱いて居たことは疑ふに由もない。彼がエベルンブルヒの公禮拜をウッィテンベルヒの改革式に則らん事を主張し、附屬牧師の結婚を助け、聖餐式に於て平人にも盃を與へん事を望み、自己の教會より繪畫を驅除し、又聖徒に對する祈に反對したるが如きは、奇を衒はんが爲であつたと考ふべき理由は少しもない。然しそれと共にまた、トリエルの宗教國は若し之を手に入れさへすれば立派なる世俗國たるべく、之を獲得したる者は「選擧侯以上の者となる」であらうとの考もあつた。彼はルーテルが宗教改革を變じて武裝に由る叛亂たらしむるを欲せざりし事を知

つて居た。而して其事は彼の屢々フッテンに告げたる處であつた。然しながら彼は又ルーテルが宗教的諸侯に對して浴せかけたる激語を知り、下級の僧侶や平民の心の中にそのいかに高き反響を招きつゝありしかを知つて居た。果して然らば彼がそのトリエルの大監督に對する入寇と福音的改革運動とを結び付けんと試みた事は必ずしも怪むに足りない。唯解し難きは彼が如何にして貴族と都市との聯合を望むに至りし乎である。市民が差當り帝國參事院に對して啣む處ありしは事實である。彼等は會議の席上自己の代表者の就けられし席次の低きを感じて居た。彼等は又其肩に負はせらるゝ帝國の課稅の偏重を憤つて居た。然しながら帝國に於ける二個の階級にして自由貴族と市民との間よりも共通點の少きものはない。道路の安全に維持せらるゝは市民の利益であつた。帝國參事院に於けるフランクフォルトの代表者たりし裁縫業組合の功勞者フィリップ●フェルステンブルヒが無法なる商人階級を苦むるは自由貴族であつた。道路を險惡ならしめて從順

武士の掠奪に遇ひて路上に馬車を遺棄し、信頼すべき同業職工を伴ひ間道より會議地ニュルンベルヒまで徒歩せねばならなかつた時代に、そのフランクフォルトと貴族とに何の共通するものがあつたであらう乎。然もフランツはフランクフォルトを招いて己に加擔せしめたのである。其時代の「海燕」にも譬ふべきフッテンの如きは己が庇護者をチスカに比して農民に迄も訴へた。チスカは即ちボヘミヤより無用の僧侶等を驅逐し、其財産を沒收して公益の爲に使用し、以て羅馬廷の掠奪を終熄せしめし人である。然し農民はよく知つて居た、自己の最も無慈悲なる壓制者はフランツを戰士とするその自由貴族である事を。果せるかな、やがてフランツの兵卒等は修道院や監督の住宅を襲ふと共に、農民の圃場をも掠奪したのである。

ジッキンゲンの率ゐたる軍隊其ものが中世武士格の復興の既に過去の事なるを示して餘あつた。そは調練したる備兵の一隊であつて、一般砲兵の軍裝を爲して

居た。武士及び其從者より成る古き中世的民軍の外觀は更になかつた。

然し多くの人は彼の叛亂を以て帝國の空前絶後の危險事と見做したのである——自己と同時代の出來事の輕重を見わくることの難しさよ！　彼はトリエルの大監督におきまりの爭鬪狀を送り、一五二二年九月初め其進軍を開始した。全獨逸は其成行如何にと見守つて居た。

出征は全然失敗に歸した。大監督は第二の法王ユリウス二世となりて其首都を防禦した。包圍僅に一週日にして攻圍軍の彈丸は盡きてしまつた。ジッキンゲンは其軍勢を纏めてエベルンブルヒに引上げねばならなかつた。其處にて彼は一冬を過さんと欲した。

然しながら諸侯は見脫しはしなかつた。帝國參事院は曩にジッキンゲンの侵入を嚴禁したが、今や彼及び其幇助者を罰するに決した。マインツのカーヂナルたる選擧侯は速に隣國の急を救はざりし故を以て重き罰金に處せられた。其の家令に

してウルリヒの従兄弟なるフロウェン●フォン●フッテンは城より放逐せられ、其知行を剝奪された。翌春トリエルの大監督、ラインの帝領伯、及び若きヘッセの方伯の三君侯はジッキンゲンをランドスツールの居城に圍み、その求援の爲め遣はしたる使者を捕へ、大砲を以て城壁を擊倒した。フランツ自身も致命傷を受け、堅城は遂に陷落した。諸侯の入城したるはジッキンゲン臨終の際であつた。トリエルの大監督はいうた、「汝余に對し何の怨ありてか余及び余が無辜の民を殺傷したるぞ」――方伯も言うた、「余に對しても亦如何なれば余が幼年の折余の土地を侵掠したるや」と。死なんとするその人は言うた、「余はヨリ大なる主に對して答ふべきのみ」と。彼の附屬牧師（チャプレン）は彼に懺悔せんと欲する乎と尋ねたが、フランツは答へて余は既に心の中にて神に懺悔せりというた。是に於て牧師は彼に赦免を宣した。牧師が聖餅を捧げんとし、諸侯は脫帽跪坐した時に、フランツの息絶えた。諸侯は遺骸に向ひ主の祈を述べて立ち去つた。

叛亂撲滅の手段は茲に止まらなかつた。ジッキンゲン及び彼と提携したる貴族の城は取上げられて、彼に對して戰ひたる諸侯の有となつた。エベルンブルヒの驚くべき財寶はヘッセのフィリップの手に歸した。スワビヤ同盟はフランコニアの掠奪武士を根絶するの時到れりと考へた。彼等はネルドリンゲンに記憶すべき會合を催うし、凡て服從を肯せざる者に爲して處分を爲さん事を決した。ジョージ●トルクセスを將とせる一軍隊は徵募せられ、アウグスブルヒ、ウルム、ニュルンベルヒ等の町々は砲を供給した。先づフランコニアの全州中最も堅牢なるボックスベルヒ城を攻擊した――今日泰平の世にありては鑛泉飮用の爲病弱者の集ふ閑寂なる小町メルゲントハイムの近傍である。城は占領破壞せられた。其他の諸城主は恐怖の餘り多く抵抗を試みんともしなかつた。物凄きアブスベルヒの塔、即ち掠奪を以て足れりとせず、常に被害者の手を切斷して時には之をニュルンベルヒの官憲に送附したる凶惡ハンス●トマスの居城も陷つた。其の恐ろしく厚き城壁も火

藥を以て吹き飛ばされて終つた。事の成功は甚だ鮮やかなるものであつた。フォン・ギーッヒ氏、フォン・アウフセス氏、フォン・アブスベルヒ氏、フォン・ブランデンスタイン氏、及びフォン・ローゼンベルヒ氏等も征服せられた。武士一味に由て行はれし大道掠奪、殘害の類は概ね鎭壓せられた。

是故にランドスツールの陷落ジッキンゲンの滅亡は、唯に一城の攻略又は一將の陣歿のみの問題ではない。これ自由貴族に對する大豪族の華々しき勝利を示し、又政治上の發達を以て特徴とする新時代の開始を示すものである。唯獨逸國內の事情は英、佛又は西班牙に於けるが如き一國王を中心とする國民的中央集權を妨げた。此處にありては集中主義は寧ろ地方の領主たる豪族の手中への集權となりて表はれ、獨逸國を幾多の獨立侯國に分裂せしめたのである。而して之れやがて羅馬廷の陰謀を招き、延いては不祥なる三十年戰爭を誘ひし分野であつた。かくて烈しき信條の衝突や互に嫉視せる小君主の確執や獨逸を斃さんとする佛蘭

西及び法王廷の惡魔の如き慾望がこの歐洲未曾有の凶惡殘忍なる鬪爭を長引かしめたのである。其根源は一に經濟上の激動にあつた。而してフランツ・フォン・ジッキンゲンを囑りて、中世の獨逸帝國の自由貴族に屬せし舊き地位特權を回復せんとの希望を以て諸侯を攻擊せしめたものも亦之であつた。

此貴族の叛亂とルーテルの說敎との間に關係ありとせば遠き間接のものたるに過ぎない事は公平なる記者の疑はざる處である。ジッキンゲン自身は或はルーテルの宗敎的君侯に對する非難の效果を考慮して居たかも知れない。而してフッテンは確かに彼の庇護者の首謀に係る叛亂が光明の新紀元を劃し知識的及び宗敎的自由の新時代を開かん事を希望して居た。然しながらルーテルが彼等の援助を望まざりし事、及び武力に訴ふるを斥けし事は二人の熟知したる處である。殊にジッキンゲンその人は宗敎家の說敎の烈しき言說によりて動かさるゝには餘りに冷靜なる人物であつた。彼の企擧はルーテルの思想の領域外にありし政治的考慮に

基づいたものであつた。

二　農民戰爭

然りながら我等は次に農民戰爭を惹起したる原因を考ふる時は、此の不詳なる爆發と獨逸人民に對するルーテルの使信との間に密接なる關係を認めざるを得ない。熱烈大膽なる說敎家の聲が全地に響き渡りて、語る者の確信に應じまた聽く者の確信が喚び起さるゝ時、舊き福音が全く新しき象を以て說かれて時代の似而非宗敎を粉碎する時、萬人は不安を抱き多數人が堪へがたき壓迫に惱みながら其聲を耳にする時、殊にそれが軛は難く荷は重きを感せる凡ての人々に訴ふる時、必ずや反響は反響を生みて遠く盡くるを知らないのである。そは平民の生活の深き處に時として甚だ意想外なる手答を生じ、數世紀に亘りてやまざる運動を惹起せしむるに足るのである。宗敎改革時代に於けるルーテルの聲は彼の夢想だもせ

ざりし反響を呼び起した。其結果たるや單に敎義の改變又は敎會組織の改革を以て稱すべきものではない。ルーテルの宗敎改革が田舍の農民の叛亂や都市の勞働者の暴動と何の關係もなき事を示すは容易である——そは恰もアシヽのフランシスの「靈的貧窮」と「自由生活の兄弟姉妹」一派の卑しき共產主義との間に何の關係なく、ウィックリフの敎義とワット・タイラー及び僧ボールの首謀に係る大々的勞働一揆との間に何の關係なく、ジョン・フスの敎と極端なるタボル黨の狂亂との間に何の關係なきが如くである。然しながら何れの場合に於ても「平民」が宗敎的指導者の激勵を受け之を更に自己流に解釋變形して全く豫想外の應用を爲したといふ事實は奈何ともし難い。

宗敎改革の時代は全く革命の爲に機が熟して居たのである。畑は既に犁かれ耕かれ平されて居た。此處に改革者の聲の臨むや、さながら初夏の太陽のあらゆる種子を生命に萠え出でしむるが如くであつた。

當時の社會上並に經濟上の狀態に就ては既に之を述べたが、尙其の都鄙の勞働者の運命に與へし影響を再說するを要する。商業の發達や、貿易の中心のヴェニスよりアントワルプへの移動や（コンスタンチノープル略取せられて其港閉鎖せられしに基く）、東洋に通ずる航路の發見などが都市の舊き同業組合生活を破壞した。殊に之を轉覆するに一層力ありしは大資本を以て世界的貿易を營む大商會の發達である。この資本家階級の勃興は貧富を隔絕して其間に深淵を穿ち、前例なき意味に於ける都會の貧民階級を造り、而も不遇落魄の農民の田舍より流れ込むあるに由て此階級は益々溢れがちであつた。急激なる富の增加は衣服、家財、飮食等の虛飾を弘め、延ては道德の腐敗を招き、十六世紀初期の都會生活に於て其絕頂に達せしめた。また之が爲に富裕市民と貧窮勞働者との間に憎惡の念を一入盛ならしめたに相違ない。領主たる豪族も亦奢侈生活の競爭に後れは取らじと、其封土の課稅を重くし、小貴族を壓迫した。小貴族は同じ富の競爭に唯愈々嚴しく

不幸なる農民より絞り取るのほか術を知らなかつた。この小休（おやみ）なき階級間の競爭、この倦むを知らざる奢侈生活の追求、この募り行く貧富の懸隔、及びそれに基く毒々しき階級的憎惡等が釀しつゝありし動亂は中世封建社會の構成に大なる罅隙を生ぜしめた。かゝる處へ物價の暴騰は來りて經濟上の困難を更に甚だしからしめ、街々徜々强健なる乞丐の群集、即ち破產せる武士、解隊せる傭兵より、零落の農民、失職の勞働者、托鉢僧、「遊歷書生」に至るまで社會各階級の廢物も て漲るに至つた。是の如き社會に向つてルーテルは語つたのである。而して其不滿は彼の言葉を反響せしむる響板であつた。彼の齎らせし使信は平民的であつた。[一] そは聖徒の貴族政治を破壞し、僧侶平人の墻壁を轉覆し、神の前に萬人の平等なるを說き、凡て信ずる者は其地位又は生活狀態の如何に拘らず神の前に立つの權利ある事を說いた。そは單に罪と悔改と赦免とを說くに止まらなかつた。宗敎改革は民の苦惱を表白したのである。そは敎會者の無慈悲なる收斂を攻擊した。また時

には世俗の諸侯及び自由貴族中の壓制者に對し、若くは市民の奢侈生活金儲生活に對しても激語を發した。ルーテルの「獨逸國民中の貴族に訴ふる書」は殆ど當時のあらゆる公の傷手に觸れ、來らんとする不祥事に對し警告するものゝ如くに見えた。

加之世の偉人にして(ルーテルは其第一流に位すべきである)未だ何人も彼の如く暴言を濫發した者のないといふ事も記憶せねばならぬ。缺點は誰人にもあるが、彼も亦性格の缺點を有つて居た。彼は問題の中心まで切り込むやうな強い鋭い語句と、電光の閃くが如く鮮かに事物を活躍せしむる言語の才を有し、而も最も吝みなく之を使つたのである。彼の口にし筆にしたる事は其何たるを問はず固く人の記憶と想像とに留まつた。彼は殆ど凡ての事を書翰に綴り又は小冊子に刷り込んだ——概ね折に觸れて感じたまゝ火の燃えて居る時に書いたのである。而して彼の言を受けたるものは、時代の沸騰したる感情に充ち、警告よりも激勵を記憶し易

く、言說を直に實行に移さんと欲する人々であつた。萬人は神の前に平等なりとの思想の如き、人は凡ての人的命令よりも重要なる神聖なる權利を有すとの思想の如きは彼等の熱心に受け入れし處であつた。かゝる貴き思想が靈的生活の畛域にのみ屬し、法王と羅馬廷と監督との命令强請のみが抵抗すべき人的命令であるとは彼等の信ずる能はざる處であつた。瑞西農民の叛亂の成功や、隣邦ボヘミアの地の民衆の指導者たりしチスカの勝利の如きは、ルーテルの鐵槌的言辭を如何に行爲の上に實現すべきかの說明であると彼等は考へた。

ルーテル以外の數師にも人は耳を傾けた。プラトーの弟子と自稱する人文學者の多數は、國家を凡てとし個人を殆ど眼中に置かざるかの「共和國」の共產主義の夢を友人や學生に說いて賞讚を博して居た。或はサー・トマス・モーアの「ユトピア」の如きを恰好の適例と見做すべき「書齋の」空說に沒頭して居た。數室內に於て「遊歷書生」等に講せられし之等の說を、プラトー派學者は又曾て夢想もせざり

し風に農民の聽衆や職工の群集に向て註釋說明を試み、而して彼等は又之が豫想外の應用を爲したのである。

以上の運動の宣傳者は無數にして多種多樣の人々に屬して居た。貧窮なる牧師等は其敎區民を激勵した。修道院を棄てたる行脚僧、大學町の一より他へと遊り往く學生、獨逸の風習に從ひ商買の中心地を追うて移り行く勞働者——到る處に熱心なる聽衆は見出された。彼等は或は都會の下層旅館の食卓に、或は村人とうち混りて菩提樹下の草地に坐した。彼等は粗野なる平民の語にて語つた。彼等の話は多くの聖句引用や、瑞西又はボヘミア遊歷中に集めたる剴切なる實例を以て飾られた。

印刷物を以てせられし宣傳法は忘るべからざるものである。ルーテルは既に獨逸語の印刷物の力を知つて居たが、「平民」の權利の代表者等はみな甚だ有效に之を利用した。粗造の紙に濃き文字を印刷したる小引札、小冊子（時には木版圖を

有する）が手より手にと傳はつた。興奮せる小聽衆等は之を讀み聞かせられては熱心に議論を爲した。之等印刷物は聖書の正確なる引用に非ずとするも、聖書的思想を以て充ちて居る。又ルーテル自身が敢て蔑む事なくして用ゐたる無骨粗野なる時代的諧謔に富んで居る。武器は新しきものであつた——偖りに新しくあつた爲め官憲は之に氣が付かなかつたらしい——而して其使用せらるゝや最も有效であつた。就中人氣ありしは「カルストハンス」即ち「マットック・ジョン」[二]である。之れ英國のロルラード時代の「ジャック・アプランド」[三]又は「ピーアス・プローマン」に相當する改革物である。其の最も著るしき特徴は僧侶及其の收斂、其だらしなき生活、其の僞善に對する强烈なる憎みであつた。「ジャック・アプランド」は英國初期の肥えたる托鉢僧が其願の下に「大きな鷲鳥の卵の如き」垂肉を搖り動かして居る處を描き、而して貧しき百姓夫婦が靴も履かずに氷の張詰めし路を遁りて其足の切れ傷より滴る血が足跡を印する處と對照した。「マットック・ジョン」

は之よりも遙に神學的のものであつて、ルーテルとエックを論じ法王の權力に關する教義等を論じて居る。之等の小冊子は大抵農民と僧侶、貴族と農民、僧侶と職工といふ風に對話の態を取つて居る。市場にて又は教會の祝節に賣出され、町々村々に呼賣さるゝのである。一切の時事問題は此通俗的小冊子の中に論せられて到る處に出現し、爲に時代の騷擾を一入募らしめた。又やがて叛亂の日來りし時の共同動作及び共通の主義宣言の準備を爲したのである。

獨逸全國を通じての組織立ちたる叛亂としては何等の準備もなかつたらしい。首領者の聯合、要求事項の宣言書等は暴動の現實に開始せられし後迄は之を見るを得なかつたのである。チッカウの豫言者等は一般的革命に甚だ遲きものを說きもした。トマス・ミュンツェルは牛民の禍害に甚心燃えて、普く獨逸各地を遍り聯盟以て事を擧げんと努めもした。然しながら彼の個人的影響がチゥリンギア以外にどれ丈け及んだかは頗る疑問である、たゝ共通の艱難、時下の不幸を惹起したる

同じ表面上の原因、同じ階級的憎惡等は、其れのみにて動亂に聯合動作の外觀を呈せしむるに十分であつたけれども、實はさうではなかつたのである。

世俗傳ふる處によれば最初の騷擾は殆ど偶發したものである。ルップェンの伯爵夫人が或る休日に夫君の農僕に命じて、城宅の食卓に上すべき野菜を摘ましめ、又絹絲を卷く爲の蝸牛殼を集めしめた。事は一些事の如くである。然し憤激の堰は茲に溢れて、最初の大暴動は發生した。この言傳の眞僞は暫く措き、黑森（ブラック）地方（フォレスト）の斜地の東側、ライン河の小支流に穿たれし此地方、農民は河を超えて自由なる瑞西國の同じ農民を望見し羨望することを得たる此地方が一般の暴動に合圖を與へし事は確である。一五二四年八月二十四日に農民の一團は老備兵ハンス・ミュルラーの指揮の下にバーゼル、シャフハウゼン間の略中央なる小きワルドシウトの町に集合して、其生活狀態革正の爲に叛旗を飜さん事を誓つた。赤、黑、黃三色の國旗を携へし農民等は町民と相提携し、かくて恐るべき「福音兄弟團」は此

時作られしか然らずとも其根が茲に据えられたのである。此報導はバーデンの農民市民の間に擴がつた。ラインを超えてエルサスに入り、モーゼル河流域に迄屆いた。黒森の南部より北の方フランコニア、スワビアを通じて行き亘つた。其初には當りては十二年前ヨス・フリッツの Bundschuh 團體の取りたる途を取つた。其綱領（プログラム）として漏れたるものを見ても初は殆ど同一であつた——唯時勢の變化殊に宗教上の事情の變化に伴ふ相違あるのみであつた。平民の願は農民及び町民と皇帝との間に在る凡ての治者階級を一掃せんとするにあつた。「その治者階級は實に無數であつた。唯に無數の諸侯、監督、公爵、方伯、邊疆伯、伯爵、諸卿、僧院長等があつて、何か彼（かに）かの主權を行ひしのみならず、舊き帝國直轄市は舊家の小寡頭政治に由て支配せられ、之等の人々は固く相結びて、諸侯に劣らざる事實上の主權を握つて居た。かくて國は許多の大小邦國に分たれ、互に他を侵害した。加之稅關、貨幣の不同、道路の粗惡、盜賊武士、掠奪者隊等が愈々益々彼等を分裂せし

めたのである」[四]。之等の治者階級あるが爲に一皇帝の正しき統治を妨げ、凡ての平和なる生活を傷くるのであると彼等は信じた。

南獨逸に於て支配權を有する唯一の帝國機關たるスワビア同盟はかくて獨逸未曾有の恐るべき一揆に遭遇したのである。同盟側は叛亂の首謀者と協定せざるを得なかつた。而して若しこの時農民及び町民の要求が公平なる和協の精神を以て迎へられたならば國家は如何ばかりか無益の害を免れたであらう。凡ての證跡の示す處によれば、人民の要求は之を方式に表はして見れば決して理由なきものではなかつた。また其首謀者等は或る讓歩を認めんと欲したのである。然るに協定は支配權者の側にありては單に時を延ばさんが爲の策略に過ぎなかつた。やがて兵力の集中成るや否や鐵面皮にも協定を破棄して叛徒を虐殺したのである。若し農民の兇暴が記さるゝならば、同時に流血は治者階級が之を始めたものである事、而も少くとも和睦の提議を容るゝが如く裝ひし後に之を始めたものである事を記

憶せねばならぬ。假に此場合叛徒たる農民が其殺戮せられし同胞の讐を復さんと試みたとしても少しも怪むに足りない。然し歴史家の常に列擧する少數の特殊の場合を除外するならば、農民戰爭は壓制に苦みし獨逸農民が其暫時の成功の間如何に殘忍でなかつたかを示す一例たるべきものである事は、當時の文書を散見してすらわかるのである。彼等が害惡に對し流血を以て復讐するを節制した事は、征服者たる諸侯が叛亂を鎭壓するに際し殆ど獨逸各地を恐るべき血浴の中に投じた事に比して、著るしき對照を爲して居る。農民は城や僧院を掠めもし燒きもした、貴族僧侶等の酒窖にて見付けし酒を痛飮して夜な〳〵酩酊しもした。然しながら原則として理由なく血を流す事は之を敢てしなかつたのである。

かくも急激にして廣大、且一齊なる叛亂は凡ての治者階級の間に恐怖を蔓延せしめた。騷擾の火の手が獨逸全國に揚つた。スワビア及びフランコニアよりチウリンギアに擴がり、更にフォル・アルベルヒ、チロル、ザルツブルヒを經て墺地利

公國に迄及んだ。

農民及び都市勞働階級の苦難を略說し、又素養あり見識ある首領者等の政治上の冀望をも揭げたる、幾多の宣言書が發せられた。殆どその何れにも宗敎的の要求と政治的及び社會的の要求とが混雜して居る。牧師の任免權は最も共通なる要求の一であつた。又屢々福音主義の說敎の保證に關する文句が附加せられた。農民の要求は數多の條項を以て種々の形に現はれた。然し之を約說したものは有名なる「十二箇條」であつて、其古典的の形式は諸地方に於て絕えず潤飾せられけれども、叛亂の「農民憲章」となつたものは之であつた。即ち農民の請ひしものは僕役の廢止、敎會若は領主の收斂の全部又は大部の撤回、狩獵漁撈の自由、適當なる制限の下に薪炭材建築材採取の自由、共有地の回復、及び正直なる評價者に由り地代を公平に査定し、時宜に依ては其所有地を擔保とせる債務の免除を受くべき舊權利と自治體裁判所との復活等であつた。町民の求めしものは僧侶及び

議員の特權の廢止、司法行政の改善、地方稅の整理、參事院の普通選擧、貧民の保護等であつた。更に博き宣言書に至ては、凡て封建的地方的裁判所を廢止し、自治體裁判所を復活し、之を基礎として其上級に帝國裁判所を設く組織的行政たらしめ、以て帝國行政の根本的刷新を期せむとの要求をも含んで居た。又獨逸帝國を通ずる貨幣及び度量衡の統一、租稅輕減及び封建的權利買戻の目的の爲に僧院基金の沒收、租稅及び關稅率の一定、大資本家に對する拘束、商事に關する法律の制定、社會各階級代表者の參の行政參與等をも要求した。何れの場合にありても皇帝は最高君主として認められた。但し平民首領中の二三者の心にバドアのマルシリウスの敎が浸潤して居たかと思はるゝやうな人民の主權の宣言もなくはなかつた。要するに農民の主たる要求は土地に關する權利の公平なる分配を確保するにあつた。而して之が拒絕された時に、彼等は城や僧院の焰と燃ゆる文字も て其要求を刷り出して獨逸全國の夜半の空を焦がしたのである。勞働者の主たる

要求は市會町會に適當なる代表權を得ん事にあつた。而して之を强明ならしむるに彼等は騷擾を以てし、町廳より貴族的議會を驅逐して平民の代表者を選任したのである。

一五二五年の初の頃此の叛亂は向ふ處敵なき有樣であつた。小都市等は農民に左担した。著名なる貴族等も「福音的」又は「基督敎的兄弟團」に加入せしめられた。マインツのカーヂナル選擧侯やヴュルツブルヒの監督の如き君侯等も叛徒に從はざるを得なかつた。破壞の浪は全國に押し寄せた。然しながら運動は全然堅實性を缺いて居た。そは毫も創設力ある首領を出さず、唯僅にチロル州に於てガイスマイアの智慧が州民の山嶽的氣質と相助け、以て平民に永久の地步を與へ、治者階級に眞の讓步を强ふる事を得たに過ぎない。其他に於ては到る處意見の分裂を見たのである。破產したるヴュルテンベルヒ公や掠奪貴族ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲンの如き首領に至ては其參加し若くは參加せしめられたる運動の妨害と

なるのみであつた。加之叛徒等は醉酒遊宴の爲に墮落した。彼等は萬人皆兄弟なりとの理由の下に命令の服從を拒んだ。而して諸侯が漸く其恐怖より醒め殘忍なる虐殺を以て叛徒を蹂躙せんとするに至りしに先だち、全運動は早くも瓦解の徴候を呈した。之に反し治者階級の側に在ては少くとも目的の統一があつた。又彼等には時の最上の武器と最上の訓練とを有する傭兵があつた。彼等は軍事上の經驗と戰術上の熟練とを有した。若しチャールス五世の伊太利出征の爲め獨逸軍隊の大半が國外に流出して居なかつたならば、此の兵器粗惡にして訓練不十分、加ふるに指揮拙劣なる農民及び職工の軍隊はもつと早く屈服したのであらう。兎に角一五二五年の暮も尙遠き頃既に叛亂は鎭定せられ、而も極めて殘忍なる方法を以て行はれたのである。一史家の傳ふる處によれば十萬以上の人が戰場其他にて斃れたと。スパイエルのゲオルグ監督は更に其數を精査してそは十五萬人であつたと言うて居る。叛亂の根源たりし害惡を救濟せんとの企ては少しも行はれなかつた。切なる禍患を癒すべき凡ての助言は風に投げられた。農民に對する壓制は彌增した。地方自治は痕跡もなく蹂躙せられ、不幸なる人民はいつまでも深淵に沈淪すべき運命に陷つた。數箇月の恐怖、麻痺が殘忍兇暴なる壓服の因となつたのである。實に一五二五年は獨逸本國の年紀中最も悲むべく恐るべき年の一であつた。

(一) スターン「宗教改革時代の社會主義者」參照

(二) カルスト又はマットックは農民の用ゐる鶴嘴鋤である、ハンス又はジョンは男性の普通の名である、故に譯して「鉦太郎」とでもいふべく、素と農民の綽名であつた。

(三) ウイツクリフの徒、十四、五世紀中英國に於ける宗教改革の一團。

(四) R・ヒース「再洗禮派」一〇頁。

三　叛亂に對するルーテルの關係

玆に一疑問に逢着する。ルーテルは故國獨逸を席捲したる此悲劇に對し個人的に如何なる關係を有したであらう乎。

獨逸の再生に關するルーテルの考慮中に農民戰爭の如きものがなかつた事を示すは難かしくない。彼の理想は常に宗教改革が說敎と敎導とを以て成就せられ、暴力には——少くとも積極的には——何等負ふ處なき事にあつた。彼は此思想を幾度となく釋明した。彼は如何に正しき革新を實現するが爲と雖も武力的暴動に由る事を少しも同情しなかつた。然し彼は自己の鐵槌的言語が壓迫又は感動により興奮せる人心に對し必然與ふべき影響を慮るには特別に不適當であつた。彼は激烈なる煽動的言語を使用するに方り不思議なほど自制を缺いて居た。彼は農民の壓迫の益々募り行くを見て愍んだ。而して彼獨特の鋭鋒を以て之を摘抉した。彼は地主の貪慾を詰責していうた、若し農民の土地が麥の穗の數ほどの貨幣を生産するとも利益は地主のみに歸するのであると。何人も諸侯及び大君主の專横に對してルーテルほど腹藏なきものはなかつた。何人も諸の害惡の根源たる奢侈に對する狂的競爭を彼より强く摘發したものはなかつた。然し善かれ惡かれルーテル

は武力による叛亂に何の益なき事を確信して居た。凡て永續すべき善事を爲すには忍耐と待望とを以てせざるべからざる事を確信して居た。彼は十六世紀の初頭に中歐到る處の道德的惡疫たりし乞丐の群集を見て、來らんとする災禍を看破し、各都市各地方は自ら經費を負擔して其貧民の保護に任ずべきを忠告した。彼はチッカウの豫言者並にミュンツェル及びカールスタット等の中に仄見えし革命的精神を恐れた。之等の指導者は追隨する可憐の民を破滅に導くものなる事を信じた。嵐の吹き荒ぶに先だち、彼は全力を盡して叛亂に寸效なきを力說した。其吹き荒びし後に至つても屢々生命を賭して不滿を抱ける地方を訪れ、彼等の冒さんとせる危險を戒めた。彼は暴動の首領者の野心深き企圖を信用しなかつた。獨逸の國情を以てしては永久的政治勢力の一要素は諸侯である事を洞察して居た。彼は「十二箇條」の要求に對しては同情を有つて居た。而してその宣言せらるゝ久しき以前、既に古き獨逸普通法の復活を論じた。「十二箇條」が獨逸農民の「憲章」と認めら

れし後にも其趣旨に對し贊同の意を表した。然しながら自己の從來常に固執せる主義を守り、武力に由る叛亂に訴ふる事が決して之を實施する所以でない事を公言したのである。之が爲に彼は官憲に阿る者なりとの攻撃を受けた。また「平和の勸告、スワビア農民の十二箇條に就て」を著はして貴族農民の雙方を責めたる時には「旗幟不鮮明」との非難を蒙つた。然しこの「勸告」に表はれし意見はスワビア條文宣言の數年前より彼の懷抱せしものである。彼は此小篇に於て「自己の豪奢を增進せんが爲め民の膏血を絞り遂に平民をして最早や堪えざるに至らしめたる」諸侯、貴族、監督を激しく非難して居る。彼は條文中の或るものを賞讃するも、又武力を以て之が同意を强制せんとするを戒めて居る。彼は提言していふ、「貴族側よりは數人の伯爵及び貴族を、都市側よりは數人の議員を選出して圓滿に調停和解を試むべし。かくて事件は……法律と協定とに從ひ終局を告ぐるならん」と。此小篇は一五二五年四月の第三週の末頃ルーテルのアイスレーベン滯在

中に書かれたものに相違ない。ミュンツェルは當時ミュルハウゼンに居たが、其處では彼の切實なる熱誠と眞摯とに當り得るものは一もなかつた。市民の彼を尊敬する事さながらフロレンス人のサヴォナローラに於けるが如くであつた。暫しが間は富者も貧者を食はしめ、彼は殆ど善福の社會を建設したのであつた。然るに南獨よりの報導は彼を激勵した。彼は狂ふが如くに武力に訴へた。彼は市民農民に烈しき檄文を飛ばした、

「起てよ。主の戰を戰へよ。進め、進め、進め。惡者は汝等の聲を聞いて慄ふ。進め、進め、進め。たとへエサウは嘉き詞を出すともたゞ無慈悲なれ（創世紀三十三章）。神無き者の呻吟に關はる勿れ。彼等は小兒の如く汝等に縋りて乞ひ泣き且願はん。されど神モーセに命じ給ひし如く（出埃及記七章）、又神我等にも示し給ひし如く、何の憐愍をも垂るゝ勿れ。町々村々を呼び醒ませ。就中鑛夫を呼び醒ませ。……進め、進め、進め、火の燃ゆる間に進め。汝等の劍に血を

冷えしむる勿れ。ニムロデの鐵砧を鍛々と打ち鳴らせ。彼等の塔を根底より轉覆せよ。彼等の一人だも生くる間汝等は人の恐れを脫れざるなり。彼等が汝等を支配するの間神の畏れを口にするも無益なり。進め、日の暮れざる間に進め。神汝等と共に在し給ふ」。

之等の言はマンスフェルトの鑛夫を激勵して、ルーテルの兩親の住へる地方に兵燹を起さんが爲であつた。而してこの當初の目的は外れたとはいへ、彼等はチュリンギア及びハルツ山脈を起えて叛徒の諸隊を派遣し、十四日ならざるに僧院修道院を破壞するもの四十、その寄寓者等（多數は歸るべき家もなき憐れなる婦人である）は流浪の身となつた。ルーテルが誤まられたる人民を正道に導かんが爲め今一度最後の個人的努力を爲さんと決心したるは此時であつた。彼は騷擾の地方を一巡した。西、アイスレーベンよりストルベルヒに（四月二十一日）、次にはノルドハウゼンに赴いた。此處にてはミュンツェルの同情者等が鐘を鳴らして彼

の聲を掻き消し、彼の身は大なる危險の中にあつた。次に南して四月二十八日以前にエルフルトに到達し、再び北してゴルデンーアウエの沃野及びワルハウゼンに出で（五月一日）、更に南ワイマールに赴いた（五月三日）。此處にて選擧侯危篤の報に接し、急遽ウィッテンベルヒに取て返し五月六日に到達した。ルーテルがその激烈なる小論「殺戮掠奪を事とする農民群を排す」を書いたのは此旅行中か若くは歸着の直後であつた。彼が筆を執りし頃は彼の心はミュンツェルの殺戮の奬勵を以て一杯になつて居た。危險は其絕頂に在りて、見るもの聞くもの騷擾破壞ならざるはなかつた。叛徒が結局成功せざるべきか否かはまだ疑問の裡に在つた。[二]此恐ろしき小冊子に於てルーテルは貴族を敎唆して暴動を粉碎せしめんとしたのである。彼の行動を說明するに當り腹藏なく言ふならば、此小冊子の文言はルーテルに拭ふべからざる汚點を印したものであつて、事情如何に酌量すべきものありと雖も之を除くに由なきを感せざるを得ない。之れ彼の貴き生涯閱歷に於ける

最大の斑點であつた。當局者の義務を論じたる後、彼は歩を進めていふ、「謀叛專件にありては各人が裁判官にして且執行官である。故に何人たりとも若し爲し得べくんば是の如き輩を公然に或は秘密に敲き倒し絞め殺し刺し殺すべきである。叛徒の如き有害、毒惡、惡魔に類するものは之を物の數ともすべきではない。…今や君侯が虐殺を以て天國を贏ち得ること他人が祈禱を以てするにも勝るやうな奇しき時代である」と。我等は附言せんと欲する、「げに奇しき時代」である。そはキリストの福音の說敎者が主の事業を爲すに最も良き途は之等誤られたる可憐の農民を平氣に殺戮せん事を以て人を敎唆するにありと思ひし程奇しき時代であると。獨逸諸侯の多數に取ては何とて平民の虐待を人から敎へて貰ふ必要があつたらう乎。

賢明なる老選擧侯の思慮言說は之と著しき對照を爲して居た。ルーテルが其の狂暴なる小冊子を書きしは、選擧侯の死の前後何れにしても極間近であつたに相

違ないと思へば、彼の行動に一入の遺憾を感せざるを得ない。賢侯フレデリックは南方農民暴動の報に接して甚だしく憂慮して居た。彼は四月十四日に弟なる公爵ヨンに書き送つた、「貧民は我等僧俗の上流階級の爲に種々なる重荷を負はせられて居る。故に平民が支配するやうになる事は神の聖旨であるかも知れない。然し若しそれが聖旨でないならば、若し其が神の榮光を顯はす所以でないならば、其事は起らないであらう。我等は我等の罪の赦されん事を神に祈りて凡てを神に委せ奉らう」と。彼は弟と共に出來るだけ事を放任せんと欲した。やがて彼自身の臣下の間にも暴動起りしと聞いて彼はいたく心を惱ました。五月五日の死に至るまで其最後の病床にあるの間、彼の望んでやまざりしは一切不滿の原因が正しき讓歩に由て取除かれん事であつた。凡ての協商が圓滿に進行し無事に結了せん事であつた。彼は生前にルーテルの來り見えん事を切望して手紙を送つた。然しルーテルの來城に先だち彼は逝いてしまつた。彼は獨逸に於て最も愛せられたる君侯

であつた。而して恰も彼の意見が最も役立つべかりし其時に取去られたのであ
る。記錄によれば彼が馬上街衢を過る時、子供等は彼を見守り其の親切らしき微
笑を迎へ、彼等の所謂「我が選擧侯」に挨拶するを常としたさうである。暴動の故
にこの良君侯の抱きし心痛を思うて、ルーテルの筆は恐らく一層の兇猛を加へた
のであらう。さりながら選擧侯の死の瞬間にルーテルよりかの小冊子の出た事を
思ふは快き事ではない。

ルーテルの敵は忽ち彼の失策以上の失策を利用した。彼の最も執拗なる反對者
の一人エムゼルは惡詩を賦して、ルーテルをピラトが事を爲し終りし後其手を洗
ひしに比較した。ルーテルは多少の修正を試みた。彼は唯現に虐殺劫掠に從事せ
る人々のみに自己の所言を適用せんと欲したのであると言明した。又彼は官憲に
して勝利を得たる曉には敗北したる罪人に十分の赦免を施すべき旨を公然確言し
た。然し憤怒の情は之を宥和するに難く、寡ろ之を辯護するに易きものなる事をや

がて知らねばならなかつた。ルーテルの暴言が農民に課せられたる苦難を其爲に
一際苛酷ならしめたといふ事はなかつたらしい。それと共に寬恕を勸むる彼の辭
にも別段の效果ありしとも思はれない。

農民戰爭は唯に宗敎改革に對し永く不幸なる結果を齎らしたのみならず、ルー
テル自身に對しても亦さうであつた。

一五二五年の悲しき年までは、ルーテル主義の運動は獨逸に於ける各種の不滿
の要素を悉く包括した。而してルーテルは其背後に全國を有するが如くに見え
た。此年は正しく二途の分岐であつた。ルーテルを代表者とする保守的なる宗敎
改革と、之に勢力の外觀を與へて居た諸種の民衆の願望とが無遠慮に手を分つて
終つた。獨逸の政治上の運命としては大諸侯大貴族を中心とする地方的集權を確
然と形成しつゝあるものゝ如く見えた。統一したる民主的獨逸國の夢は名殘なく
消え去つた。保守的宗敎改革も政治上の發達の跡を追ひ、獨逸國敎會を作成する

には至らずして、改革派信仰を把持せる地方豪族の支配保護の下に地方的教會を作るに終つた。急進的宗教改革は幾多の小分裂を生じ、再洗禮派の形に現はれて誹謗迫害を蒙つたが、此派も亦少くとも或程度迄は農民戰爭に於て蹂躙せられた る社會的冀望を懷抱して居たのである。羅馬廷の從僕等は極力此時代の恐怖を利用して獨逸を二箇の敵陣に分たんと力めた。即ち一は宗教改革を容認し、他は之を否認し、かくて此運動が眞の意味に於ての國民的運動たらざるに至らしめんと力めた。

ルーテル自身に取ては農民戰爭は「平民」に對する深き不信の念を心に刻み込んだ。爲に最早や民主的教會なるものを信ずる事が出來なくなり、世俗の政治が准監督的職能を有すと認むべき範圍に於て、宗教改革を其世俗の支配權の械に繫ぐに至つた。彼は獨逸國内に於ては一切民主的教會政治に類似のものを建設せんとする企圖を妨ぐるに全力を盡した。この「平民」に對する彼の憎惡不信が主因を爲

して、遂に彼は勇者ウルリヒ・ツキングリー及び其瑞西同僚を了解尊重するを得なかつたのである——この誤解たるや獨逸の宗教改革に少からざる障碍を與へ、恐るべき三十年戰爭の禍害の多くを誘出したものである。農民に對する小冊子の出版後數年間彼の生命は獨逸の多くの田舍地方に於て甚だ危險であつた。彼は罪を犯したとするも其爲に蒙りたる烈しき苦難は稀有のものであつた。

(一) 創世紀十の八—一二に在る人物、其語源に因みて後世叛逆の物語に挿入せらる。

(二) ルーテルが人民鎭靜の目的を以て此旅行中何時何所へ往つたかを斷言するは稍困難である。彼は前にも同じ地方を旅行した事があつたので、ざうかすると二者混同される。然し前記の日付と場所とは多分正確であらうと思ふ。チウリンギアの農民がフランケンハウゼン（ルーテルは此旅行中少くとも一度は其近邊を通過したに相違ない）に敗北したのは五月十五日であつた。

第九章　結婚、家庭生活及び公的生活

一　結　婚

十六世紀中ルーテルの指導したる宗教運動に含まれし思想にして結婚の地位に關するものほど驚歎すべきはなく、又その孕みたる道德的成果にして之ほど遠大なるはなかつた。中世の宗教的動亂の何れを窺ひ見るも未だ此の如きものあるを知らない。此一問題の扱ひ方を以て宗教改革と他の一切の部分的先發事件とを區別する事が出來る。中世に在りて何人も聖なる思想として疑はざりし、而かも驚くべき褻瀆、即ち神御自身が此世に建て給ひし秩序を以て寧ろ穢れたるものとなし、聖書中キリストと其の敎會との結合に譬へて尊敬せらるゝ夫妻の結合を以て、之に與る基督者の生活を必然汚すものとなす思想を一擊の下に破壞した。中世の宗敎生活の陰影より遙にかけ離れて生活する我等に取ては、凡ての見解の變

化を翫味するに難く、又中世神學者の學說と福音主義神學者の學說とを對比して描寫する事も容易ではない。唯少くとも此一問題に關しては、ルーテルの敎は精神生活の全雰圍氣を一變したのである。而して恰も凡ての有機物が一氣候の下に生存する能はざると均しく、道德的雰圍氣の變化するとき或範圍の思想は自ら其辯證力を消失する。かくて思想の態樣の變化はルーテルの宗敎改革以上に及んだ。羅馬敎徒が今日獨身生活の維持を辯護せんとして用ゐる論證中に於ても明かにこの變化を認むる事が出來る。即ち今日彼等の用ゐる論證は宗敎改革に方りて創始せられたる新しき範圍の思想に訴ふる議論であつて、中世敎會の未だ曾て試みざりしものである。

宗敎改革は凡て誠實正直なる各種の世俗的職業が僧侶たる獨身の生活に召されたると均しき招命であり得るといふ事を敎へて、敬虔とか敬虔なる生涯とかに關する觀念に一革命を來したのである。之に由て家庭の爐邊も僧庵の密室に劣らざ

る神聖なるものとなつた。病める子を看護りて一夜を眠らずに明したる母は、修道院の禮拜堂の舖石にひれ伏して通夜祈禱を凝せる尼に劣らぬ神聖なる徹夜を爲したものである。幼時我等を圍む天國が即ち敬虔なる家庭の行先であるとの思想を抱かしむるに至つた。かゝる思想は中世の幾千の人の心にあつたかも知れない。現にルーテルの頑強なる老父に之を見ることが出來た。然しながらそは公認せられたる敎會の敎義の一部を形成しなかつた。また家庭生活を實際に神聖ならしむる道德的雰圍氣を作らなかつた。之を作つたものは即ち宗敎改革である。從てそは普通生活に於ける宗敎を創始したのである。是の如くにして其影響は敎會の改造といふ境を超えて遠く波及したのである。

敎會改革の範圍內のみに於ても此思想は大なる變化を惹起した。中世の牧師の蓄妾といふ醜怪事は中世後期には殆んど普通の事であつたが、僧侶も結婚するに至りて此弊風は止んだ。ルーテル派の牧師の家庭生活は概ね粗朴なる敎區民の模

範となつた。之等の家庭より出でゝ獨逸の公的生活の各方面に第一流となりし多數の人々を見ても、ルーテルの理想に基づき、僧侶の生活と市民の生活とが如何に結合したかゞ分るのである。

若し人類の良心を覺醒せしめて此等多くの新思想に導きしその大膽なる說敎者の聲が、隱舍より出でたのであつて家庭よりでなかつたならば、宗敎改革の物語も未完であるかの如くに見えたであらう。然しルーテル自身は長い間結婚生活に對して何となく好ましからぬ思を抱いて居たのである。彼は早き頃よりして若し牧師が結婚生活を欲するならば獨身を實行すべき理由は毛頭無いとは確信して居た。自ら僧侶生活に招かれたりとの明白なる意識もなく、唯幼年時代に强ゐられて僧侶立誓を爲した男女の者は、自由に僧庵を去つて可なりとは信じて居た。然しながら彼自身の如く何等外部の拘束もなく、自ら故意に僧侶生活を選び獨身誓約を爲した者が、其誓を守らなくともよいとは決して思はなかつた。其後之等の

誓約が明かに「義とせらるゝ」の思想の錯誤に基づくものであつて守るに足らざる謬想であるとの結論に達した時にも、自己の場合としては之を破りたくないと思つた。而も度々結婚を強ゐられたけれども變らなかつた。ワルトブルヒ城よりウィッテンベルヒに歸りし後數月にして彼は僧服を脱ぎ代りに獨逸敎授の普通服を着けたけれども、相變らず昔の修道院に住つた。其處には彼と修院長のプリスゲルを除く外衆僧皆去り、彼等を世話して日常僕婢の役を力むべき平人の兄弟すらも居なかつた。ミュンツェルが「ウィッテンベルヒの閑居人」といひて嘲笑して居た時に、ルーテルは屢々食ふに物なく僅かにパンと水とにて食事を濟さねばならなかつたのである。メランヒトンのいふ處によればルーテルの寢床（ベッド）が濕つぽくて日光に曝されて居ないと忠告した時に、ルーテルは終日餘り烈しく働く爲め日が暮るゝと共に寢床の上に倒れて睡るより外何も出來ないと答へたさうである。

然るに一五二三年の春以來此過勞の人は他人の婚姻事件で以て忙殺せられた。

彼がグリンマ地方に巡視を試みた時より彼の著作は此地方の僧庵に浸入し、就中グリンマの稍〻南、ライプチヒより程遠からぬニムチュのシステルシアン派の一尼院に入り込んだ。上流貴婦人の爲に設備せられし此修道院の尼の多數は自己の家庭に歸らんと欲した。彼等は親族に手紙を書いて歸宅の許可を乞うた。然しながら之等上流家庭は何れも其家に敎權拒否の尼僧を受くるの不名譽（當時はさう思つた）を甘受するに忍びなかつた。是において貴婦人等はルーテルに書を送つた。暫し通信を交した後、事はトルガウの尊敬すべき市民其名はレオンハルド・コッペなる人に一任せられた。俗說によれば一五二三年四月四日に九人の尼即ち冒險を爲した總勢が其救助を圖りしカタリネ・フォン・ボラの室に集合し、窓より庭に出で、コッペ君に助けられて塀を乘り越した。外には大きな田舍馬車とビールの空樽とが用意されて居た。尼等はそのビール樽に入れられ、三日の旅路に、反對側なるザクソニー公ジョージの版圖をも通り抜

けて無事ウィッテンベルヒに到着した。此地にてルーテルは町中最も尊敬すべき市民等の家に彼等を庇うた。

此修道院脱出一件は非常に喧しくなり手嚴しき非難を蒙つた。ルーテルは一の手應(てごたへ)ある小冊子を出して之を辯護した。書中彼は上ワイマールのフロレンチナと呼ぶ可憐なる少女の話を語つて居る。此少女は六歳の時修道院に押込められ、十一歳にして尼にさせられた。十四歳の頃に及び少女は尼の生涯が自分の使命でない事を感じた。然るに丁度其頃尼院長より生涯尼たるべき事、並に尼として出來るだけ勵精すべき事を說き聞かされた。そのうちルーテルの事が耳に入つたらしい。少女はルーテルに手紙を書いた。其手紙は途中で横取せられ、彼女は嚴罰に處せられた。彼女は又親族と音信しやうとしたが、再び發見せられて、擲打せられ、鎖に足を繋がれ、終に窖中終身禁錮に處せられた。少女は逃走した。かくて彼女の物語は世に知らるゝに至つたのである。ルーテルは所謂「僧庵生活」なるも

のが果してどんなものであるかを人に知らしめん爲に之を公にしたのである。而して彼は同じやうな話を尙ほ澤山知つて居ると言うた。

彼の手紙を見れば九人の尼を結婚させようとしての成功談失敗談で充ちて居る。カタリネも其中の一人である。他の連中は大概申し出された相手を以て滿足したらしいが、カタリネだけはさうは往かなかつた。彼女は高き色白の額と輝く黑き眼とを有てる妙齡二十有四歳の端嚴なる處女であつた。彼女の物語は幾百の人々の典型である。初めマイセン地方の貧乏貴族の家に生れたが、兩親は娘を修道院に送つて養つて貰ふ事を望んだ。是に於て十歳にしてニムチュに入り十六歳にして尼となつた。是の如きは獨逸貴族の家庭に代々實行されたる「家族整理」であつた。伯母なるマグダレナ・フォン・ボラは即ち前代の犧牲であつた。カタリネが一五〇九年に修道院に入りし時、伯母も在院者の一人なる事を發見したのである。この若き尼はウィッテンベルヒに於て町書記なる博士ライヘンバッハの家に寄

寓した。彼女の擧措の處女らしき嚴肅さは世の視聽を聚め、丁抹王クリスチャンが一五二三年十月ルカス・クラナッハの客たりし折にも其注意を惹いたといふ。ルーテル自身は少しく彼女を恐れて居た。そして甚だ高ぶりたる婦人であると思つた。ルーテルと此婦人とが如何にして夫婦たらんと合意するに至りしかは判明らない。ルーテルは一度ならずいうた、かゝる事柄は神の御手と當事者たる兩人とに委して置くべきものであると。而して彼は自己の意見を守つた。結婚は農民戰爭の嵐の最中に行はれた。一五二五年六月十三日の夕彼は儀式の證人としてその友ウィッテンベルヒの牧師ブーゲンハーゲン、諸聖徒會長ユストス・ヨナス、畫家ルカス・クラナッハ夫妻、法學教授にして自ら一尼と結婚したる博士アベル等を招待した。ブーゲンハーゲンが一般獨逸風の結婚式によつて司會した。二人は互に夫妻として相迎ふるやと尋ねられ、次に互に右手を執るべく命ぜられ、而して「三一の神の名の下に聖なる婚姻に於て結合したる」事を宣言せられた。それにて式

は終り、ルーテルとカタリネ・フォン・ボラとは夫婦となつた。數日の後新婚夫婦は其親友に質素なる朝餐を供した。ウィッテンベルヒの町長はクラナッハを通じ正式の祝詞に併せて葡萄酒の贈物を送つた。二週日の後六月二十七日に結婚祝賀の宴が催され、親族並に遠方の友人等が招かれた。其際ルーテルに取ていとも嬉しい事には父母共臨席し、而してハンス・ルーテル老人は遂に息子の出家の心得違を全然赦してくれたのである。荷馬車とビール樽とを以て今日あるを致さしめたるトルガウのレオンハルド・コッペも此式に忘れられはしなかつた。朝餐もそれに次ぎし饗宴も皆獨逸に行はれし普通の中世的結婚の風習に協うて居た——唯他と異なるは目立ちて質素儉約なる事にあつた。大學からは美しき欵彫の銀盃に「選擧國首都ウィッテンベルヒの名譽ある大學は博士マルチン・ルーテル及び夫人ケテ・フォン・ボラに此結婚禮物を贈呈す」との銘あるものを新婚の夫婦に贈つた。二人の結婚した時ルーテルは四十二歲、カタリネは二十六歲であつた。

選擧候（フレデリックの弟にして其繼承者たる曩の公爵ジョン）はルーテルに古きアウガスチン派修道院を家として與へた。而して修院長ブリスゲルはルーテルの結婚後數月にしてアルテンブルヒの牧師に招聘せられたから、空家は全部新婚夫婦のものとなつた。結婚生活の第一年はルーテルに取て純幸福の時であつた。第二年は大困難の時であつた。彼の「ケーテ」は決して尋常の婦人ではなかつた。彼女はかゝる夫に取て必要なりし良妻であつたが、しかしそれ處ではなかつた。彼女は凡て夫の事業に深く立ち入り、年の進むと共に益々之に携はつた。ルーテルは妻が書齋にて自分と共に坐する事を好んだ。大概の文通に就ては妻に相談した。彼女の名は絶えず彼の手紙に出て來るのである。かくて彼女も亦獨逸に於て大宗教改革の爲に協力しつゝありし一團の同志の一人となつたのである。カタリネの傳記はなほ物せられねばならぬ。而してルーテルの許多の書翰の隨處に妻の事業に言及する處無數にして而も微細に及んで居るから、以て彼女のいみじき感

化の跡を拾集するに足るのである。例へば彼女の愛より出でし注意に由てルーテルの生命は長引いた。ルーテルはつい働き過ぎを爲し、又彼は時としていとも物暗き憂鬱の發作に襲はれ、其がやがて身體の具合に影響した。カタリネは夫に勸めて庭園——其處の梨の樹の下に曾てスタウピッツと共に坐して、厭々ながら神學教授を引受けさせられたあの古き修道院の庭——に趣味を有たしめ、池を穿たしめ、又友人リンクに手紙をやつてニュルンベルヒより精選の種子——甜瓜（まくわうり）、胡瓜其他の——を取寄せ、友人ランゲに頼みてエルフルトの名産大蘿蔔（だいこん）の種子を送らしめなどした。ルーテルがジョージ公やヘンリー八世や其他彼を擊つ爲に遣はされたる惡魔（サタン）の密使の邪曲を摘抉して記せる手紙の終に、之等の依頼が書き添へてあるのである。彼はいふ、庭園と園藝とがかくも愉快である時になぜ斯んな事を考へずしては濟まぬのであらう乎と。それから長子ハンスの誕生がある。ハンスとはマンスフェルトの老父の名を取つたのである。ルーテルの口は禍をもて沸き

立つ。「彼の幼き鹿が彼の牝鹿と共に」スバラチンに其恵を感謝するなどゝいうて居る。「小さい奴」は珍らしい程強壯な食ひ手飲み手であるなどゝいふ。やがて歩き出して書齋の隅から隅へと入り込む。「ハンス坊」は友人ハウスマンから貰つたガラ〳〵を「不思議さうに喜び誇つて」感謝して居るといふ。こんな風に極めて真面目なる用件に關する音信の重き織物を家庭生活の細線が面白くも縫取をして居るのである。一五二七年は惱み多き年であつた。ルーテルは重患に罹つた。病床最早や死も近かりし時、幼兒のほゝえみを見るにつけ、己が後に衣食の資もなきまゝ遺し行かねばならぬ寡婦と孤兒とを思うて（人より贈られし二三の銀製大盃の外何もなかつた）、そは忽ちにして悲哀であつた。カタリネは言うた、「あなた、若しそれが神樣の聖旨であるなら、それならば私もあなたが私とよりも神樣と共に御出になる方がよいと思ひます。あなたに助けて戴かなければならない者は私と子供よりはむしろ澤山の基督者の人々です。どうぞ私の

事は心配しないで下さい」と。彼女の勇氣が夫を勵ました。彼女の手篤き看護が彼を死より引き戻した。然し艱難は茲に止まらなかつた。殆ど昔日エルフルト修道院時代に劣らざる最も烈しき憂鬱と靈的苦悶との一時代が尋で來た。其の過ぎ去るや否や、恐るべき惡疫がウィッテンベルヒを見舞うた。大學と候廷とは一時町を去つてエナに移つた。選擧侯はルーテルも之に倣はん事を命令せんばかりに懇願した。然し彼は從はんともしなかつた。彼は言うた、余は羊が最も余を要する時に之を棄てゝ逃ぐる傭工（やとひにん）たらざらんと欲すると。彼は襲はれたる町に踏み留まつた。カタリネ——産期迫れる——と幼兒ハンスも彼と共に留まつた。疫病は漁夫町より始まつた。ルーテルは自家より程遠からぬエルステル門に忽ち十八の死屍の埋められるゝを見た。疫病は町の中心に入り込んだ。最初の犧牲となりし市長夫人の斃れしはルーテルと一所に居た時であつた。疫病は彼の友人を襲うた。博士シュルフ夫人も捕はれ十一月初迄回復しなかつた。牧師の妻も之が爲に斃れ

た。ルーテルはブーゲンハーゲン一家に其疫病つきの家を棄てゝ、來りて彼と共に住まん事を勸めた。疫病は彼の家に入つた。カールスタットの義姉妹にしてルーテル家と同居してゐたフォン・モッハ夫人も襲はれた。カタリネの第二子エリザベスの誕生があつた。カタリネは危くもその稀有なる冷靜と勇氣とがありしばかりに助かつた。小兒ハンスが病氣になつた。然し最初心配したやうに疫病の爲ではなかつた。かくて煩ひの幾月は過ぎ去つた。ルーテルは漸く記していうた、「我が子供は再び壯健にして幸福である。シュルフ夫人も回復した。マーガレテは不思議な事で死を脫れた」と。此煩ひ多き時に方り一入彼の胸を痛めしものがあつた。そは南獨逸に信仰の迫害始まり、パヴリアの牧師レオナルド・カイゼルが火刑に處せられたとの報知であつた。彼の閉ぢ込められし感情はかの有名なる讃美歌を藉りて吐露せられた、

「堅き城なり我等の神は
據るべき楯なり劍なり
我等を襲へる凡ての惡より
いみじく我等を救ひ給ふ」(二)

疫病は終熄した。學生數授等はウィッテンベルヒに立ち歸つた。ルーテルは再び舊友と相會した。彼の心身の健康は回復した。

(一) ウォルヴヲルスの詩「靈魂不滅の暗示」(Intimation to the Immortality)參照
(二) マグダレナ・フォン・ボラは姪の少し後に修道院を脫出してルーテル家の一員となつた。「書翰」及び「卓話」中の「伯母レーネ」は卽ち彼女である。ルーテルの愛孃マグダレナは彼女の名を取つたのである。
(三) 日本語讃美歌には「神はわが櫓わが强き楯」云々と譯されて居る。讃美歌四三七

二　家庭生活

ルーテルの家となりしアウガスチン派修道院の空家は宗敎改革の始まりし頃ま

だ完成されなかつた建物であつて、ルーテルの周圍に集ひし眷族の次第に增すにつれ、尙ほ幾多の修繕、增築の必要があつた。其の背面は町の廓壁に對し、前窓と戸口とは大庭園に向つて開き、後窓はエルベ川の上より見張つて居る。赤瓦葺きの普通の高い屋根を有する三階建であつた。家族としては後にはルーテル及び妻、三男、二女、カタリネの伯母レーネ即ちマグダレナ・フォン・ボラ、ルーテルの姉妹の女なる孤兒二人レーネ及びエルゼ・カウフマン、並に多分姪の子であつたと思はるゝアンナ・ストラウスといふ一少女等であつた。他のウィッテンベルヒの教授等と同じくルーテルにも寄寓の學生があつた。而も彼の場合にはどうかすると相當年老い且著名の人達であつて、この善き機會に彼と親しく交際ひたいと願つて居たのである。ルーテルの家庭内部の生活につき少しく知り得る所以は之等寄寓者の記憶に基くのである。彼等は曰ふ、「改革者」は時として不機嫌らしく默つて卓に倚り時事の艱難を考へ込んで居たが、然し大抵は面白い問題を捉へて

縱橫に快談を試みた。食後凡そ一時間ばかりは或は歌ひ或は音樂を聞いて過す事を好んだ。子供等はいつも彼の爲に歌つた。そして此時間に友人は彼と話しに來り、彼は庭に降り立ち、子供や寄寓者等は其周圍に集うた。ルーテル夫妻が初めて家をもつた時には餘程困難な境遇に在つたに相違ない。彼の結婚したるは嫁資なき尼である。而して一五三二年に至るまで彼の教授俸は僅に二百グルデン、即ち今日の貨幣價値に換算して凡そ百六十磅に過ぎなかつた。外に家屋を所有した。又誰か著名なる客を饗應せねばならぬ時にはウィッテンベルヒの町會から食料や葡萄酒を臨時に贈つてくれた。それからまたルーテルは慈善の心溢るゝ人であつた。遊歷學生や修道院を逃げた僧侶や各種の乞丐等が彼の待ち合せの金を皆貰つた。金のない場合には人から贈られた銀盃をくれてしまつた。こんな事は彼の糟糠の妻を失望させたに相違ない。まだこの當初の頃の事、或時彼は無心に來た貧書生に對して、金はないが然し「之」を持つて行つて賣つたらよからう？いつ

て、妻の艱盛をも顧みず、ハンス坊に遺つてあつた小さな洗禮式用銀盃を渡したさうである。然しながらカタリネは非凡なる家妻であつた。彼女は永らく放棄されたる庭園を利用した。豕や家禽を飼養した。各種の果樹を植えた。ルーテルに勸めて尙三箇の庭園を賃借せしめ、やがて之を買取り、魚池を作り、乳牛を飼ひ、小規模の耕作を爲した。彼女はルーテルに負債が出來かゝつて居る事を注意し、無暗な慈善は何にもならない事を說明した。ルーテルは此最後の事をゑらい發見であるとなし、自分丈に止め置くは惜しいからとて、頗る思ひ切つた風に之を公表した。彼は奇妙なる古書 Liber Vagatorum 譯して「橫道之書」とでもいふべきものを捉へた——藏書家はその可笑しい中世風の通語的獨逸語と不思議な木版圖の圖解とを知つて居るだらう——而して之に頗る特殊の序文を附して眞面目に出版した。序文に曰ふ、「乞丐の橫道に關するこの小本は最初 Expertus in Truffis 、即ち書中に躍如たる其邪曲の熟知者と自稱する人が印刷したものである。……諸

侯、諸卿、國家の參事官其他何人も乞丐を扱ふに愼重細心でなくてはならぬ。又世人は神の命令に從ひ正直なる細民や困窮の隣人を扶助せずして、却て惡魔の勸告に應じ、神の審判に逆らひて無賴漢や自暴自棄の惡漢に十層倍も給與して居るといふ事實を知らねばならぬ。……是故に各町村は自町村內の貧民を調査し之を登錄して救助を圖るべきである。但し他國外來の乞丐に至ては適當なる書狀又は證明書を携ふるに非ざれば之を容認すべきではない。何となれば此書に記された大惡事は凡て此輩の所爲であるからである。若し各町村が自己の貧民に注意さへすればかゝる惡事は直に止むのである。余自身近年此種の浮浪者虛言者に欺瞞せられた事は殆ど語るを欲せざる程夥しくある」と。二年の後ルーテルが其鄕地に「慈善組織協會」の梗概を提出した時にはカタリネが夫と協力したものであらうといふことが之に由つても察せらるゝのである。一五三二年以降ルーテル家は大分樂な境遇になつた。敎授俸は二百四十磅に昇り、尙ほ現品加給があつた——穀

物、薪炭、麥芽等――之等は寧ろ俸給以上の値があつた。大諸侯からの贈物もあつた。またルーテルはライプチヒに近きヴルスドルフといふ處に小地所を購ひ、茲に家を建築することが出來た。カタリネは一方ならず之が氣に入り、屢々其處へ往つた。其地所はカタリネの兄弟の家計を助くる爲めに其手から買取つたものらしいが、若しさうでもなかつたら彼女の熱心さは甚だ不思議に思はるゝほどであつた。一度び己が家より出されし貴婦人が昔の家產の一部を手に入れた時の特別の喜びは想像するに難くない。又ルーテルが彼女の小地所に沒頭せる有樣を見て始終からかつては居たものゝ、内心如何に嬉しく感じたかを察することも出來る。

此妻子、眷族、寄客の一家は嵐に揉まれし人に取て休安の避難港であつた。彼の妻に對する愛着は窮なきものであつた、而してこは實に然もあるべき事である。何となればかゝる夫に對して斯程までに盡したる又は盡す事を得たる妻も少

いからである。「余は兎もすれば主キリストより期待する以上のものをわがケーテ及びメランヒトンより期待せんとする。然し余は知る、彼等も其他此世の何人もキリストが余の爲に苦み給ひしものを苦みし事なく又苦む能はざる事を」。之等の言は彼の結婚生活の初期に屬するものである。「余はわがケーテより離れざらんと欲する。然り、佛蘭西とヴェニスとを悉く與へらるとも離れざらんと欲する」。彼は若し彼のケーテが死したならば、而して彼がまだ青年であるとしても、何ものも彼をして再婚せしむる事は出來ないと公言した。晩年に至り自己の經驗より して言うて居る、「神の言に次ぎ、世に貴き財寶にして聖婚の如きはない。神の最上の賜は敬虔にして快活に、神を畏れ、家を整ふる妻である。之れと共に平和に生くるを得べく、之に財產、身體、生命を託ぬることを得るのである」と。ルーテルの妻に對する深き尊敬と信賴とを最も強く表はせるは彼の「遺言書」に如くものはない。彼は自己一切の所有――土地、家屋、贈物として受けたる盃、寶石等を

舉げて彼女一己の好むが儘にうち委せた。其理由は次の三にあつた、一、彼女は彼に取て「敬虔、忠實、貞節なる妻にして常に深切、熱烈に且美しくあつた事」二、彼女のみが彼の家務を心得、彼の負債を果すべき人であつた事、三、母が子供に頼るよりも子供が母に頼る方が寧ろ適當であつた事之である。彼は其卓話（テーブルトーク）中に述べたる主義を實行した。曰く「夫妻の間に在りては meum, teum（我がもの汝のもの）の問題があるべきではない。凡てのもの皆共通にして何の差別も區分もあるべきではない」と。勿論彼は夫の地位の優勝を認め又全然從順なる妻の如きは夫自ら石にでも彫刻するに非ざれば獲難き事を言うて居る。彼はケーテの言語の操縱に巧なるを諧謔（からか）ひ、或る英國の客に告げて、獨逸語に就ては妻の方が自分よりも能く知つて居るから彼女を獨逸語の先生にしたらよからうなどゝ言うた。然し妻には如何なる苦痛をも與へざらむとの深き願を有つて居た。農民戰爭の後國中擾亂尙止まざりし時、彼は「わがケーテの涙と怖とが余を阻めば」とて

親友の結婚式に行く事も辭はつた。彼の妻に與へし一通の書がある。そは滅多に或は一度も引用された事がない。其に依て見ればルーテルが深遠なる神學上の問題に關してさへ彼女の判斷を如何に尊重したかゞ分る。彼はマールブルヒより之を書き送つた。當時彼は瑞西神學者等との會議に列つて居たが、彼の態度には確かに彼らしくない處があつた。然るに唯此手紙に於てのみ彼は瑞西の反對者の見解に關し公平なる叙述を爲して居る。而して協議を破裂に歸せしめたものは彼の頑固ではなくして、惡疫蔓延の爲であつた事を妻に説得せんと力めて居るらしい。彼は他の何人にも告白せざりし處を彼女に告げていふ、「反對派は主の晩餐にありては單のパンであると主張する事を除いては、我等（瑞西派とルーテル派）は凡ての點に於て一致する。但し反對派も靈的には其中にキリストの現在を認むるのである」と。又言を續けて、誰しも皆「脱汗病」を恐れて狂氣の如くになつて居ると。「昨日之に犯されしもの五十人、中一二は死亡した」と。彼の愛情籠れる戯謔が彼

女との交通の到る處に表はれて居る。そして疑もなくそれにふさはしき妻たるの情愛を以て味解せられた。たゞ表書、その名宛に「愛する君、カタリネ・ルーテル夫人へ」とか、「ウィッテンベルヒにて、深切なる親愛なる君、ルーテル博士夫人、カタリネ・フォン・ボラ夫人へ」などゝ書いた手紙を受取るはきまりが悪かつたに相違ない。この手紙の中にルーテルはいふ、「悪い葡萄酒を飲む毎に、家にはいとも良き葡萄酒と麥酒と、加之美しい妻――或はむしろ――君があるのにと思ふと苦しい」と。但しこは勿論内部の文句である。又表書にこんなのもある、「ウィッテンベルヒにて、優雅なるわが少女、わが愛人、カタリヌ・ルーテル・フォン・ボラ・ウント・ツルスドルフへ」。それの内部には「恩寵と平和あれ、わが愛する少女、また妻ケーテ。御身に告ぐ、當方一同壯健なり――感謝すべきかな。我等は河馬の如くに食ひ（但し大食せず）獨逸人の如くに飲みて（但し痛飲せず）爽快なり」。「肉に於てはウィッテンベルヒに住ひ、靈に於てはツルスドルフにさまよへるツル

スドルフの富女、博士カタリヌ・ルーテル夫人へ、我が愛人に手渡しせられ度く、不在の節は牧師デ・ペーメランの開封閲讀を乞ふ」。「ツルスドルフの淑女、博士夫人、家市場の淑女其他何なりとも、心より愛するわが妻カタリヌ・ルーテルへ」其内容には「恩寵と平和キリストに在りて豊なれ。わがいふに足らぬ昔の愛も變らざれ。親しきケーテよ、余は途中甚だ弱れり……御身の古き愛人なるM・L」。「ウィッテンベルヒにて、博士夫人にして自己苛責者なるわが愛する妻カタリヌ・ルーテルへ、わが優しき淑女の手と足とへ」。其内容に「愛するケーテよ、約翰傳と小問答書即ち御身が時として『此本に書いてある事は皆私の事だ』と言ふ其本を讀みなさい。神が全能でないと思ふ位に神の注意を御身自身に引受くる事は是非必要である。……お手紙は皆屆いた。先週金曜日附の一通も今日落手。……御身の立腹せざるやうにと其事を記し置く」。其他表書に「碩學の婦人」とか「聖者の如き心配性の婦人」とか「我が親愛なる深切なる妻」とかいふ形容語を見受くるの

もある。書翰はみな彼女が如何に彼の爲に盡す處ありしかを現はして居る。彼女は夫を援助したる貴婦人等とも交通をなした（選擧侯夫人ジビル即ちジョン・フレデリックの妻は殆ど其夫のルーテルに對するに劣らぬ尊敬をカクリ子に對して抱いて居た）。又ルーテルの說敎及び小冊子の印刷の世話を爲し、紙の拂底の爲に印刷屋が營業をしない事などを實見した。ルーテルが旅行から歸宅した時に子供等に遣るべき特別のお土産を買ふやうな事もした。又ルーテルの粗朴の爲に感情を害した人々を和ぐるに不思義な手練を有つて居た。彼女は大家族と寄寓者とを管理し、夫不在の場合には食卓の主宰者となつた。唯一つ彼女の手に餘る事があつた。そして家族は尙年若く夫の健康は特みがたきを思ふ時に、此事が彼女の心配性の氣を揉ませるほどであつた。それはルーテルが講義に對する報酬を要求せず、町敎會に於ける牧師としての勤勞に對する町よりの俸給を受領せず、其凡ての著書に對して一錢をも受取らなかつた事である。此最後の件に就ては確に出版者と

其利益を頒つの權利があるといふ事を妻が說いたけれども、ルーテルは鈍い程動かなかつた。彼女の計算によれば、若しルーテルが自己の著書の外國語飜譯に對し出版者より學者に贈るだけの報酬を受取るとしても年々約そ四百グルデン以上に出づるのである。然しルーテルは聽かなかつた。彼は自己の著述に對しては決して金を取るまいと思うた——これカタリ子の考へた通り徒に出版者のみを利するの決心であつた。

ルーテルは子女に就て上なき悅びを感じて居た。彼は書き記した、「余は十分滿足して居る。何となれば余に三人の貴き子供がある。之れ如何なる法王黨神學者も有たざるものである。而して此三兒こそ余の世襲の三王國であつて、フェルデナンドの匈牙利、ボヘミア及び羅馬王國よりも更に確實なるものである」と。幼兒エリザベスの失せし時には（生後八ケ月に滿たずして）ルーテルはいたく落膽した。彼は書いて居る、「彼女は不思義に慕はしき、殆ど婦人の如き心を余に遺した。

かゝる憐愍が彼女に對して余を動かすのである。余は子女に對する父の心の優しさに此の如きもののあらむとは未だ曾て信ずるを得なかつた」と。次女マグダレナ即ち書翰中の「レンヘン」は姉の死後丁度一年にして生れた。彼女はルーテル特愛の兒であつた。恐らく彼の悲みの未だ消えざる前に生れたからであらう、又恐らくその母の生き寫しであつたからであらう。彼女成長して美しき又魅するほど愛くるしき乙女となつた。さうして十三歳になつたばかりで忽焉なくなつた。彼女の死は極めて安らかなるものであつた。父は屢々彼女に問うた「嬢や、レンヘンよ。お前はお父さんと一緒にいつまでも居たいだらう。しかし向ふに御出になるお前のお父さんの側へも喜んで行くかい」、「ハイ、お父さん。神樣の思召通りに」と彼女は答へた。臨終が來た時にルーテルは彼女の傍に跪き、泣きながら彼女を兩手に抱いて、神彼女を受け給はん事を祈つた。彼は妻を慰めていうた、我等は一人の聖徒を天國に送つたのであると——「さうだ、生きてる聖徒だ！我々もこんな

死に方をしたい！こんな死に方ならば今の今でも喜んで死ぬ事が出來る」。墓から歸つて來た時に彼はいうた「娘は今は體も靈も與へられて居る。我々基督者は少しも嘆くに及ばない。我々はさうでなくてはならぬ事を知つて居る。我々は何よりも確に永生を信ずる。なぜなら御自分の愛する御子の爲に我々に約束し給うた神樣は僞り給ふ筈がないから。もう我々の骨肉から二人の聖徒を主は取り給うた」。其夕又いうた「我々は子供に就ては餘程注意しなくてはならぬ。殊に可哀想な女兒がさうである。女兒の世話は人に委してはならない。男兒の方はちつとも可哀想な事はない。男は何處へ行つても働きさへすれば身を立てることが出來る。又もし働かないやうな奴ならどうせ、ならず者だ。けれども女兒にはどうしても頼る杖が要る」。彼の偉大なる心中の限なき優しさが皆この小き「レンヘン」に對する感想中に湧き出でたのである。末兒のマーガレテも大の氣に入りであつた。その四歳の時讃美歌を歌ふことが出來たと彼は記して居る。彼は子供に歌はせる

爲に讃美歌や短歌や音曲を作つた。其最も有名なるは

「高きみ空より我は來りぬ、
好き消息(たより)を家毎に傳へんと、
喜び溢るゝ嘉信(よきづれ)を齎しつ、
今そを語り又歌はんとすなり。」

此幸福なる家族の棲みしルーテル館は最早や昔の面影もなく手入せられた。今ルーテルの書齋と稱せらるゝ室は多分家族の部屋であつたらう——書齋だつたとは思へない。しかし唯一つ昔ながらのものがある——或時ルーテルの旅行中、カタリヂが夫に對する不意の贈物にとて名工ルカス・クラナッハと共に設計したアーチ型の大石造門路である。

「アーチの一端には博士五十七歳の時の肖像があつた。他端には（彼女にしてもつと小人物なりせば己が美しき面を此處に据えても濟んだらうが）彼自身の考

案に基く腕木があつた——金環の中、青き地上、白薔薇に圍まれて、赤き心臓(ハート)の上に、黒き十字架。之にはルーテル自身の説明があらうと思ふが、余の解釋はかうである、『キリストと其十字架に釘けられし事が、罪人の愛の心に宿り、之を清き良心、純なる生活と華咲かしめ、天空は上に開き、天國は前に輝く』。之れ美しき彼女の思想ではなかつたらうか——或は幾夜まどろみもせで臥したるまゝに考へもしたであらう——或は屢々ルカス・クラナッハを招きて考案意に滿つるまで打ち談らひもしたであらう——而して遂に博士の煩はしき巡視に出でたるひまに急ぎ之を仕上げたのであらう——或は事半ばにして見付かりはせじやと恐れ、或は子供等より「何」「どうして」「なぜ」「いつ」などいふ無數の質問を浴せられながら——かくて或る美しき日に唱歌拍手裡に竣工したる處へ、耳狎れし馬蹄の音憂々と街上に響き、愛する夫「大心(グレートハート)」氏は重々しく鞍より跳ねて眞直に石の上に降れば、石は忽ち彼に向て妻の愛を叫び出でた事であらう。かゝる「活きたる愛」の美

はしさよ、貴さよ、完さよ。」

想ひ見る、ライプチヒ論爭當時のルーテルの姿を。エック、法王、宗教會議に對して獅子吼しつゝ、手には一束の菫を把りて之を眺め之を嗅いで居た。今や妻と子と友とより成る家庭は彼の晩年に於ける菫の束である。ウィッテンベルヒに在るの間、夕毎に庭園に降り立ちて、妻と友とは梨の樹蔭に彼を圍み、兒女は花を摘みて彼に齎し、或は彼に教へられて歌へる鳥の聲を開き分くる、その物語の時こそいとも心地よきものであつた。薔薇を見てはいふ、「若しかゝる薔薇の一つにても作り得る人ありとせば、寔に驚くべき人と言はれるであらう。然るに神はかゝる花を無數に我等の周圍に撒布し給ふのである。神の賜物に窮りなき爲め、それは却て我等の目に入らぬのである」。或は日暮れて塒に急ぐ小鳥を見ていふ、「あの小き鳥は隱れ家を選んだ。上には星斗あり、諸界の幽玄なる蒼穹がある。然るに鳥は靜に小枝にとまりて、明日の宿りを思ひ煩ふ事なく、己が爲の憩りを神に

委せて、身を搖りながら眠に就くのである」。又は靜けき午後に水車の軋聲徐々として遠く響く時、「人の心も水車場の磨石の如きものである。麥を下に入れ置けば、轉りて之を磨り又碎き遂に麥粉にしてしまふ。但しそは自己を磨滅するのである。人心も亦その通である。何か忙しき仕事に執掌しなければ惡魔の這入り込む隙が出來て、あらゆる邪念、誘惑、苦難等の大軍が惡魔と共に押し寄せ、心を磨滅してしまふのである」。又はカタリヂが捲糸竿と亞麻とを持つて彼の側に坐し、亞麻絲を紡ぐ時に、「亞麻こそゑらい殉教者である。成熟すれば摘み取られ、水に浸され、打たれ、乾かされ、刷かれ、紡がれて、リンヂルに織られ、それが又切られ、裂かれ、衝かれるのである。……その通に信仰深き善き基督者も不信者惡人から多くの苦みを受けねばならぬ」。又は重病の折、人が校正刷を持て來た時、「神は我に手嚴しく當り給ふ。我は塊へがたきを覺ゆる。然しそれが何の爲であるかは我よりも神がよく知り給ふのである。我

等の主なる神は、いはゞ文字を後の方へ廻して置く印刷者のやうなものである。此處ではそれを讀む事が出來ない。來世に入りて印刷が終る時には凡てを明瞭直截に讀み得るであらう。それ迄は忍耐せねばならぬ」と。

カーライル曰く「ルーテルの偉大にして粗野なる心の中に子供心か母心のやうな優しき感情の呼吸の通つて居たほど人を動かすものは少い。それは極めて正直な少しも飾の雜らない、其現はれ方も有の儘の粗朴なもので、岩から湧き出づる泉のやうに清い。彼の青年時代に見られし失望、拋棄といふやうな沈んだ氣分は實にみな此の優れて思慮深き柔和、餘りに鋭く美しき感情の產物でなくして何であらうか。彼を淺く見た人にはルーテルは臆病な弱い人と見えたかも知れない。謙遜にして深き內氣な優しさが彼の重なる特質であつた。かの一度び動かされて反抗の態度に出づるや冲天の熖と燃えし貫き勇氣は是の如き心の中に起りしものであつた。……彼の日常の話しぶりは方言的にして、強く、飾りなく、朴訥にして

高尙であつた。此處彼處美しき詩的色彩を以て輝いて居た。人は誰しも彼を一大兄弟であると感ずる。彼の音樂の嗜好、之れ實に彼の心中凡ての感情の總合ともいふべきものであるまいか。口いふ能はざる多くの野趣を彼は笛の音に吹き出でたのである。惡魔が笛から逃げたと彼は言うた事がある。一方に於ては死物狂ひの反抗と、他方に於ては是の如き音樂の嗜好、余は之を大靈魂の兩極と稱する。此兩極の間に凡ての大なるものが地位を占めたのである」。

(一) ルーテルの子供は

長男ハンス、一五二六年六月七日生、ウイツテンベルヒに學び、法律家となり、プロシヤのアルバート公に仕へ、ワイマール宮廷顧問官として死す、

長女エリザベス、一五二七年十二月十日生、一五二八年八月三日死、

次女マグダレナ、一五二九年五月四日生、一五四二年九月二十日死、

次男マルチン、一五三一年十一月九日生、神學を研究す、但し常に病身であつた、ウイツテンベルヒ市長の女と結婚す、三十三歳にして死す、

三男パウル、一五三三年一月二十八日生、ウイツテンベルヒに學び、醫者となる、ドレスデンにてサクソニー選擧侯の侍醫たり、

三女マーガレテ、一五三四年十二月十七日、プロシヤ貴族アデリゲン・フオン・クンハイムに嫁す

(三) ロバート・バーボア「ルーテルの國よりの贈」一〇二―一〇五頁、ルーテル自身の説明は下の如くである「赤き心臓の上に黒き十字架、そは救はるゝが爲には我等の全心を以て釘けられたる主を信じなければならぬ、而して十字架は苦痛と自我の死滅とを伴ふも、自然性を敗壊せしむる事なく、却て心を活かしむるのである。心臓が白き薔薇の中に置かるゝは信仰が歓喜と慰安と平和とを與ふる事を示すが爲である、又白は靈と天使との色であつて、信仰の歓喜は此世ならぬ歓喜であるからである。次に薔薇が青き野に置かるゝは此歓喜が既に天國の歓喜の始であつて、天國の希望の中にあるからである。而して外側即ち野の周圍に金環あるは天國の幸福が永遠にして凡ての所有に勝りて貴きものであるからである」。

三 皇帝とルーテル

農民戰爭以來福音主義派に取ては時利あらずであつた。あの狂じみた暴動を羅馬黨は極力利用して、福音的教義を容認するに於ては歸する處みな之であると言ひ觸らした。皇帝は福音的運動を撲滅し、ウォルムス議會の勅令を實施せんと決心した。彼は獨逸に命令を下して、一五二六年スパイエルに於ける議會開會の時

を以て其實施期となした。國外に於ける政治的事件の爲め衝突は暫し防がれた。チャールスはパヴィアの戰に於て全然フランシスを打ち破つた。法王はチャールスの勢力と伊太利に於ける其影響とを恐れ、フランシスと秘密同盟を結んだ。チャールスは法王に反抗せんと決心し、最早ルーテル黨の壓服を念頭に置かなかつた。是故にスパイエルの議會に於ては「ウォルムスの勅令に關しては各邦自ら神と皇帝とに對し奉答するの所以と信ずる通りに行動し規定し處置すべし」との決定を爲した。即ち各侯國及び帝國直轄市は宗教の問題に關しては其欲する處を爲すに任せられたのである。但しこの休戰は一時的のものに過ぎないとは兩派の均しく感じたる處であつた。羅馬教諸邦は同盟を作つた。而してプロテスタントの多數も亦聯合の必要を感じた。一方瑞西及び帝國直轄市の或ものと、他方ルーテルの徒黨との間の教義上の相違に妨げられて、密接なる同盟が成らなかつたので、若きヘッセのフィリップはマールブルヒにて會議を開かん事を提議した。會議の生みた

る利益は少からぬものであつた。然し聖餐禮に於けるキリストの現在の意義に關するものを除くの外教義の凡ての點の一致が證明せられ承認せられたるにも拘らず、ルーテルの固執の爲め會議は遂に破談に終つた。其中に皇帝は法王との爭を繰めて、再び獨逸に於けるウォルムス勅令の實施を要求しつゝあつた。一五二九年にスパイエルの第二議會が開かれて、一五二六年の決定は取消された。福音主義の諸邦は之に反抗した。若し此時土耳古にしてヴィエンナを脅す事なく、又ルーテルにして萬人協力以てこの基督敎國を威嚇する危險を排除すべしと愛國的に主張する事なかりせば、必ずや內亂之に尋いだであらう。

チャールスは今や其勢力の絶頂に達した。佛蘭西を壓倒し、法王を降して同盟を結ぶの已むなからしめ、又土耳古を征服した。中世的帝國を昔日の光榮のまゝに再現せんとの彼の計畫を成就するが爲には、宗敎改革撲滅の一事あるのみであつた。ルーテル及び宗敎改革運動の壓服を强制せんとの

特別の目的を以てアウグスブルヒに議會を開かんが爲め獨逸へやつて來た。チャールスに外交上の炯眼あり、人を見るの明ありと雖も、心靈界の力に至ては遂に之を解する不可能であつた。彼は思うた、福音主義の運動を轉覆せんが爲には唯獨逸に出現して獨逸諸侯に對し其說服力を揮へば即ち足ると。是に於て福音主義諸侯に通牒を派して希望やがて命令と變ずべきものであつた。彼は全獨逸の華として威容堂々アウグスブルヒに入城した。諸侯は福音派と法王派とを問はず騎馬遠くレッヒの橋まで出で、彼を迎へた。夕に至り彼は首たる福音派諸侯を招集引見した。サクソニーのジョン、ヘッセのフィリップ、ブランデンブルヒの老ジョージ等が其中に居た。之等の人々に彼は嚴格に告げて言うた、今日まで許し來れる凡ての特權は之を廢止すべしと、又明日彼と共に Corpus Christi（聖體）行列に加はりて巡行すべしと。諸侯は拒絕した。而して若きフィリップは神學上よう事を論せんとしたが、皇帝は儼然之を聞くを拒んだ。次にブランデンブ

ルヒのジョージが立ちて、彼及び彼の同志は服従する事を得ず、又之を欲せざる旨皇帝に告げた。そは極めて鄭重なりしさはいへ、簡潔粗朴の言説であつた。殊に其結語たりし次の數語は獨逸全國に飛び、恰も麻に火の燃え移れる如き勢を以て人心を焦したのである。「私は神と神の福音とを棄てる位ならば寧ろ茲に陛下の前に跪いて私の首を刎ねて戴きませう」――老人は其手の一端を以て頸筋を擊つて見せた。「首ではない、侯よ、首ではない」とチャールスはフランダース訛りの獨逸語でいうた（"Nit Kop ab, löver Fürst, nit Kop ab!"）。チャールスは炎熱燒くが如き日に紫色の重いマントルの下に屈みながら、手には徐計な蠟燭をバチつかせて、アウグスブルヒ街中行列を作つて練つて歩いた。然し福音派諸侯はみな宿に留まつた。

此議會が福音主義の信仰に取て一危機たるべしとは長く感せられた處であつた。選擧侯ジョンは皇帝に謁見の際使用すべき福音的教義の摘要を作つて貰はんと熱望して居た。是に於て彼はルーテル、メランヒトン及び其他の神學者をトルガウに招集して、福音主義の「信仰箇條」を作らしめた。ルーテルは其伴侶と共にマールブルヒ箇條に多少の增補を加へて提出した。然しながら今少しく完全なるものゝ必要が感せられた。仍てルーテル及びメランヒトンは選擧侯と共にコーブルヒに赴き此處にて「信仰告白」の起草に從事した。業半ばにして皇帝は選擧侯を招喚し、四月末アウグスブルヒにて會見せん事を求めたが爲め、侯はルーテルをコーブルヒに遺し其他の神學者を帶同して、議會開會の地に向ひ出發した。ルーテルは籠に囚はれたる鶯の如き心地にて徒に思ひ惱んだ。彼は何人も同意し得るやうな穩和なる信仰告白を作らんとのメランヒトンの切望を知つて居た。彼は今の選擧侯に其兄の如き勢力も精神力もない事を知つて居た。彼は若きヘッセのフィリップの躁急を恐れた。數週の間何の音沙汰も彼に屆かなかつた。ルーテルは益々焦慮し、此の如くば寧ろ少くとも「彼の學生を敎ふる」事を得べきウィッテンベ

ルヒに歸らんと願つて居た。彼の書記はルーテルに關し憂はしき報導をウィッテンベルヒの家庭團に送つた。カタリネは家庭の一瞥の如何に彼を慰むべきかを知つた。是に於て彼等の良友ルカス・クラナッハに委囑して、當時滿一歲なる小兒マグダレナの像を描かしめ、之をコーブルヒに送つた。ルーテルは椅子より始終見得べき所に之を掲げた。彼を瞰下せる其愛らしき小き顔が彼を勵まして待望の長き月日を忍ばしめたのである。老いたる父はこの強いられしコーブルヒ滯在の間にマンスフェルトにて逝いた(五月二十九日)。ルーテルは未亡人となりし母に遇ひに行く事も叶はなかつた。通信は語を齎した、曰くメランヒトンの作成に係る「信仰告白」は六月二十五日議會に於て朗讀せられたと、曰く羅馬黨は駁論の準備中であると、曰く其間にも各種の會議が進行しつゝあると、曰く羅馬黨の答辯は八月三日に提出されたと、曰くヘッセのフィリップは六日突如として議會を去り皇帝に對して軍を起すさうであると、曰くメランヒトンは會議に惑亂して萬

事を抛棄せんとしつゝあるらしいと。如何にいれつたく思うた事であらう！男子が婦人の勇氣の實行を要求せられたのである——不安の中に唯待ち暮らすといふ——。彼が苛々(いらく)しく坐つて居た時に、微笑みながら瞰下せる小兒の顔が彼の心を鎭むる如くに見えた。彼は議會に於ける選擧侯の法律顧問に書を送り之を鼓舞して、神は皇帝よりも更に力强しといひ、更に續けていうた、

「余は近頃二箇の不思議を見た。其第一は窓より外を見渡して、天の星と神の美しき全蒼穹とを見た時である。而も此蒼穹を支ふるが爲に「建築師」の立てたる柱は何處にも見當らない、それにも拘らず天は墜落しないのである。莊大なる穹窿(チ)は確乎として懸つて居るのである。茲に人あり、柱を探り之に觸れ之を握らんと欲する。而して其の不可能なるを怪しみ、さながら天の必然墜落すべきかの如くに戰慄するのである。其理由たるや他なし、唯其柱に觸れ之を握るを得ざるが故である。若し柱を攫む事を得ば初めて天の確然動かざる事を知るのである。第二

の不思議は之である、余は大なる雲がさも重々しく余の上を轟々し行くを見た。そは恰も大洋の如くに見えた。而も余は何處にもこの雲を載する土臺を見ない。又之を抑制する海岸を見ない。それにも拘らず雲は我等の上に落つる事なく、上より蹙蹙して流れ去つた。然るに其過ぎ去るや、忽ち之が床となり又我等の屋根となりて之を支へしものが輝き出たのである――虹！　弱々しき床である、薄き屋根である。程なく雲の中に消えてしまつた。之を強固なる土臺といふよりは寧ろ色ガラスを通して見るが如き影のプリズムのやうなものである。從てその薄弱なる壘壁がかの恐るべき水の重みを支へたとは信じ難い。然も我等はこの空幻のプリズムが水の重みを支ふるに耐へて我等を安全に護つた事を見たのである。然るに世には雲の厚さ水の重みにのみ注意して、此薄く輕く細き虹の約束を輕視するものがある。彼等は此影の如き消え行く虹の力を感せんと欲し、而して其事の不可能なるが故に、いつも雲が洪水を齎さん事を恐れて居る」。

洪水は將に押し寄せんとして居た。福音主義の神學者等はあらゆる抵抗を試みた。ルーテルは其妻にいうた、「羅馬黨は正しく僧尼を再び庵中に取り戻さんと欲するのである」と。調停の望は絶えた。皇帝は福音主義諸侯に對し一五三一年四月十五日迄に服從すべき旨を宣言した。物みな慘憺たる爭鬪の準備と見えざるはなかつた。

さりながら憂はしき雲は過ぎ去つた。チャールスの領土擴張に伴ひ獨逸以外の地に於ける困難惹起して、彼の威嚇も未だ實行せらるゝに至らなかつた。其間に福音主義の教會は基礎を据え組織を作つた。宗教戰爭はルーテルの世を去る迄遂に破裂しなかつたのである。

第十章　福音主義教會の創設

一　教會に關するルーテルの思想

敎會史家は通常一五三〇年乃至一五五五年を以て獨逸に於ける福音主義敎會の定礎及び建設の時代とする。一五二三年のニュルンベルヒ議會の決定以來、或は少しく遲れて、かの宗敎の事及びウォルムスの勅令に關しては各邦自ら神及び皇帝に奉答する所以と信ずる處に從ひ行動し制定し處置すべしとのスパイエル議會の決定を見たる一五二六年以來、ルーテルは繁劇なる活動裡に在りながら終始此一事を以て己が至上の責務と考へた居たのである。然し忽ち玆に重大なる疑問が起る——ルーテルが斯業に傾倒した時の企圖目的は那邊に在りし乎。當時各種の紛雜せる事情ありて、爲に時人並に後世の歷史研究家をしてルーテル胸中の主要目的を探るに難からしむるのである。政治上の狀態は變動常なく、皇帝の政策は

時に明白に時に晦迷にしていつも疑惑の種であつた。獨逸監督等の福音主義運動に對する態度は時に或は和親を示し時に或は決然反對を表した。宗敎改革贊助者の間に圖らざる分裂を生じ、而も屢々社會的又は政治的事情に基いて其が現はれた。就中農民戰爭の慘劇及び其結果等——凡て之等のもの相錯綜して、ルーテルの獨逸福音主義敎會建設の事業に殆ど百面相を附するのである。彼の目的は流るゝ水の如く、たとへ其流域極めて判然たるものありしとはいへ、岩に堰かれては彼方此方と迂餘曲折して最も抵抗少き途を進んだのである。蓋しルーテルは空論家の正反對であつた。近代の所謂便宜主義の語を善き意味に解する時は、彼は、勿論多少の重要なる留保を要すと雖も、尙一個の便宜主義者であつた。而して遠き結果よりも寧ろ直接の結果を眼中に置かんとする便宜主義者氣質の缺點を有つて居た。

羅馬に對する爭鬪の初年、ルーテルの說敎及び垂訓は獨逸國民の各階級に浸入

した。不斷の印刷機使用と、皇帝及び議會の前に於ける英雄的行動とにより彼の人望は彌增した。友は其成功に驚き、敵も亦未だかくも迅速擴大なる聲望を見た事はなかつた。良選擧侯は常に、若し福音の靜肅に國中に弘布するを許さるゝならば、其眞理はやがて凡ての基督敎國又は少くとも全獨逸に滲入して、著しき動亂もなく、外形上の變化すらなき間に、平和なる勝利が得らるゝであらうとの希望を懷いて居た。ルーテル自身も同じ考を有した。彼の欲したるものはたゞ罪の赦の眞の途を傳ふる福音を說敎すべき餘地であつた。彼は思うた、之だにあらば敎會的生活及び禮拜の革新の如きは適當の時に平和に成るであらうと。ニュルンベルヒ及びスパイエルの初期議會はこの靜なる革新を演ずべき餘地を供したものであつて、而もそは漸次擴大しつゝあつた。而してルーテルは選擧侯の贊同を得て之を利用した。宗敎的大諸侯等は議會の同意を得て其領土を世俗的のものたらしめ、普通の監督等は依然敎會の監督として繼續せん事は彼の希望であつた。敎會

政治の形式に就てはジョン・ウェスレーと同じやうに無頓着であつた。而して彼が特殊の組織を作出したる其歩一歩亦ウェスレーと同じく實際上の必要に迫られての事であつた。一五三〇年のアウグスブルヒ議會及び一五四五年のスパイエル議會の頃に至る迄は、彼は尙新しき酒を古き瓶の中に貯へん事を望んで居た。現にアウグスブルヒ信仰告白（一五三〇年）の結語にいふ「我等の目的は監督の支配權の撤去にあるのではない。然したゞ此一事のみは彼等に對し之を要求するのである、即ち福音の純粹に說かるゝを許すべき事、及び罪なしには保たれざる二三の戒律を緩くする事之である」と。然るに此間獨逸の平民は未だ神の恩惠の福音に就て何等敎へらるゝ處なき儘に棄て置かれた。又監督等の福音主義運動を味解するの遲々たる、到底之を待つに堪へなかつた。獨逸國土內に開かるべき世界宗敎會議が宗敎上の相違を緩和するならんとの望は殆ど消えなんとして居た。是に於てか何等かの施設を爲すは刻下の急務であつた。

忘るべからざるはルーテル及び十六世紀の改革者等みな見得べき基督公同教會（カソリック）の存在を明白に唱導した事である、又彼等の福音主義運動を以て此の可見公同教會内殊に其の西方支派内に久しく繼續し來れる聖徒的生活の正統なる發達であると強烈に主張した事である。彼等はこの運動に參與するが爲に見得べき意味に於ての基督公同教會より離れつゝあるものとは夢にも思はなかつた。彼等が悉く見えざる公同教會の存在を說き、其根據の神の豫定にある事を敎へたことは事實である。然し此問題に關する彼等の見解を精査するときは、彼等が豫定の思想を十七世紀の空論派神學者等の如く抽象的形而上の範疇の意味に取らなかつた事が判明るのである。彼等は此語を以て信者の信仰生活と其歸趣とが究極に於ては凡て神に依屬するものであつて人に依屬するものでないといふ事を表はさんとしたのである。即ち人の命令（法王又は宗敎會議の）に對するに神の命令（豫定）を以てしたのである。是故にルーテル若くは何れの改革者も神の言の說敎、聖禮典の執行、

戒規の實行、其他基督者聖會の存在及び其善政に必要なる一切の準備を爲すに當り、彼等は、新しき敎會を創設して可見基督公同敎會より分離しつゝあるものとは思はなかつた。彼等は公同なる名稱を敵手に讓る事をさへ拒み、アウグスブルヒ議會の前後、兩黨間數次の會議に於ては、羅馬カソリック敎徒は常に公式には「舊き宗敎の信者」と稱せられた。而してニュルンベルヒの宗敎的平和條約（一五三二年）を記せる公文書に於ては、兩黨は各々「舊敎の信者」及び「アウグスブルヒ信仰告白の僚友」と呼ばれて居る。

之と同時にルーテル若くは其同志の改革者の何れも基督公同可見敎會の存在の根據が漫然監督の使徒的繼承などゝ稱せらるゝものにあるとは思はなかつた。所謂監督なるものは按手禮を以て授けらるゝ賜により司祭を創造し、司祭は又同じやうに聖禮典に由て不信者より基督者を製造するのである。ルーテルの「基督信者の自由」の思想、即ち彼の釋明したる如く一切の信者みな靈的司祭なりとの思

想は、彼をして公同教會の基礎を役員の外形的繼承に置き以て其存在を危殆ならしむるに堪へなかつた。彼にして若し羅馬教又は英國教的意味に於ける監督授任式を必要不可缺と思惟したらんには、之を贏ち得べき福音主義の監督は澤山にあつたのである。然し是の如き方法は彼等に對して用ゐられなかつた。

使徒よりの眞の繼承は教會内に於ける聖徒の代々の繼承にあるのである。聖徒とは即ち罪の告白と神の約束の信仰とを以て赦を得、直に神に縋りて新しき服從の生活に入らんとの衝動を得たる人々之である。羅馬との交通も監督の歷史的繼承も彼の眼には可見公同教會の表號ではなかつた。さりとて彼は監督の支配權に反對する事なく、羅馬廷の首長權にすらも異議を挟まなかつた。彼は過去に屬するもの、殊に自己の生誕の地たる中世教會に屬するものは凡て之を尊重した。然しながら教會を作らんが爲に之等のものは無用である。之等は唯必要なる戒規を實行するの手段たるに過ぎない。故にもし之等のものにして神の言の命令に背き

人的腐敗を以て充つるに至り、爲に眞正なる信仰生活の進歩を助けずして却て其妨害物と墮落するに於ては、之を廢棄し、代ふるに他のものを以てすべきである。而してかゝる革新を要求するに就て、人に勇氣と平靜とを與ふるものは他なし、人の靈魂は究極に於ては衷に宿れる神の言のほか絶對に何物をも要しないとの事實である。教會をして其天職たる事業を爲さしむべき改革を要求するに就て、人のあらゆる恐怖を拂除するに足るものは他なし、凡ての信者皆靈的司祭なりとの原理である。

教會が其存立の目的として神より委ねられたる事業を爲し得るが爲には何を要する乎。之に就て彼は明晰なる考を有つて居た。彼のいふ處は次の如くである、「基督の教會は神の聖語を純粹なる基督教的悟性に從ひ毫も虚僞の傳說を附加する事なくして勤勉忠實に教へられたる正直なる教役者を要する。是の如き教役者を以てして初めて——基督と其の福音、正直なる悔改と神の畏怖、罪の赦に達す

るの途、敎會の特性と其鑰の力等――の何であるか、明瞭にせらるゝのである」。此の如くにして人々は基督者の自由とは何である乎、良心は如何にしてキリストに在りて自由にせらるゝ乎等の事を學ぶであらう。之等の事や青年時代のあらゆる善き道德を兒女に敎ふるが爲に學校の必要がある。又拉甸、希臘、希伯來等の言語を知るの才能を要する。而して凡て之等の實況を知る爲め眞の取締がなくてはならぬ。中世的意味に於ける「監督」はなくもがなであるけれども、其眞の職能たる監視は不可缺のものである。

以上は獨逸の敎會改造に腐心したる頃のルーテルの考であつた。而して最初は大概の事監督の多少の監視の下に人民の手に委ね得る積りであつた。然しこの最初の考は直に抛棄せられた。農民戰爭は少くとも獨逸の「平民」に對する彼の信頼を一掃して終つた。監督より何物かを期待する事も亦無益であつた。一二の者は公然宗敎改革に加擔したけれども、全體として高僧階級は益々此運動より離れ行

くのみであつた。よし又監督等が贊同したとしても其監督管區は邦土の關係上敎區の監察支配に不適當の點少からざる事をルーテルは直に知つた。彼の必要と思惟する處を爲し得べき公吏としては唯世俗の諸侯あるのみであつた。而してルーテルは彼等に目を注いだのである。

先づ以て爲すべき事はサクソニー選擧國の田舍地方の情態を確知するにあつた。此事は「巡視」の方法に由て實行せられ、他の福音主義諸侯も亦直に其例に倣つた。ルーテルは選擧侯に勸めて、其領土内各地を巡視し必要と認むる施設を報告し且其遂行に關する最良手段に就て意見を提出すべき常設委員を任命せしめた。委員は法律家と牧師との混成であつて、法律家は敎會及び學校の維持並に貧民保護に關し必要なる法律上の施設を査察報告すべく、牧師は地方僧侶の能否、人民の精神的要求、其他類似の事項を檢察すべきであつた。視察員等は其調査上共通の標準を必要としたるを以て、メランヒトンが「視察事項」を作成し、嚴密なる訂

正を經たる上ルーテルの序文を添へて一五二八年三月之を出版した。ルーテルの序文は巡視に關する「牧會書翰」であつた。

巡視は正に當面の急務であつた。故にサクソニー選擧國の諸地方同時に行はれた。一五二五年乃至二七年の間のルーテルの書信を見れば此種巡視の必要を如何に緊急と認めたかゞ判明る。彼は既に幾度となく地方を跋渉した。彼は「民の友」であつた。何人も彼と語を交ふるを恐るゝ者はなかつた。牧師等はいつも自己の困難を彼の前に披瀝するに吝ならなかつた。彼の書翰中之等牧師の貧窮益々甚しきを加ふるの狀を描いて居る。蓋し人民の多數が新しき見解を實地に應用したる唯一の方法は、一切僧侶に拂ふべきものを拂はないといふ事であつたが爲め、僧侶の貧窮一入募つたのである。人民の考へた宗教改革とはこんなものである。彼は「平民」が僧侶若くは說敎者の何れをも尊敬せざる事を見た。全く取締なき田舍地方に於ては僧侶や牧師の家々の連に廢頽に歸しつゝある事を見た。若し此儘に放任

するならばやがて僧侶の家も學校も學生もなくなるかも知れないと心配した。而して巡視の結果、ルーテルの所言必ずしも過言に非ざりし事を明かにしたのである。發見せられしものは人民僧侶に通じての大無學であつた。ウィッテンベルヒ近傍の如きは遙に上乘の部であつたが、遠隔の地方に至つては實にみじめなものであつた。トルガウ附近の或村にては信經又は主の祈を誦する事さへ覺束なき一老僧を發見した。而も彼は降魔者（エクソルシスト）としての力の爲に最高の尊敬を受け、其奸智の實行に由て少からぬ收入を得て居たのである。また大醜行の爲に放逐さるべき僧侶等も多かつた。或は麥酒店を開き其他の俗業を兼營せる者もあつた。村落の學校は稀有にして、人々の無學は甚だしかつた。百姓の中には主の祈が長過ぎて覺えられないと訴へた者もあつた。さる土地にては農民中唯の一人も祈といふものを少しも知らない事を巡視員は發見した。

二　ウィッテンベルヒ部内の巡視

巡視とは如何なるものなりしかを知らんと欲せば、其中の一地方――ウィッテンベルヒ「部内」の巡視――を取つて見るに如くはない。委員の顔觸れは神學者としてマルチン・ルーテル、ユストス・ヨナス、法學者としてハンス・メッチュ、ベネヂクト・パウリ及びタウベンハイムのヨハンであつた。一五二八年十月巡視を開始し二ケ月を費した。彼等は其精力を注いで之に從事し、僧侶及び公共團體の代表者と協議を重ねた。僧侶には人民の狀態を尋ね、人民には僧侶の狀態を問うたのである。都市に在りては協議の相手は議員であつた。村落にありては男戸主等であつた。委員の共通事務は「靈の救療」、青年の教育及び貧民の保護等の實況を視察するにあつた。所謂「靈の救療」（Seelsorge）とは說教、聖禮典の執行、問答教訓牧師の病者訪問等をいふのである。神學者のみに屬する事は牧師の能否の評定であつた。法學者のみに屬する事は利用し得べき收入を算定し、法律上の難問に遭遇する時之を調査し、殊に修道院が數多の教區を管轄するの權ありとの想像に基く紛擾を糺明する事等であつた。彼等は少からぬ混亂に逢着した。此小地方は偏在の三監督管區より成り、人の記憶する限り曾て監察せられなかつた。クレビッツにては農民は牧師を驅逐して村の牧者を其家に入れた。ビュルチヒにては牧師の給宅もなければ自宅もなかつた。牧師は教區外に住んで居たのである。ダンナでも其通り。其處の牧師はコスキッヒに寺領を有し尙ウィッテンベルヒの附屬牧師たり而して自分はツァーナに住んで居た。牧師館は何れも其修繕行屆かず、地方當局も之を顧みなかつた。ブラタウにては牧師自ら凡ての建築を爲した――居宅も外屋も厩も牛舍も。之等の事皆適當に採錄、報告せられたのである。牧師に關しては不平は甚だ少かつた。牧師が酒を嗜み絶えず酒亭に出入するとの訴を受けた事も一度は

あつた。が然し概して不平といへば老朽事に堪へないとか、若くは全然無教育にして拉甸語のミサを口籠る位が關の山であるとかいふの類であつた。凡て改革の問題に就ては牧師等は甚だ賢く振舞つた。或教區に於ては晩餐禮を執行するに新舊兩儀式に依つた。而して人々は新しきを欲するやうであつた。某教區には二教會ありて牧師は一方を舊式禮拜に他方を新式禮拜に使用した。ブレッヂンにては百姓等が視察員に告げていうた、我等の牧師クリストファ・リヒテルは學問もあれば信仰も深く、日曜や祝節日の説教を缺かした事なく、又大抵一週四回は教區内諸所にて説教をすると。然しこんなに賞讃してる癖に自分達は一向規則正しく出席して居さうでもなかつた。精力ある牧師は殆ど悉くウィッテンベルヒにて訓練されし青年であつた。老人は皆百姓の子にして教區民ほどの教育もない位なれば、從て彼等に説教する事は覺束なかつたのである。

巡視員等は教區民の教會及び晩餐禮出席の習慣に就て嚴密なる穿鑿を行つた。

然るに何れの教區にても教會にも晩餐禮にも全然出席せざる者の三四人又は五六人を算せざる處とては殆ど無かつた。又説教には常に來るも晩餐には決して臨まないといふ處もあつた。何よりも痛切に感ぜられた事は人民の無學文盲であつた。巡視員等は直接質問を發して、先づ彼等が使徒信經、十誡及び主の祈を知れるや否やを探り、然る後言葉の意味に就て尋ねた。「神は全能なりとはどういふ意味である乎」とルーテルが或る百姓に問うた。「知りません」と答ふ。ルーテルいふ、「成程どんなるらい神學者でもさう答へるかも知れない」、然し「神は汝の父であるといふ事を知つて居る乎」。「否」。「汝が天に在ます我等の父よといふ時に、その父とは誰の事だらう」。「知りません」、之れ其答であつた。ルーテルは失望落膽して巡視より歸つた。而して其感想をいつもの力ある言葉もて披瀝した。巡視より歸來直に着手したる其著「小問答書」の緒論にいふ、「此問答即ち基督教々義をかくも單純、簡短、平易なる形に現はしたるは、近時余の巡視員として發見したる

情態の餘りに悲慘なりしが爲め實に已むを得ざるに出でたのである。あはれ其みじめさよ。平民は基督教々義に就ては少しも知らない。殊に村落に於てさうである。そして遺憾ながら多くの牧師は殆ど人を教ふる事を知らない。人皆基督者と稱し聖禮典に與るけれども主の祈も信經も十誡も知らない。福音既に來りしが故に彼等は如何にせば其自由の濫用であるかを十分學んだにも拘らず、憐むべき牛や心なき豚の如くに生くるのである」。

牧師は殆ど書を有せざるが爲め少しも神學を研究しない事を巡視員は發見した。此人は十二巻の藏書を有したといふ事が驚くべき事であつたのだといふ。かゝる人達の説教により偉い教化が出來るとは思ひ寄らない。巡視員等はルーテルの傍註若くは福音書及び書翰に關する短き説教集の寫本を、牧師より會衆に讀み聞かせよとの命令を添へて各教區に送らん事を進言した。老朽の牧師は甚だ穩當に取扱

はれた。リースニッツの老牧師コンラッドの如きは全然事を取るに堪へなかつたが、次の如くに取り定められたのである。即ち俸給と住宅とは終身彼に給せらるべき事、また其助手を彼の食卓にて食事せしむべき事を約束した。巡視員等は又村落に絶えて學校の存在せざるを發見し、小都會の學校の多數に就ても失望した。彼等は牧師が村落の學校教師となるより他に術なきを知つた。故に牧師をして常に人々を誡めて其子弟を學校に送らしめ、又兒童の問答教育を以て日曜日の教會役事の一部たらしめん事を要求した。都市の學校改善に就ても彼等は種々の提言を試みた。又教會の「唱首」即ち音頭取をして兒童に福音的讃美歌を歌ふの訓練を授けしめた。

貧民保護に關する調査に於ては、村落に施設の必要あるもの少きを知つた。然し都市に在ては事情を異にした。大多數の都市は貧民の爲の舊き基金を有するに

拘らず、其管理使用の方法甚だ不都合なる事を發見した。故に之を改善して確實なる財團たらしめんとの注意を與へた。

以上ウィッテンベルヒ「部内」の事情に關し極めて簡約に述べたる處を以て略巡視の一班を窺ふに足るであらう。素より其効果の滿全を期するが爲には第二第三の巡視の必要があつた。けれども結局事は無益に終らなかつた。選擧侯は沒收された修道院の土地財産を一般民事の目的に使ふ事は許さなかつた。牧師の俸祿學校教師の給料は貧民の爲の設備と共にサクソニー選擧國を通じて次第に確立せられた。

爾來多少サクソニー式に則りたる巡視が獨逸國中到る處に行はれた。而して福音主義諸邦に對する各種の宗教法令は之等巡視より生れ、かくて徐々としてルーテル教會今日の教務院制度を馴致したのである。その教會組織を形成するに至り迄運動を仔細に研究するに、發達は常に必要に迫られつゝ徐々として進みしも

のである事、並に教會の會員なればとて人民をして教會の組織及び支配に參與せしめむとの考のなかりし事が判明る。而して最後に落ちつきたる態は中世の教會地方政治への復歸であつた、獨逸のルーテル教會の教務法院は中世監督の教務法院に酷似して居る。唯後者にあつては法院議員は監督に由て任命せられ監督に對して責任を負ふに反し、前者に在りては其形態の如何を問はず地方最高民事當局に由て任命せられ之に對し責任を負ふのである。福音主義(ルーテル派)型教會組織と改革派(リフォームド)(カルヴィン派)型との著しき區別も亦茲にあるのである。

サクソニー巡視の産物として興味あるものはルーテルの大小問答書及び前に比し頗る浩瀚なる新讃美歌集である。此三書を作るに當りルーテルが古きマンスフエルトの家庭に小兒たりし折の己が訓育を思ひ浮べ、自ら父母より受けたると同じ福音主義の教育を獨逸の凡ての小兒に授くべき途を開かんと希ひし事は想像するに餘ある。小問答書はルーテル其儘である。彼に非すして此書を書きし者があ

るとは思へない。其序文も亦特徴を現はして居る。之を使用する牧師に對し注意していふ、何よりも先づ本文（テクスト）を異にし又は形式を異にする十誡及び主の祈を用ゐる事を避けねばならぬ。」學者智者に說教する時には說教者の熟練により出來るだけ巧妙に箇條を變換按排するも宜からう。然し少年に對しては常に一形式を固執し……逐次之を教へて復誦暗記し得るに至らしめよ」。その完全に語を覺えし時初めて教師は說明に入り、而も之を爲すに質問又質問を以てすべし。第一誡の明瞭に了解せらるゝ迄第二誡を說明してはならぬ。小問答書を全然了解したる後大問答書を同じ方法にて續くべきである。かくて語を結んでいふ、「今や我等の務めは法王の下に在りし時とは異なるものとなつた。そは今や眞實の務めとなり人を救ふの務めとなつた。故に一層煩累多く辛勞もて充ちたるものである。一入危險と誘惑との附き纏へるものである。加之此世に在りては報償と感謝とを齎す事少きものである。然りながら我等若し忠實に働かばキリスト御自身が我等の報償とな

り給ふであらう。かくて凡ての慈悲の父は我等を助け給ふであらう。讃美と感謝窮なく主キリストに由て父にあれ」。

小問答書は六節に分れて居る——十誡、信經、主の祈、聖洗禮典、如何にして無智の民に罪の告白を教ふべき乎、及び祭壇の聖禮典之である。而して尙二個の附錄がある。其一は個人用朝夕の祈禱と食前食後の感謝である。其二は主として聖語中よりの篤信なる思想の拔萃である。

一例以てルーテルの問答書の書き振りを示すに足らう、

「祭壇の聖禮典とは……

「然らば此聖禮典を受くるの資格ある者は何人である乎。

「答、斷食其他肉體的準備も良き外側の訓練たるを失はない。然し眞に其資格あり其準備ある者は『汝等の爲に與へ罪を赦さんとて流す』との語を信ずる人である。之を信ぜざる人は其資格なく其準備なき者である。何となれば『汝等の爲に』

といふ語は眞に信ずる人たる事を要するからである」。

ルーテルは毎朝自ら此問答を誦するを常とした。彼は思うた、神學を事とする人々は他の人に勝りて、信仰の基礎及び眞髓の畢竟如何に單純であるかといふ事を絶えず念とすべきであると。

大問答書は小問答書の思想を七倍位の長さにして繰返したものである。此兩問答書と「基督信者の自由」に關する論文とが凡てルーテルの教の骨子と其精華とを含んで居る。小問答書及びアウグスブルヒ信仰告白は何れのルーテル教會にありても遵奉せらるゝ二信條である。

三　教育改革者としてのルーテル

巡視の結果の尙一のものは獨逸全國殊に地方に普及する公立小學校類似の制度の設立であつた。唯に上流及び市民階級のみならず、人民全體の兒女の教育といふ事はルーテルの孜々として努力したる目的の一であつた。彼は其「獨逸の貴族に與ふる書」に於て不用に歸したる多數の修道院を其原始の用途に引き戻して兒女の教育所たらしむべしと建言した。彼の書翰を見れば健全なる良教育の獨逸國中に普及せむ事を欲ふの情を以て燃えて居る。一五二四年に彼は有名なる「獨逸國諸市の市長及び議員に望む」を書いて、都市に博大なる教育制度を設立せん事を促した。彼の何よりの切望は如何なる貧家の兒童と雖も凡て讀書習字算術を練習せしめむ事にあつた。若し兩親の生活上兒童の勤勞を要すると言つて抗議するものあれば、彼は答へるのである、自分の積りでは兒童はたゞ一日中僅かの時間を學校で費せばよいのであつて、其他は自家で商買を覺ゆる事が出來る。さういふ風にすれば勉強と仕事とが足並を揃へ互に助け合つて進むであらうと。彼は言ふ眞の困難は青年を教育して人類に貢獻すべき良市民を作らむとの眞摯なる冀望の缺如であると。又言ふ、「惡魔は愚物やなまけ物を大に好む」事を記せよと。然し

ルーテルは兒童各自に授くべき敎育の最低限を論ずると共に、又明敏の小兒には更に大に敎育を施さゞるべからざる事を主張した。而して多くの無用なる宗敎的基金を利用すれば小兒の爲にも少女の爲にも立派なる高等學校を設立し得ると說明して居る。次に又圖書館は寔に良き敎育機關なるを以て市町會に勸めて良圖書館の設置を迫つて居る。

斯く祖國の少年の敎育を統一して最低村立學校より上は大學に至る迄一體たらしむる廣大なる敎育制度整理はルーテルに取ては「切なる空想」たるに止まらなかつた。彼は到る處に出來る丈け之を實現した。例へばウィッテンベルヒ町會を慫慂して女學校を設立せしめ、自らエルゼ・フォン・カニッツを聘して校長たらしめた。彼の手紙にいふ(一五二七年五月二日附)、「御身は拙宅に寄寓して危險と煩累とを避けられよ、されば右の求めを斥け給はざらん事を乞ふ」と。グリンマの女學校は第一次サクソニー巡視の一成果であつた。而してルーテルの舊修道院長の妹

又は姪に當るマグダレナ・フォン・スタウピッツが校長として赴任した。ルーテルは富裕なる淑女紳士より貧窮學生の爲にすべき給費制度の資金の寄贈を受けた——ドロテア・エールダル夫人の五百グルデンを筆頭として。マンスフェルト伯爵家にてはルーテルを悦ばすべき贈物として彼の兩親居住の地に高等學校を設立するより良きものを考ふる事は出來なかつた。彼は農民戰爭の將に破裂せんとする頃往いて其開校を爲した。其他例示の煩を避けて、リヒテルの蒐集したる獨逸福音敎會組織に關する數多の法令を見れば、殆ど其何れにも公立小學校を以て敎會及び國家の安寧に必要不可缺のものとなし、公立小學校に於て授くべき敬虔なる少年敎育に關し明白且眞摯なる規定を爲せるを見る。

之等の理由よりしてルーテルは一般に獨逸に於ける現時の學校及び大學の創設者と認められて居る。但し此定評の當れるや否やを疑ふ者も少くない。エラスムスの咆哮は有名なるものである:"Ubi Lutheranismus, ibi literarum interitus"(ル

ーテル主義のある所、必ず文學の死滅を伴ふ)。デリンゲル、ヤンセン、バウルゼン等も亦皆宗教改革の運動とルーテルの感化とは共に學問に非なりしを公言して居る。彼等はルーテルの時代より遙か以前獨逸に高等學校の存在せし事及び一五二〇年以降高等學校及び大學の衰頽に傾きし事の證蹟を擧げて居るのである。中世時代に獨逸に於て學校あり又學問に關する規定ありし事は疑ない。大都市の設立せる女學校すらも二三はあつた。マイン河岸のフランクフォルト及び其他の獨逸諸市には既に十五世紀の初め尼ならぬ女校長を戴ける女學校があつた。修道院に於ても學問の狀態の許す限り女子教育の施された處がある。一二六〇年にサクソニーのロドアルデスドルフ(後にはヘルフテといふ)の小修道院は其快活なる若き尼院長ハッケボルンのゲルトルーデの下に殆ど中世の "Girton"[1] であつた。是の如く中世時代の學校及び學生々活の證據を擧げんと欲すれば幾頁を充す事が出來る。又宗教改革運動の初年に學校及び多數大學の就學の著るしく減少した事も

事實である。其理由は明かに時勢の激變と未來の不安とにあつた。後日其息子を富裕なる宗教的地位に就かしめんと欲して高等學校及び大學に送りし貴族(富裕なる地位は殆ど悉く貴族の爲に留保せられて居た)、同じやうな期待を其息子に就て抱きし市民、嘗ては子供を僧庵又は村落の牧師館に入れて係累を少くせんと欲せし貧民農民[illegible]才働者等はみな其望の水泡に歸した事を見たのである。數年前ならば凡て學生たるべかりし人々がかゝる恐怖の爲に引き止められた。加之ルーテル主義の運動は疑もなくスコラ學者の舊學問と其の茶飯事を勿體らしく諄々(くどく)と論議する風とを嫌忌せしめた。人文學派も亦漸く徹々として振はなかつた。されば熱烈を愛するの士若くは貪[illegible]むの輩は學生々活に身を委ぬる事を躊躇した。而してルーテルは後世の批評家に[illegible]鑑に之等凡てを感じて居たのである。彼はいふ、若し子供が牧師となり僧となり尼となり生計を獲るに非ずんば何故彼等を教育する必要があらう乎と人々は言うて居る」と。又いふ、獨逸を通じて學校

は漸然衰へ大學は次第に寂れつゝある事を認むると。是の如きは已むを得ざる事實であつた。これ到る處の現象であつた。舊き刺戟物は漸く消え失せて、新しきものは未だ人心に根を卸すに至らなかつたのである。

さりながら定評はやつぱり正しいのである、獨逸が其いみじき教育制度の根柢と其觀念とを負ふ處のものはルーテルである。何となれば彼は教育の普及を論じ身分又は職業の如何に拘らず國民全體の教育を主張したる第一人者であつた。如何なる村落にも學校なかるべからずとは彼の動かすべからざる思念であつた。獨逸國民をして其子女に成し得る限り善き教育を授けむとの欲望を懐かしめし者は彼であつた。而して畢竟生きたる欲望ありてこそやがて其實現を見るのであるから、之を懐かしむるは即ち事の根柢である。此欲望一度び起るや、そは神に對して負ふ處ある聖き欲望なりとの情念に由て一入強められ、かくて獨逸國に取ては欲望を失ひたるスコラ學風の制度よりは遙に貴きものとなつた。シュミッド博士編

纂に係る獨逸教育全史に執筆したる學者等は獨逸現代教育の粋を以て殆ど悉くルーテルの力に歸して居る。彼は教育がスコラ學風の權威の下に蹂躙せられんとするを救うた。彼は課業を興味あるものたらしめん事を主張し、讀本用にとてイソップ物語の一刊本を作つた。又挿畫解説により耳と共に眼を以て教ふるの法を發明した。彼は又最低の村立學校より上は大學に至る迄教育の全制度を統一した。

かくて福音主義教會の基礎は据えられ、宗教改革の事業は鞏固なるを致した。其茲に至る迄には許多の困難を犯した。又未だ法律上一定の地歩を取得するに先だちて爲された。絶對に必要なりとせられし監督及び戒規の二者は復活し、而も十五六世紀の中世教會の企及したるより遙に純粋なるものとなつた。但し進歩は遲々たるものであつた、そは遲々たらざるを得なかつたのである。個人にありても社會にありても聖潔（きよめ）は常に一の「行爲（おこなひ）」である。新聖會の未熟、舊牧師の惡習、人民の不注意と敵意、貴族及び平民の貪慾等は漸を以て征服せられ、道德的刷新は

次を逐うて始まつた。之を詳說せんと欲すれば勢ひ獨逸の恥辱たる十五六世紀の貴族市民兩階級の墮落不品行に論及せねばならぬがそは心地よき問題ではない。但し十五世紀後半及び十六世紀初年の獨逸諸都市の記錄を精査すれば歷史には通常載せられざる事情を知り得るであらう。ルーテル敎會の征服せんと欲したるは即ち之等のものであつた。而してそは大體に於て成功したのである。

(一)ケムブリッヂ大學附屬女學校

四　ルーテルとツキングリー

本章を終るに先だち一言注意すべきは、ルーテル主義の運動は羅馬敎會より分離したる者の大多數を包含せざりし事である。實に其第二期に及びては獨逸宗敎改革の大部分は寧ろ嚴密にルーテル型の敎義及び組織を棄てゝ改革敎會（リフオームド）の傘下に走つた。而して此事はルーテルの死後迄起らなかつたけれども、彼がツキングリー

及び瑞西黨との提携を斷乎として拒みし一事は其主因と稱するに足るのである。故に少しく其論爭を敍するの必要がある。

ルーテルとツキングリーとを分離せしめたものは主の晩餐の聖禮典に於けるキリストの現在の問題であつた。今其論爭の全體を兩論爭者の凡ての論文と共に通觀するに、ツキングリーとルーテルとの意見の間に何等矛盾の點なかりし事を知るのである。反對の見解は實は補足的のものであつた。一方の明言したる處は暗に他方の默認したる處であつた。ルーテルとツキングリーとは問題に近づくに二個の異なりたる着眼點よりしたのである。而して討論に際し二人は相互に了解せず又精確に對立もして居なかつたのである。

由來基督敎會は聖餐禮に三大思想の含蓄せらるゝとなすものである——公認、記念、及び交通又は參與之である。而して其儀式は常にキリストの十字架上の死と密接の關係ありとせられた。我等は之に依てキリストの死と其意義とを公認

し、其犧牲を記念し、釘けられたるキリストに參り又は彼と交通するのである。此最後の「參與」なる思想も決して基督教會の心をキリストの死より離す事なく、却て其死を通して之を復活したる生ける救主に繋ぎ聖靈に由て彼と交際する事を得しむるのである。

此聖禮典に由る記念と參與とは之に附隨する凡ての靈的祝福と共に其與奪一に司祭職の手中にありとは中世教會の主張であつた。彼等のみが十字架に釘けられて復活したるキリストを禮拜者と最も密接なる關係に立たしめ仍て聖禮典による記念と參與とを可能ならしむる事を得るのであると。而して此要求よりして中世の化體說が發生したのである。又中世教會は聖靈典を以て記念及び參與の兩思想を表はすに二個の異なりたる樣式を用ゐたといひ得る。即ち僧侶のみが之に與るミサと平信徒も之に加はるユーカリストとである。若し此言ひ方が强過ぎるならば、少くとも禮拜（クルタス）に於ける前記の區別が中世の教義に對する觀察と駁論とを二途

に出でしめたといひ得るであらう——但し何れも暗々裡には記念及び參與の兩思想に關聯して居るのである。

此二途中ツキングリーは其第一に由り、ルーテルは其第二に由て中世の教義に接近した。

ツキングリーを反撥せしめたものは中世教會が記念の思想を度外視して代ふるに反覆なる思想を以てしたといふ事實であつた。蓋し中世の僧侶は按手禮に於て授けられし奇蹟力に基き己が前なるパンと葡萄酒とをイエスの眞實の體と血とに變ずる事を得、又其が爲された時には彼の齒を以てパンを噛み碎くにより十字架の苦痛を再現する事を得ると主張したのである。この聖餐禮に關する中世の教義を思ふ毎にツキングリーは聖餠を咀嚼するに由つて十字架の苦痛を繰返すと稱する僧侶を見て戰慄した。彼の心に取ては事は恐るべき褻瀆であつた。加之そは唯一の大犧牲を汚すものである。又記念といひて反覆といひ給はざりしイエスの言葉

に背くものである。記念とはイエスの死を覚ゆる事である。參與とは其死により
て成りし贖罪に與る事である。然し贖罪は信仰に由て獲得せらる。我等のキリスト
を受くるは信仰に由るのであると。之れ即ちツキングリーの第二の思想である。
反覆に非ずして記念である、口を以て食ふに非ずして心に信ずるのであると。此
の如きはツキングリーの二大思想であつた。然し彼が信仰とは常にキリストとの
靈的結合又は接觸であるとなした事も亦記憶せねばならぬ。されば聖餐禮に於て
は信仰によりて實現せらるゝ「キリストの眞實の現在」があるのである。かくて
彼の說の完成するに及び初めて聖餐制度（インスチテウション）に關するキリストの語に說明を與へて
「なり」とは「表はす」の意味であると言うた。
（三）
ルーテルを反撥せしめたものは中世の敎義が信者皆靈的司祭なりとの聖書の思
想を蹂躙せる事であつた。彼は化禮說及び個人的ミサを以て其最も著るしき實例
なりとして之に反對した。此問題につき初めて筆執りし時（一五一九年）彼の主

張は「盃」を平人にも與ふべしといふにあつた。然し彼の說敎の中に彼の立場の
全體に光を投ずる興味ある叙述がある、即ち聖禮典に於て「受餐者はキリスト
と其聖徒とに結合してキリストの生涯と苦難及び聖徒の生涯と苦難が受餐者のも
のとなる」といふ。贖罪が主に由て、而も唯主のみに由て成し遂げられし事を主
張するに於て何人もルーテルより强き者はない。故にルーテルが主及び其聖徒と
の結合と言へる時に贖罪を指して居た筈がない。彼の意（ところ）は聖餐禮の要領はイエス
との眞の交通を爲すにある、イエスの弟子及び聖徒等の爲したる如き交通を爲す
にあるといふのである。勿論キリストの死を離れて彼との交通はあり得ざるが故
に其死にも關係はあるに相違ない。然しながらその關係たるや間接である、交通
なる思想を通してゝある。聖餐禮に於て、我等は恰もキリスト地上を步み給ひし
時弟子たち彼に接觸したるが如く、又槃を被せられたる聖徒等の今日彼に接觸す
るが如くに彼に接觸するのである。かく聖徒にも言及する處を以て見ればルーテ

ルは聖餐禮に於てキリストの十字架に釘けられし體ならぬ榮光を被せられし體の現在を見たものである事がわかる。然らば即ちルーテルは聖餐禮の要領は信者たる受餐者をして生ける復活のキリストとの直接親密なる交通に入らしむること猶ほ榮光の生命に於ける聖徒の如くならしむるにあるを信じたのである。而して之が爲にはキリストの榮光の體が聖禮典中に現在する事を要した（ルーテルは之を局所的現在と考へた）。受餐者は之と接觸するを要するのである。然しながら活ける復活のキリストと交るといへば自らキリストの死及び其死に由て成就せられし贖罪を獲得することを含む。尙又聖餐物に於けるキリストの局所的現在といふも何等特殊の奇蹟を必要としない。何となればキリストの榮光の體の遍在に基きそは何處にも現在し從て聖餐物中にも自然に現在する。而して凡て尊敬と信仰とを以て聖禮典に與る者には神の約束賦與せらるゝが故に、此自然の現在はやがて又聖誓的（サクラメンタル）現在となるのである。

兩神學者何れも他の明白に叙述したる處を暗默に承認して居た。ツキングリーはキリストの死に對する關係を前景に置きしも暗に復活のキリストに對する關係を認め、ルーテルは復活のキリストとの交通を前景に置きしも十字架に釘けられしキリストとの關係を認めたのである。

一方は甚だ淺薄なる註解を援用し、他方はスコラ的空間說を主張した。從て論爭の起るや不幸にも互に反對說の最弱點を攻擊した——ルーテルはツキングリーの註釋を、ツキングリーはルーテルのスコラ的空間說を。

之が和解を目的としたる最も著るしき企は一五二九年マールブルヒ會議に於てヘッセのフィリップの試みたるものであつた。此時ツキングリーとエコランバヂウス（本名ホイスゲンよりハウスシャイン即ち家のランプと變化し更に之を希臘語に直したのである）は瑞西側を代表し、ルーテルとメランヒトンはサクソニー側を代表した。此會議は聖禮典の教義に就ては和合を見るに至らざりしも、其他基

督教の信仰に關する一切の點に於ては改革派神學者は全然一致することを明にした。それにも拘らずルーテルはツキングリーと握手するを拒んだ。其のち程經てツキングリー黨は雙方の教義を結合したるカルヴィンの說を受け容れ、ルーテルは自分も其を以て滿足する旨公言した。而してカルヴィンはアウグスブルヒ信仰告白に署名した。ルーテルの死後彼の徒黨にして彼自身よりも激しきルーテル主義者等は其讓歩を拒んだ。かくて宗教改革は遂に二分するに至つた。

（一）ミサは本來ユーカリストと全く同意義に用ゐられたけれども、宗教改革時代より區別して、贖罪が生者死者の爲にキリストの體と血との犧牲を献ぐるといふ一方面のみを指す語となつた。

（二）「これは我身なり」「これ新約の我血なり」（馬太、二六の二六、二八、馬可、一四の二二、二四、路加、二二の一九、二〇）

第十一章　ルーテルの晩年

一　ルーテルの政治的勢力

ルーテルの晩年は不斷の勞働とうち續く不健康との間に過された。彼は「福音」の爲とあれば常に疲れ切る迄働いた。若し其の親讓りの鐵の如き體格なかりせば、自己の義務と考へし凡の勞働に堪へなかつたであらう。彼は二度び死の門に立つた。一五三七年二月世界會議召集の提議を容るゝの可否を論ずべき神學者の會合に出席せんとてシュマルカルドに赴きし時恐るべき「結石」病に惱んだ。それをも犯して彼は說敎した。而して病は愈々募つた。彼は烈しき苦痛の一週日を過した。其身體は振れ上り病氣は暫らくも衰へず、人は皆恐れた。而して彼は死を期した。遙に離れ居たる妻子を思うて彼は心を痛めた。選擧侯は彼等を「自家の者として」保護せん事を約束した。其上合憎と必要なる醫療器具がシュマルカルドでは得ら

れなかつた。そこで病重しと雖も彼を移す事に決した。旅行は長き苦みであつた。
然し馬車の動搖が醫者の手の及ばざる效果を奏したらしい。苦痛の去るや否や彼
は妻に心配せざるやう手紙を書いた。旅行は徐々として進んだ。ワイマールにては
姪のレナ・カウフマンがウィッテンベルヒより來つて彼を迎へた。彼は安全にケー
テ及び彼の家庭に歸着した。其處にて手を盡したる看護が再び彼を本復せしめた。
一五四一年に恐るべき病患は盛り返し又も生命の望を失つた。然し注意深き看護
に由て回復した。かやうな病苦が何か重大なる關心事のある時々に起つた。生命は
取止めたけれども彼は常に病身であつた。而して身體の無理使ひが絶えざる苦痛
となつて酬ゐた。此最後の病氣中彼は友人に告げていうた、今や余の頭腦は恰も
柄まで使ひ耗らして全く切れなくなつたナイフのやうであると。彼の父は一五三
〇年彼のコーブルヒ滯在中に歿した。母は其の後一年間生きて、一五三一年六月
三十日に死した。ルーテルは感動すべき手紙を母に送つたが、そは恰も臨終に屆い

た。其終にいふ、「子供等もカテもみな母上の爲に祈つて居ます。泣く者もありま
す。小さい奴等は食べては言ひます、『祖母上(おばあちやん)が大變お惡(わる)い』と」。小兒ハンスと赤
子レナとが小さな頭を搖(ふ)つて口一杯に頰張りながら何か繰返し言ふのを見るやう
である。己が見たる事を描寫し又繪畫を想像する事はルーテルの特徴であつた。
極めて抽象的なる問題にすらそれが現はれるのである。アウグスブルヒ信仰告白
中基督敎的完全の敎義を論ずる時、彼は神を畏るゝ獨逸の市民と跣足の托鉢僧と
を眼中に置いて居る。曰く「基督敎的完全とは之である、誠實に神を畏れ、又大なる
信仰を有し、又神はキリストの爲に我等に和らぎ給ひし事を堅く信賴し、我等各自
の職業に從ひ事每に神の助を求め且疑はずして之を待ち望み、而して外には我等
の業務上善き仕事を爲す事之である。眞の完全と眞の神の禮拜とは玆にある。そは
獨身にもない、物乞にもない、又汚服を纏ふ事にもない」と。「我等の日用の糧を今
日も與へ給へ」の意味を註釋する時、彼は飽食暖衣の獨逸小兒が其小き足の濡れぬ